

TOHOKU GAKUIN ARCHIVES

東北学院資料室

特別寄稿

『榴(つっじ)物語』

久能 隆博

寄稿

『東北文学』に集った人々(一)

渥美 孝子

押川方義 そのひと(二)

河西 晃祐

杉山元治郎と日本農民福音学校運動(二)

岩本 由輝

弁護士時代の鈴木義男(4) —美濃部亮吉の弁護—

仁昌寺 正一

「高山樗牛冥想の松」記念碑建立と萱場資郎

鶴本 勝夫

Vol. 9

2010.4.1



専門部校舎 (現在大学本館)

大正15年7月完成。10月に校舎落成式と併せて創立40周年記念式典が挙行され、押川、ホーイ、シュネーダーの三校祖がそろって参列しました。J・H・モルガン設計、施工監督はニコデマス。延べ床面積600坪、23万円の巨費を投じ、耐震性を配慮した構造で、鋼鉄の窓枠やリノリウムの床はアメリカから輸入されました。外壁は秋保の自然石で当時の学校としては最高のチューダー・ゴシック風の鉄筋コンクリート造り3階建てです。キリスト教主義の教育を施す目的のために、多くの懐かしい篤志家からの献金によって建てられ、現在も大切に使い継がれています。



学校法人 東北学院

CONTENTS

ごあいさつ

「東北学院資料室」第9号発行にあたって 星宮 望 ……………1

特別寄稿

『榴(つつじ)物語』 久能 隆博 ……………2

寄稿

『東北文学』に集った人々(一) 渥美 孝子 ……………7

押川方義 そのひと(二) 河西 晃祐 ……………18

杉山元治郎と日本農民福音学校運動(二) 岩本 由輝 ……………22

弁護士時代の鈴木義男(4) 一美濃部亮吉の弁護—
仁昌寺 正一 ……………29

「高山樗牛冥想の松」記念碑建立と萱場資郎
鶴本 勝夫 ……………34

所蔵資料紹介

宮城中会記録 ……………40

労働会会員名簿と日誌 ……………41

東北学院卒業証書第一号 ……………42

2009(平成21)年度行事

経営学部、経済学部共生社会経済学科新設(4月) ……………43

オリエンテーション・リーダー会50周年記念祝賀会開催(9月19日) ……45

東北学院榴ヶ岡高等学校創立50周年記念式典・祝賀会開催(11月13日) …46

東北学院大学博物館開館(11月18日) ……………47

時事(2009年1月～2010年3月) ……………48

受贈図書資料一覧(2009年1月～2010年3月) ……………50

資料室来室状況(2009年1月～2010年3月) ……………51

東北学院の沿革 ……………52

東北学院資料室規程 ……………58

「東北学院資料室」 第9号発行にあたって



東北学院 学院長 星宮 望

土樋キャンパスのラーハウザー記念礼拝堂地階に設置され、多くの同窓生、学生、生徒、そして一般の方々にご利用いただいております東北学院資料室も本年で9年目を迎えることができました。本学に関する伝統と歴史、そして「創立の精神」を将来に伝承するという資料室本来の目的をささやかですが果たしていることに感謝しております。

資料室では、キリスト教主義（プロテスタント）に基づく学校教育を目指し、1886（明治19）年に創設された「仙台神学校」時代から今日に至るまでの東北学院に関する歴史を将来に伝承するとともに、「建学の精神」に関連する貴重な資料を収集・保存・展示し、東北学院の発展に寄与することを目標に日々活動を続けております。アーカイヴズを大切にすることは、歴史ある東北学院の生きた証であり、「建学の精神」の再確認にもつながることが期待されます。

資料室設置当初から発行しております資料室年報も第9号をお届けすることになりました。内容も資料室の年間活動報告に加え、東北学院に関する歴史上の人物や資料に焦点を当て、知られざる一面をご紹介しますなど充実した資料誌として刊行できればと考えております。今号では、2009年に創立50周年を迎えた東北学院榴ヶ岡高等学校校長の久能隆博氏に「榴（つつじ）物語」、また、本学教養学部教授渥美孝子氏には明治26年発刊の東北学院文学会機関誌

「東北文学」に集った青年たちに光を当てて、その生の軌跡をたどっていただきました。そのほか、河西、岩本、仁昌寺、鶴本の各氏にも前号に引き続きご寄稿いただきました。

また、前号でもお知らせいたしましたが、現在、資料室では所蔵する貴重な歴史資料全体の中から記録として価値が高いと思われる写真や文書などのデータベース化の作業を進めております。これは東北学院創設以来の貴重な歴史資料の散逸、劣化を防ぐためにも有効な手段であり、資料室を利用される方々にとってもこれまで以上に写真などの資料の利用や検索が容易になるものと考え、地道に取り組んでおります。

東北学院資料室ではこれからも創設時代から今日に至るまでの東北学院に関する歴史を伝承し、「建学の精神」を後世に伝えてまいりたいと思っておりますので、ご協力をよろしくお願いいたします。



『榴（つつじ）物語』

東北学院榴ヶ岡高等学校
校長 久能 隆博

第1章 東北学院榴ヶ岡高等学校50年の歩み

1886（明治19）年、6名の学生と2名の教師から始まった仙台神学校から123年の歳月を重ねた東北学院の一員として、東北学院榴ヶ岡高等学校は今年創立50周年を迎えた。1959（昭和34）年、仙台の榴ヶ岡公園の一角より1学年135名3クラスの榴ヶ岡校舎として始まり、1972（昭和47）年独立校として、泉の地に移転した。独立時の2つの柱として、自学自律をスクール・モットーとする、自由で規律ある教育と男女共学教育があった。しかし、校舎を男女共学用に作ったが、男女共学の認可がおりず断念した。その後、22年の時を経て1995（平成7）年に念願の男女共学が認められ、今年で15年目となった。

今春までの卒業生は10,066名となり、今年度の榴生は950名で、男子653名、女子297名である。クラスは全部で24クラスである。昨年、2階建ての新体育館と新管理棟が完成し、全ての教室にエアコンを完備した。

東北学院にはクリスチャンスクールとしての建学の精神として、「3L精神（LIFE・LIGHT・LOVE／信・望・愛）」がある。「神と人々に愛される真（まこと）の人を育てる」精神である。将来、「地の塩・世の光」として評される人材を育てることが東北学院の使命である。

今でも榴生の約85%は不本意入学生である。「15の春ではなく、玄冬」が50年にわたる榴ヶ岡高校のスタートの時の生徒の心境である。まさに、人生初の逆境の体験である。特に、榴ヶ岡高校においては、入学時には1教科に秀でた生徒が多く入ってくるが、残念ながら、教科の学力のバランスがとれていない。アメリカで最近、「AQ」が注目されている。「AQ：Adversity Quotient（逆境指数）」のことである。私は、「AQ（逆境指数）」の高い榴生を育成したいと思っている。そのためには、榴ヶ岡高校卒業までの間に、できるだけ教科の好き嫌いを減らし、高校生としての基礎学力をできるだけ幅広く選り好

みせずに学ばせるため、「自然学級」という、機会均等のクラス編成を心がけてきた。勿論、榴生のほぼ100%は大学進学を目指して榴ヶ岡高校に入学してくるわけで、3年次には進路別に理系、文系とクラス分けをしている。今年の3月の卒業生の国公立4年制大学への現役進学率は75%を超え、県内でトップクラスとなっている。ほぼ半数は内部進学者として東北学院大学に進学している。私は、「進学校榴」の卒業時の学力目標は「東北学院大学の一般入試に合格できる実力」と示してきた。

毎日の学校礼拝や聖書の授業を通してのキリスト教教養の育成による徳力の練達と大学院をも視野に入れた大学進学のための知力の練成、そして、高校時代にしか出来ない部活動を通じての体力の養成に気概をもって臨んでもらいたいと願っている。

東北学院榴ヶ岡高校の教育方針は、「敬神愛人・自学自律」のモットーのもと、T.E.A.M.榴の実践テーマを培い、「地の塩・世の光」となれる人材を育成することである。3L（LIFE・LIGHT・LOVE）精神つまり、LIFE（命、かけがえのないもの「地の塩」）、LIGHT（人に役立つための「世の光」）、LOVE（愛、「地の塩・世の光」たる学院生を包む慈愛に富たもう神の愛）を生きる基本とする人材である。T.E.A.M.榴とは“Training（練達）、Encouragement（気概）、Ambition（大望）& Modesty（謙虚）”の心構えを培った榴生の精神である。新約聖書（ローマ書5:3-5）に依拠し、T.E.A.M.榴の年度ごとの実践テーマを設定してきた。T.E.A.M.榴2006 “Greeting（挨拶）”、T.E.A.M.榴2007 “Be Punctual！（時間厳守）”、T.E.A.M.榴2008 “Respect for humanity（人間性の尊重）”、T.E.A.M.榴2009 “Beyond Adversity（逆境を越えて）”である。

E.H.カー（Edward Hallett Carr）は「歴史とは現在と過去との対話である」と記している。歴史を辿るということは、現在の自分自身の問題意識が重要である。松尾芭蕉の「不易流行」の言葉にも、

「不易」として、変えてはいけないことと、「流行」として、時代に臨機応変に対処することが大切であるとの意味が込められている。私は榴ヶ岡の7回生で、卒業生として初めて第7代校長を拝命し、今年で4年目となる。生徒としての榴ヶ岡校舎時代と母校榴ヶ岡高校の世界史の教員としての私の見聞と体験をもとに、榴ヶ岡高校の50年の軌跡を辿る。

第2章 榴ヶ岡校舎創設時代

(第1回生から第11回生まで)

1959(昭和34)年4月、仙台市の榴ヶ岡公園の一角に東北学院高等学校榴ヶ岡校舎が誕生した。東二番丁にあった東北学院中学・高等学校から新たに新校舎が設置されたのには大きな事情があった。戦後のベビーブームの世代が高校進学の時を迎え、全国で、「中学生浪人」が社会問題になった時代である。

宮城県、とりわけ、仙台市では、数百名にのぼる「中学生浪人」が普通科公立高校のナンバースクールをめざし、予備校や塾などに通っていた。当時の仙台市は男女別学で、男子普通科高校として仙台一高、仙台二高などがあった。公立高校はナンバー通り、序列化されていたのが現実であり、たとえば、仙台一高が無理なら仙台二高にしたほうがよいなどと、巷間では普通に囁かれていた時代でもあった。ナンバースクール落ちの中学生は数百人規模で捲土重来を期して、浪人生活を選んだ時代でもあった。この社会状況下「中学生浪人」を減らすべく、宮城県から「中学生浪人」を減らすために協力してほしい旨の要望が東北学院に寄せられた。当時の東北学院は中高一貫教育の男子校であり、高校からの入学生はなかった。高校から入学生を受け入れるということは、東北学院にとって難題であった。当時の校長であった月浦利雄先生(後に東北学院理事長歴任)は東一番丁にあった東北学院中学・高等学校の校地では受け入れ不可能と判断され、宮城県からの「榴



創立当初の東北学院高等学校榴ヶ岡校舎

ヶ岡公園に隣接する旧兵舎跡を場所として用意する」との提案を受け、この結果「東北学院高等学校榴ヶ岡校舎」が誕生したのである。校舎は旧陸軍及び進駐軍の利用していたものを使い、生徒収容規模としては1学年135名(45名の3クラス)となった。

榴ヶ岡校舎創設の英断を下し、東北学院高等学校の校長として、榴ヶ岡校舎の校長を兼務されたのは、月浦先生であった。「入学に際し、君たちにはおめでとうと言わない」、「学院生たるもの、将来『師』が付く職業に就けるように頑張れ」と言った校長先生である。毎週1回月曜日の学校礼拝の後、新入生全員に対して、礼拝堂において校長講話が行われていた。東北学院の歴史を様々な角度から教えられ、学校礼拝や聖書の授業とは一味違ったキリスト教についての話があり、英語をちりばめ、言葉の意味、語源の説明があった。「文化(culture)の語源はcultivateだ。耕すことなのだ。これからの授業は脳ミソを耕すことから始める」と言われたことも教え子の私の記憶に残っている。

創設時の教室は平屋建てで廊下は吹き出し、トイレは屋外で体育館も無かった。礼拝堂は馬小屋として使われていた場所を改装して当てられた。その後、学年進行とともに教室は増築され、当時「鰻の寝床」と称されていた一直線に伸びる校舎であった。年に一度、球技大会として外部の体育施設を利用して行われ、レジャーセンターや宮城県スポーツセンターが使われた。この球技大会は今日まで続いている伝統行事である。また、1回生から毎年、11月に校内マラソン大会も行われており、宮城野原の宮城県陸上競技場の外から、スタートし、十文字を折り返しとする10キロのコースで行われていた。高校3年生は受験準備のため参加できず、全校校内マラソンといっても1・2年生のみの大会であった。

当時は榴ヶ岡校舎であったため、校則等は全て東北学院高等学校と同じであった。高体連に登録されたのは東北学院高等学校であったので、榴ヶ岡校舎の単独のチームは東北学院高等学校に無い部活動のみであった。合気道部、ラグビー部、ハンドボール部が榴ヶ岡校舎単独のチームとしてあった時代である。

榴ヶ岡校舎の初代主事は数学と物理を担当した田口誠一先生(後に、東北学院中学・高等学校校長、東北学院長・理事長歴任)であった。当時は授業の合図はハンドベルであった。田口先生は授業開始の点鐘と同時に教室に入り、授業が終了してもなかなか終わらず、次の授業の先生が来るまで熱心に教えて

続けた。田口先生は1967（昭和42）年に東北学院高等学校に転勤された。

その後、清水浩三先生が第2代主事として来られた英語の先生で、発音が素晴らしく、さすが英語の学院だと思った。ミシガン大学の話はとても興味深く、また、サッカーの日本代表であったこと、戦時中は戦車隊長としての体験を話された。清水先生は後に榴ヶ岡高校の第3代校長として再び赴任された。

この時代の先生方で初代宗教主任の出村彰先生（現宮城学院理事長）は、アメリカ留学のため1年だけであったが、榴ヶ岡校舎のキリスト教の道を示してくれ、多くの教え子がクリスチャンへの道を歩み始めたという。私にとって、ライフロング・プロセス（人生行路）を開いてくれたのは大江善男先生である。高校2年で世界史を教えていただいた。当時、東北学院大学文学部に史学科ができて間もないころで、大江先生は大学でも教えておられた。最初の授業で黒板にギリシア語で「ソーフローシュネー」と書かれた。「この言葉は歴史を学ぶ上で大切な言葉であり、古典古代の美德である。」と言われた。「ソーフローシュネー」とは「謙虚さ」のことである。高校生にとってギリシア語、ラテン語をはじめとする原語を盛り込んだ授業はカルチャー・ショックであった。正にそれまでの自分の知識なんぞはぶっ飛んでしまった。初めて学ぶことへの「謙虚さ」を叩き込まれた。

出村先生の後任に、宗教主任として片倉英雄先生が榴ヶ岡校舎に赴任された。「鬼の片倉」と先輩たちが呼んでいた豪傑である。声の大きさはナンバーワンで、常に生徒指導の最前線にいた。礼拝での指導も厳格で、容赦なく大きな声で生徒を叱責した。私が母校に世界史の教師で戻ってきた時は、片倉先生は喜んでくれ、マンツーマンで指導を受ける機会に恵まれた。片倉先生は、「自学自律」の私服の自由な校風の中心的立案者でもあった。私は、片倉先生に「独立時に校舎まで完成させたのに、実現できなかったことが一つある。男女共学だ。」と何度も聞かされてきた。しかし、片倉先生は1975（昭和50）年6月に46歳の若さで急逝された。片倉先生の夢であった男女共学が実現できたのは独立後、23年目であった。この時代の片倉先生の盟友が半澤義巳先生である。その後、半澤先生は第4代校長となり、校長最終年の1995（平成7）年に二人の夢であった男女共学を実現されたのである。

第3章 変革時代

（第12回生から第18回生まで）

この時代は、「70年安保」の世相が色濃く反映されたといえる。既成概念に対する「ナンセンス」の機運が榴ヶ岡校舎にも強くなり、榴ヶ岡独自の校風を作る動きが表面化した。長髪運動、文化祭一般公開要求運動等々。その後、1972（昭和47）年の榴ヶ岡高校独立に際して、長髪が認められることになった。因みに、東北学院中学・高等学校の長髪が認められたのは、榴ヶ岡高校の後の出来事である。

榴ヶ岡高校の独立の契機は、榴ヶ岡公園の再開発計画要請であった。榴ヶ岡校舎の移転が問題となった。東北学院中学・高等学校に統合するか、はたまた榴ヶ岡高校として独立させるか。榴ヶ岡高校を独立させれば、東北学院は仙台圏に二つの高校を持つことになる。二つの高校の特色を明確にしなければ、共存共栄は難しい。できるだけ違うタイプの高校にすればいい。東北学院中学・高等学校は中高一貫の男子校であったから、榴ヶ岡高校は少数教育の伝統を生かし、男女共学で、校則は最小限とし、制服を廃止し、「自学自律」の自己責任を培う教育方針とされ、場所も泉市に移転と決定した。しかし、男女共学は見送りとなった。しかし、泉市の新校舎の施設・設備等は男女共学用に作られていた。

1972（昭和47）年榴ヶ岡高校初代校長に五十嵐正躬先生が就任され、新たな歩みが始まった。五十嵐先生は英国風ジェントルマンでお洒落で、冷静沈着に指導なされた。榴ヶ岡高校としての第1回生入学生は14回生である。新校舎は完成しておらず、入学時は榴ヶ岡校舎であった。しかし、この年の夏休み8月に全校生の手伝いによって、泉市の新校舎に移転した。独立を機に、単独チームでの高体連の参加が認められ、運動部を中心に部活動も盛んとなり、県内の私立高校では唯一の私服の自由な校風と、文武両道の充実した高校生活が展開され、生徒会活動も活発になり、新たに大運動会の実施、文化祭の充実などを通して、榴生としての連帯感も培われた。

第4章 変動時代

（第19回生から第36回生まで）

1975（昭和50）年の8月、河北新報に、「榴ヶ岡高校の廃校もありうる」との記事が掲載された。この記事の影響は甚大で、翌年の第19回生の入学試験（3月末の公立高校入試発表後）では大幅な定員割れを起こした。この第19回生は卒業時の数は77名のみであった。第18回生までは順調に志願者を確保

できていたのに、新聞のひとつの記事によってこれほどまでにダメージを被るとは予想を超えた出来事であった。この年、五十嵐校長が退職され、第2代校長として小田忠夫学院長が1年間校長職を兼務された。学内では入試委員会が設置され、入試時期も公立の発表後ではなく、2月の中旬に行うという未曾有の入試システム転換を実行した。この危機に際し、同窓生が東北学院榴ヶ岡高等学校TG会を設立してくれ、母校の応援団として、力強く支えてくれたことは感謝に堪えない。しかし、第19回生の榴生は入学後の不安を吹き飛ばすべく、「われら榴ここにあり」と一層の気概を發揮してくれた。文化祭を学校祭「榴祭」と改称し、一人でも多くの方々に榴ヶ岡高校を知っていただくために、榴祭の1週間前、東一番丁を全校生で仮装行列を練り広げ、大いにPRをしてくれた。

公立高校入試前に入学試験実施することは予想以上の困難の連続であった。補欠は出さない。2次募集はしない。英数国理社の5教科の筆記試験での合格判定は至難の業であった。この時期から、年度ごとに入学者数が変化し、クラス数はまちまちになったが、学則総定員は確保してきた。

1989（平成元）年に東北学院大学泉キャンパスが開校となり、榴ヶ岡高校を取りまく環境は劇的に好転した。地下鉄も開通し、バスの本数も飛躍的に増加した。また、この時代、清水校長の時、海外研修をスタートさせた。きっかけは、島野武元仙台市長から、仙台市と姉妹都市であるアメリカ合衆国のカリフォルニア州リバーサイド市と高校生の交流が出来ないかと言われたことに始まる。私はリバーサイド交流使節団が来仙した時に手伝いをしていたこともあり、このことを清水先生に相談したところ、是非実現しましょうとの快諾を得、1981（昭和56）年に第1回の海外研修を行うことができた。団長には半澤義巳先生、引率として脇田睦生先生、そして渉外として私が11名の生徒と共に海を渡った。リバーサイド市長を始めとして大歓迎を受け、その後、海外研修は今日まで内容を変えながらも続いている。また、第25回生より、集団訓練の場として、鬼首スキー場で1年生全員参加の学年行事をスタートし、今日、場所は安比高原スキー場に移ったが、この伝統行事は今でも続いている。

第5章 共学時代

（第37回生から現在まで）

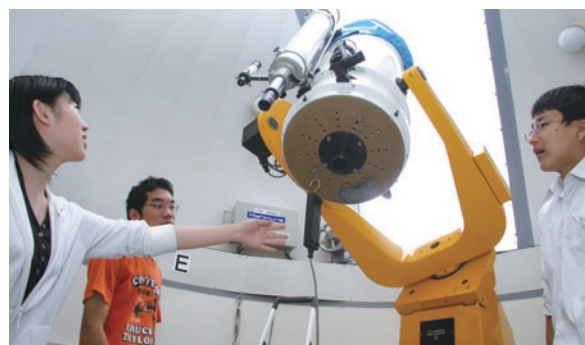
榴ヶ岡高校独立時のヴィジョンであった男女共学

は、片倉先生の盟友であった半澤義巳第4代校長の懸案であった。紆余曲折の議論を経て、1995（平成7）年に男女共学が認められた。但し、女子の募集人員は45名に限定された。またもや制限が加えられた。しかし、男女共学を実現することが先である。やはり、この第37回生は定員割れを起こしてしまった。女子は結果として17名のみであった。17名の女子榴生は入学時から一騎当千の元気な生徒で、榴ヶ岡高校に新風を吹き込んでくれた。翌年は、定員割れをしたこともあり、女子の募集人員の制限は撤廃され、3倍強の女子の入学を得ることができた。その後、中学校の先生方の進路指導のお陰で、今日至るまで、ほぼ男女比2：1の生徒を榴生として迎えることができる。女子の入学に際し、私服で自由な従来の榴ヶ岡高校の伝統を変えずに学校生活を展開できるのは、自己責任をわきまえる「自学自律」のスクール・モットーを日々指導してくれる教職員の指導と、その指導を受け入れる榴生の「謙虚さ」であると感謝している。

この時代は、第1回生から教鞭をとり、化学の受験のバイブル「ワキタズプリント」で尊敬され、男女共学2年目から推薦入試を導入した第5代校長脇田睦生先生、そして、第6代校長杉本勇先生のもと、受験生を増やし続け、武道館、家庭科実習棟、天文台等の建設を行い、教育環境の拡充に努めてきた。杉本先生の時代には、スクールカウンセリングが定着し、「生徒の居場所」を作るという現在の環境委員会の体制が確立された。



体育館



天文台

第6章 新たなる半世紀への展望



2010（平成22）年度の宮城県公立高校入試から、全県1学区制と全公立高校男女共学制が始まる。東北学院の123年の歴史を辿り行けば、幾多の困難な時代を越えて東北学院の建学の精神は受け継がれてきた。東北学院榴ヶ岡高等学校も東北学院の一員として、先達の諸先生方の知恵を生かし、新たな道を切り開いて行く使命がある。

これからの半世紀のスタートとなるT.E.A.M. 2010の実践テーマは“Good Attitude.（善き態度）”とする。そのためには、

自由と正義を大切にするための資質を向上させること。公的な場（レス・プブリカ：res publica）と私的な場（レス・プリヴァータres private）を自覚すること。公的な場では、T.P.O.(Time, Place & Occasion ; 「時、場、状況」)をわきまえた挙措を希望する。「時」には「クロノス」「カイロス」がある。「クロノス」は直線の時間を意味し、「カイロス」は幸運の循環的時間を意味する。常に“Be Punctual！（時間厳守）”の心構えをしている人だけが、「カイロス」を掴むことができる。それが、ホラティウスの“carpe diem.”カーペ・ディーエム（時を掴む）という気構えである。また、「幸運の前髪を掴め」という諺通り、幸運は前からやってきて、瞬時に自分を乗り越えてしまうものである。常に気構えをしていないと、幸運は掴めない。神様が全ての人に公平・平等に与えてくださったのが時間である。約束の時間を守ることが隣人の時間を大切にすることにもなるのである。

そして、

「地の塩・世の光」として生きること。特に「塩」は人間にとって水と共に、必要不可欠なものであり、「塩」は時として、自分の存在を消してまで、他の食材の味を活かすものでもある。「地の塩」とは、正に東北学院の建学の精神である「献身犠牲」を象

徴するものである。毎日の学校礼拝や聖書の授業を通して、聖書からの御言葉を学び、日々革新の糧とし、グローバル・スタンダードとしてのキリスト教教養を身につけることこそ最善の道である。主体的にキリスト教教養を身につけ、「地の塩・世の光」として、将来、世の人びとから評される榴生を目指すこと。

一緒に歌い続けてきた“Fair Gakuin”の歌詞にあるように、母校のことをアルマ・マター（Alma Mater）と言う。Almaアルマとは、慈愛と滋養の源を意味するラテン語のAlmusアルムスの形容詞で、Materマターはmother母親の意味である。これからの長いライフロング・プロセス（人生航路）の中で、困難に出会った時、嬉しい事があった時には、是非母校榴ヶ岡高校を思い出して訪ねて来てほしい。

これからも「かけがえのないもの“Only one school for you in the world.”」と評される東北学院榴ヶ岡高校を目指して行く。

日々の榴ヶ岡高校での学校生活の中で、自分だけでなく、クラス・メイト、チーム・メイト、そして、その日、榴で出会った人びとが、今日も榴に来て良かったと思える学校にしていきたい。



久能 隆博プロフィール KUNOU, Takahiro

1949(昭和24)年生まれ。
東北大学大学院国際文化研究科博士課程前期修了。
東北学院大学文学部史学科卒業。
東北学院高等学校榴ヶ岡校舎第7回生。
2006(平成18)年より現職。

『東北文学』に集った人々（一）

東北学院大学教養学部教授
渥美 孝子

1. はじめに

『東北文学』という名の雑誌は、三種ある。

- (1)明治26年10月発刊の東北学院文学会の機関誌『東北文学』
- (2)昭和3年2月創刊の文芸誌『東北文学（市場版）』
- (3)昭和21年1月に河北新報社から創刊された総合文芸誌『東北文学』

ここで取り上げるのは(1)であるが、(2)について簡単に触れておく。「市場版」と銘打った『東北文学』は、詩人の尾形亀之助（東北学院出身）や石川善助らの作品が掲載されたことで知られる文芸誌である。創刊号の編集後記「編輯室より」では、広く東北、北海道の文学同好者の発表機関とすべく企図したものであり、所謂同人雑誌ではないと断っているが、後には同人一覧が付され、活動も同人誌という域内にとどまった。東北学院関係者が中心となり、発行所の「東北文学社」は「東北学院図書館内」に置かれた。現在のところ、第二巻第三号（昭和4.6）まで八冊の刊行が確認されている。

(1)の『東北文学』は、東北学院の学内誌として昭和に至るまで続いた。ただし、学校の組織改正により、第92号（大正7.10）からは中学部、専門部、昭和に入ると高等学部編集のものまで入り乱れて存在することになる。先に述べた『東北文学（市場版）』の刊行時にも、別に中学部や専門部の雑誌としての『東北文学』が刊行されており、それらと区別するために「市場版」と記す必要があったと考えられる。学内誌としての『東北文学』は、戦前は昭和17年12月まで発行され、戦後になって昭和23年からは東北学院中高等学校文芸部編集の『東北文学』となる。

この長い『東北文学』の歴史のなかでも興味深いのは、明治期、それも明治40年あたりまでの十五年間の動向である。『東北文学』に掲載された個々の文章は、多くの場合、後にさまざまな分野で活躍することになる人々の、若き記念のようなものに過ぎ

ない。だが、この雑誌に名を連ねた人々という枠組みにおいて見ると、彼らの生は不思議な交錯を描く。日本近代の形成期に、東北学院に集った青年たちはいかなる青春群像を織りなし、その後どのような生の軌跡をたどったのか、その一端を追ってみたいと思う。

2. 明治期『東北文学』の概略

個々の人物を取り上げる前に、『東北文学』とその母体たる「東北学院文学会」について、簡単におさえておきたい⁽¹⁾。

「文学会」の歴史は、仙台神学校時代の明治22年に遡る。「会員は定時に集会して演説を試みたり」とあるように、「文学会」は自分の思想感懐を述べる、所謂演説会として始まった。25年には、仙台神学校から東北学院への校名改称に伴い、名称も「東北学院文学会」となる。「文学会」は、原則として夏期休暇、冬期休暇を除く月一回例会が持たれたが、25年からは年一回の大会も催されることになった。そのプログラムは、「邦語、英語、独語等の演説、暗誦、漢詩朗読、英文邦文の朗読等」のほか、音楽の出し物も行われた。明治27年4月の第三回大会からは英語劇が加わり、シェイクスピアの戯曲などが演じられることになる。

「文学会」の目的は、終始一貫して各自の知識・思想の修養鍛錬にあった。外に向けて何かを発信するというよりは、自己の学習した知識を発表する、あるいは内部に蓄積された曖昧模糊とした思想に表現を与える機会としての意味合いが強い。『東北学院文学会雑誌』第14号（明治25）に掲げられた「東北学院文学会規則」では、「会員相互の文学思想を発達するを以て目的とす」としている。この時代にあっては、「文学」とは文芸に限定される言葉ではなく、その語義も定まっていなかった⁽²⁾。会則に言う「文学思想」の意味するところについても議論があり、結局は「外国にあれ、国語にあれ演説、文章、討論、暗誦等ハ勿論」のこと、「哲学的、科学的、何々の凡て演じ得るものは演じてよきなり故に

この文学思想なる意味は甚だひろき方の意味なりと知るべし」ということになった。この「甚だひろき方の意味」の「文学」とする方針が、その機関誌たる『東北文学』という雑誌の性格にも引き継がれる。

「文学会」の構成メンバーは、おおむね東北学院の生徒、卒業生、教職員であったと言ってよいが、「文学会規則」を詳述すると、以下のような変遷をたどっている。

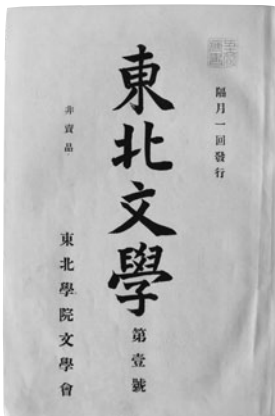
明治25年「東北学院の同志を以て組織す」（『東北学院文学会雑誌』第十四号に記載）

明治26年「全院生徒を以て会員とし教員及職員を以て特別会員とす」（『東北文学』第三号）

明治27年「単に有志のみの会合となせり」（『東北文学』第六号）

明治36年「東北学院生徒及び卒業生並びに教職員ヲ以テ組織スル」（『東北文学』第三卷第四号）

一方、雑誌について見ると、文学会発足の翌23年1月、『眼』と題する雑誌が出されたのがその始まりという。各自がそれぞれの紙に手書きしたものを綴じて、寄宿舎の食堂に置き、皆の閲覧に供するというものであった。その三号から、誌名を『仙台神学校文学会雑誌』と改める³⁾。25年には、校名の改称に伴い、誌名も『東北学院文学会雑誌』となる。用紙を統一し、能筆家の生徒によって清書された。



『東北文学』第1号(明治26.10)の表紙

ここまでは手書きの閲覧雑誌であったが、明治26年10月、活字印刷にして会員に配布することとなり、誌名も『東北文学』と改める。印刷は東京の秀英舎(後の大日本印刷の前身)である⁴⁾。以後の二年間は隔月に発行。明治28年の第11号からは毎月発行とし、それま

で非売品であったものを外部にも発売することにした。しかし、月刊は明治31年までで、巻号制をとった明治33年からは年五回程度の発行であったと推測される。明治36年の「東北学院文学会概則」で、再び「当分ハ隔月一回発行」と決めるも原稿が集まらず、明治39年に通号制に戻して以後も不定期刊行が続くことになる(〔資料一〕参照⁵⁾)。

『東北文学』が振るわなくなった一因として、「文学会発達史」(註(1)参照)は、「三六年同窓会の組織成るに及びて、卒業生は当然文学会を離れて、同会に属することゝなりしかば、文学会は漸次雑誌配布を停止するの止なきに至れり」と記している。卒業生の不参加がそのまま雑誌の不振に結びつくほど、初期の生徒たちの活躍は目覚ましく、また卒業生の結びつきも強かった。

註(1)仙台神学校時代からの草創期の文学会とその雑誌のことについては、散木散人「今昔物語(東北学院に於ける文学発達の歴史)」が詳しく伝えている(『東北文学』第18号、第30号、第31号、第32号、第33号)。それに基づいて「文学会発達史」(無署名、『東北文学』第76号 創立満二十五周年記念特別号)がまとめられ、青島青二「東北文学変遷五十年史」(『東北文学 五十周年記念特輯号』第116号 昭和11.11)、及び花輪庄三郎による『東北学院七十年史』(昭和34.7)が書かれた。詳しくはこれらを参照されたい。

(2)「文学」という語義の変遷については、磯田光一「訳語『文学』の誕生」(『鹿鳴館の系譜』文藝春秋社、1983.10)に詳しい。ちなみに、『東北文学』第三号(明治27)に記載の改正規則でも「文学の攻究を以て目的とす」とあり、『東北文学』第三卷第四号(明治36)の「東北学院文学会概則」では「会員ノ思想ヲ発達セシムルヲ以テ目的トス」とされている。

(3)現在、東北学院が所蔵している『仙台神学校文学会雑誌』第一巻は、明治24年4、5、6月号のそれぞれの仮綴をいったんほどいてから、ジャンルごとに並べ換えて一冊に綴じ直した合本である。

(4)明治35年の第三卷第一号からは東北学院労働会内の金子記念印刷所に変更、明治43年の第75号からは早川活版印刷所となる。

(5)〔資料一〕の表のうち、(欠)としてあるのは、東北学院に所蔵がないの意での欠号である。また、発行人および発行兼編集人は名義人で、実際の編集部には数名の要員がいた。文学会会長については、雑誌の「雑報」欄等の記事から引いたもので、おおよその時期である。

3. 草創期の人々—泡鳴、迷羊—

(1)岩野泡鳴

岩野泡鳴(本名・岩野美衛、明治6.1.20～大正9.5.9)が仙台に過ごしたのは、数え年19歳の明治24年1月末から26年12月までである。教師になるつもりが「一年級に抛り込まれた」という、その「一年級」とは予備科一年(〔資料二〕参照)、まだ仙台神学校時代のことである。24年9月には押川方存(後に冒険小説として名をはせる押川春浪)が明治学院から転入し、25年5月には栗原基(後に広島高

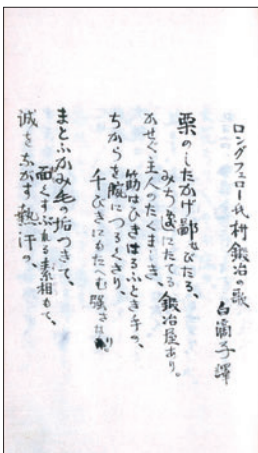
誌名	発行年月日	編輯（生徒）	発行所	文学会会長（教員）
仙台神学校文学会雑誌 第1巻	明治24.6			
東北学院文学会雑誌 第14号	明治25	編輯人=中村長之助、岩野美衛		会長=金成浜助
東北学院文学会雑誌 第17号	明治25.12.27			
東北学院文学会雑誌 第18号	明治26.1.27	編輯局員=中村長之助、鈴木瞭助、島貫兵太夫、今井栄吉、前田二郎		
東北文学 第1号	明治26.10.10	編輯人=川合信水、発行兼印刷人=中村長之助	東北学院文学会	
東北文学 第2号	明治26.12.10	編輯人=川合信水、発行兼印刷人=中村長之助	〃	
東北文学 第3号	明治27.2.12	編輯人=川合信水、発行兼印刷人=中村長之助	〃	
東北文学 第4号	明治27.4.10	発行者=中村長之助	〃	
東北文学 第5号	明治27.6.15	発行者=中村長之助	〃	会長=入江祝衛
東北文学 第6号	明治27.10.31	発行者=中村長之助	〃	
東北文学 第7号	明治27.12.28	発行者=中村長之助	〃	
東北文学 第8号	明治28.2.25	発行者=中村長之助	〃	
東北文学 第9号	明治28.4.30	発行者=中村長之助	〃	
東北文学 第10号	明治28.6.25	発行者=中村長之助	〃	
東北文学 第11号	明治28.11.15	発行兼編輯人=五十嵐正	東北文学社	
東北文学 第12号	明治28.12.20	発行兼編輯人=五十嵐正	〃	
東北文学 第13号	明治29.2.10	発行兼編輯人=五十嵐正	〃	会長=深田藤治
東北文学 第14号	明治29.3.13	発行兼編輯人=五十嵐正	〃	
東北文学 第15号	明治29.4.14	発行兼編輯人=五十嵐正	〃	会長=熊谷駒之助
東北文学 第16号	明治29.5.14	発行兼編輯人=五十嵐正	〃	会長=石田祐安
東北文学 第17号	明治29.6.12	発行兼編輯人=五十嵐正	〃	
東北文学 第18号	明治29.8.31	発行兼編輯人=五十嵐正	〃	
東北文学 第19号	明治29.12.30	発行兼編輯人=中村長之助	〃	
東北文学 第20号	(欠)			
東北文学 第21号	明治30.2.28	発行兼編輯人=中村長之助	東北文学社	
東北文学 第22号	(欠)			
東北文学 第23号	明治30.5.20	発行兼編輯人=渡辺 安	東北文学社	会長=島崎春樹
東北文学 第24号	明治30.6.20	発行兼編輯人=渡辺 安	〃	
東北文学 第25号	明治30.9.25	発行兼編輯人=渡辺 安	〃	会長=土井久寿彦
東北文学 第26号	明治30.10.25	発行兼編輯人=木山喜代五郎	〃	
東北文学 第27号	明治30.11.25	発行兼編輯人=木山喜代五郎	〃	
東北文学 第28号	明治30.12.25	発行兼編輯人=木山喜代五郎	〃	
東北文学 第29号	明治31.3.25	発行兼編輯人=木山喜代五郎	〃	
東北文学 第30号	明治31.5.25	発行兼編輯人=木山喜代五郎	〃	会長=出村悌三郎
東北文学 第31号	明治31.6.25	発行兼編輯人=大津久之介	〃	
東北文学 第32号	明治31.9.25	発行兼編輯人=大津久之介	〃	
東北文学 第33号	明治31.10.25	発行兼編輯人=大津久之介	〃	
東北文学 第34号	明治32.1.31	発行兼編輯人=岸波常蔵	〃	
東北文学 第1巻	(欠)			
東北文学 第2巻	(欠)			
東北文学 第3巻第1号	明治35.7.5	発行兼編輯人=大津久之介	東北文学社	会長=森本厚吉
東北文学 第3巻第2号	(欠)			
東北文学 第3巻第3号	明治36.2.20	発行兼編輯人=赤星仙太	東北文学社	
東北文学 第3巻第4号	明治36.11.3	発行兼編輯人=野澤正	〃	会長=須藤鬼一
東北文学 第3巻第5号	明治36.12.25	発行兼編輯人=野澤正	〃	
東北文学 第4巻第1号	明治37.3.1	発行兼編輯人=野澤正	〃	会長=阿部能文
東北文学 第4巻第2号	明治37.5.9	発行兼編輯人=野澤正	〃	
東北文学 第4巻第3号	明治37.6.27	発行兼編輯人=金矢武吉	〃	
東北文学 第4巻第4号	明治37.10.27	発行兼編輯人=金矢武吉	〃	
東北文学 第4巻第5号	明治37.12.20	発行兼編輯人=金矢武吉	〃	
東北文学 第5巻第1号	明治38.2.25	発行兼編輯人=金矢武吉	〃	
東北文学 第5巻第2号	明治38.6.15	発行兼編輯人=木村久一	〃	会長=中村長之助
東北文学 第5巻第3号	明治38.9.30	発行兼編輯人=木村久一	〃	
東北文学 第5巻第4号	明治38.11.23	発行兼編輯人=木村久一	〃	
東北文学 第65号	明治39.11.1	発行兼編輯人=木村久一	東北学院文学会	
東北文学 第66号	明治39.12.20	発行兼編輯人=木村久一	〃	
東北文学 第67号	明治40.1.28	発行兼編輯人=木村久一	〃	会長=小林秀雄
東北文学 第68号	明治40.10.30	発行兼編輯人=木村久一	〃	
東北文学 第69号	明治40.12.20	発行兼編輯人=木村久一	〃	
東北文学 第70号	(欠)			
東北文学 第71号	明治41.11.20	発行兼編輯人=丹 忠	〃	
東北文学 第72号	明治42.2.25	発行兼編輯人=丹 忠	〃	会長=須藤鬼一
東北文学 第73号	明治42.7.1	発行兼編輯人=秋保孝蔵	〃	
東北文学 第74号	明治43.3.20	発行兼編輯人=秋保孝蔵	〃	
東北文学 第75号	明治43.7.10	発行兼編輯人=大井第次郎	〃	
東北文学 第76号	明治44.7.12	発行兼編輯人=大井第次郎（創立滿二十五年紀年特別号）	〃	会長=金矢武吉
東北文学 第77号	明治45.3.15	発行兼編輯人=阿部健雄	〃	
東北文学 第78号	明治45.7.25	発行兼編輯人=矢野清志	〃	会長=久保熊治

等師範教授、第三高等学校教授を歴任する英文学者)が東華学校から転学して同級となる。栗原基は、当時の泡鳴の猛烈な勉強ぶりについて証言しているが、その領域はドイツ語やギリシャ語の原書にまで及んだという⁽¹⁾。

自己の思想に「抜き取り難き根を生じ居り候」と自身が語っているように、泡鳴にとって仙台時代の意味は大きい。エマーソンを「心の友」として、朝から晩まで机の前に座って読書をし、時に宮城野原を散策し、時に向山の奥に踏入り、松島大仰寺では坐禅体験をし、龍ノ口での自殺未遂事件と、まさに「修行の時代」であり、「煩悶の時代」であった。

「煩悶の時代」であったことはまちがいないが、しかし、来仙当初の泡鳴はまた違う顔を見せていた。散木散人の「今昔物語（東北学院に於ける文学発達の歴史）」（前出）には、文学会で生き生きと得意げに振る舞う泡鳴の様子が活写されている。

彼は東都に在りて同志の徒と文壇社とやらを結び、数号の雑誌をさへ発兌して己も之に新体詩論文等を登載せるほとなれば、田舎に来たりては大に幅を利かせたり。予科一年級に在りてエマルソン文集ロングフェロー詩集等を繕き且つ『ホイトリイ、アンド、シヴィリゼーション』と題して英語演説を試みたることさへあり（尤も『アイ、キャン、ナット、スピーク、エニイ、モア』とて中止したれども）、日陰育ちの坊ちやん達を仲間としていかに得意なりしか想ふべし。



白滴子（岩野泡鳴）訳
「ロングフェロー氏村鍛冶之歌」

の翻訳のことであろう。英語力のほどは、Dr. Rockfieldの名で発表した未完の小説“Yosa the Bird”にもうかがうことができる。新体詩作品としては旧作「我父」や、「東京みやげ」の総題の元に置かれた「墨提偶感」がある。いずれも『仙台神学

泡鳴は白滴（白滴子）という名で、いくつかの作品を寄せている。引用に言う「新体詩論文」とは、『文壇』に既発表の「大詩人と文壇」を『仙台神学校文学会雑誌』に転載した「大詩人と〇〇」を指し、「エマルソン文集ロングフェロー詩集」とは、「エメルソン氏歴史論の一節」や「ロングフェロー氏村鍛冶之歌」⁽²⁾の翻

校文学会雑誌』第一巻に収められているが、村上忠彦氏が「仙台時代においてあらはした作物は粗雑にして稚拙、とりたてゝ論ずべき程のものはない」⁽³⁾と断じたように、試作または習作という以上のものではなかった。

しかしながら、文学会にとっては、東京から新風を持ち込んで、積極的に活動した草創期の立役者の一人であった。文学会における泡鳴の功績は、まずその新しい文学ジャンルである新体詩を「東都より移し植ゑたる」ことであった。また、第1回文学会大会（明治25.4.29）の催しについて主唱したのも泡鳴であったという。おそらく、明治学院の文学会でかつて体験したプログラムを提案したものであろう。また、泡鳴は『東北学院文学会雑誌』の第12号（明治25.1）から明治25年秋までの編集を担当した。散木散人によると、第12号（現存せず）には、「詩人論」という「二十頁ほどにしてなほ未完の大文章」を載せたと書かれている。しかし、25年秋に「白滴筆を焼く（？）と称して」編集の任を辞して以来、雑誌は振るわなくなったという。泡鳴の熱気が文学会の牽引力となっていたと思われる。

編集委員を辞した泡鳴は、文学で世に打って出るための構想をあたためていた。文学会第2回大会（明治26.4.28）では、「悲詩人」と題する長大な新体詩を披露している。これは後に、泡鳴が阿波寺鳴門左衛門の名で発表する『悲劇 魂迷月中刃一名、桂吾良』の元となったものであるという。この戯曲の完成をもって、泡鳴は「文芸の大海」に乗り出す決意をし、明治26年末に上京することになる。

- 註(1)「栗原基氏の思出（講演）」（『東北学院時報』第177号、昭和30.7.5）、菊沢喜美子『思い出の父栗原基』（昭和44.7非売品）。後者には、大正の初めに泡鳴が「イギリス詩人の紹介解説の叢書の計画をたてた折」、栗原基に援助を請うてきたことを、泡鳴の猛勉強ぶりに敬服していた基は「後あとまで徳としていた」と書かれている。
- (2)このロングフェローの詩は、大正元年「村の鍛冶屋」として文部省唱歌となる。
- (3)村上忠彦「岩野泡鳴と島崎藤村—仙台時代を中心として—」（『東北文学 五十周年記念特集号』第116号 昭和11.11）

(2)佐藤迷羊

岩野泡鳴、押川春浪と東北学院時代をともにし、同じように文筆の道に進んだのが、佐藤迷羊である。迷羊は泡鳴、春浪に比べれば、今ではその名を知る人も殆どいない群小作家の一人に終わったが、明治三十年代の一時期、『早稲田文学』や『新著月刊』

『新小説』『文芸倶楽部』などに小説を発表し、評論もよくした。近年、鈴木千代志氏、八木光昭氏の調査研究によって、その来歴の多くを知ることができるようになった¹⁾。それらを参照しつつ、東北学院時代を中心に記したいと思う。

迷羊（明治9.5.1～昭和12.5.8）は本名、佐藤^{しげまつ}稠松。山形県鶴岡の出身である。明治22年11月3日、荘内教会で後に東北学院幹事となる斎藤壬生雄により洗礼を受ける²⁾。仙台に来た理由は詳らかでないが、彼自身の書いたものからすると、「父の死」（明治21.2）と「キリスト教に入りて親族に捨てられし」ことを契機とした出郷、という側面が強かったようである（「さらば故郷」、『東北文学』第13号）。

入学時期については、これまで目されていた明治24年10月より一年ほど遡る。東北学院の「教員会記録」によると、明治23年9月10日の記述に、佐藤稠松、布施淡ら八名について「英語科予備第一年級に仮入学を許可する事」とあり、明治24年2月本入学となったようである³⁾。この本入学の頃、岩野泡鳴が同じ級に入学してきた。翌25年、彼らは本科第一年級となる（25年9月から本科二年生）。

稠松は在学中から文筆に進む決意をしていたものと思われる。「教員会記録」の明治27年12月10日の項には、「休学ヲ許可サレタルモノ」として「本科四年生佐藤稠松」の記載がある。ここに休学の理由は書かれていないが、『東北文学』第9号（明治28.4）の「雑報」欄は、「佐藤稠松君は築地某書籍館の書目調整係に雇はれ、兼ねて文学上の講究及び著作に従事し居るとか」と伝えており、文学に志しての休学、上京であったと推測される。しかし、『東北文学』第10号（明治28.6）「雑報」欄には、「佐藤稠松君」の「帰校」が報じられており、半年ほどの休学で復学したようだ。

当時東北学院は頻繁に改組（〔資料二〕参照）があったため、この休学で履修が複雑になり、「教員会記録」明治28年5月27日の項には、佐藤稠松から、4つの科目について「本科三年ニ於テ修了セシモノナルガ故ニ此等ノ学科ヲ免除セラレテ文科一年ニ入学ナシ渡シトノ願」が出されたことが記されている。うち、2科目が免除され、文科に進む。文科では山川丙三郎と同級となった。だが、その後、卒業の記録はなく、明治29年に文科一年生で退学したと思われる⁴⁾。

学院時代の迷羊は、『仙台神学校文学会雑誌』や『東北文学』にいくつかの筆名を使って多くの稿を寄せ、文学会にもしばしば登壇したほか、明治29年

2月には文学会役員書記に選ばれ、5月にも書記に再選されている。その活動は、以下の通りである。迷羊の関心領域が見えるので、煩を厭わず列挙してみる。*は文学会での口頭の発表である。

*佐藤稠松「演説 我が文学会」（文学会第1回大会 明治25.4.29）

叩頭小僧「恐ルベキ反動」（『仙台神学校文学会雑誌』第1巻）

保守反動の動きに対し、十字架の下に集える基督の青年はこれを排し、直往直進すべきことを論じた。

叩頭小僧「太陽構造ニ就テ」（同上）

太陽の黒点など、文字通り太陽構造について論じる。

*佐藤稠松「独逸語デクラメーション シルレルのウエリアム、テル拔筆」（文学会第2回大会 明治26.4.28）

佐藤稠松「経済学と物質心意に関する学との関係」（『東北文学』第2号）

ミルヤケーンズの経済学説を引いて論じる。

鳥海山士「わが亡き姪」（『東北文学』第4号）

佐藤稠松「余は小楽天家ナル乎」（『東北文学』第7号）

鷗外「うたかたの記」の少女マリーの「安心」を盲目的安心として退け、自己の信仰のあり方を語る。

佐藤稠松「長明とライダル詩人と」（『東北文学』第9号）

佐藤稠松「長明とライダル詩人と（其二）」（『東北文学』第10号）

ワーズワスと鴨長明を比較。ゲーテも引き合いに出す。（未完）

佐藤稠松「基督教美術の特質」（『東北文学』第11号）

古代ギリシャ文化から説き起こシラファエル、ミケランジェロの聖母像に到る道筋を述べる。

*佐藤稠松「壮美」（文学会第28回例会 明治28.10.18）

佐藤稠松「生理的心理学派の二三著述を讀みて」（『東北文学』第12号）

ラッドの生理学説を中心に、「脳髓」と「心」の関係について論じる。

佐藤鳥海「さらば故郷」（『東北文学』第13号）

佐藤稠松「批評家の責任」（『東北文学』第14号）

今日の批評の粗略、皮相、主観的なことを批判、批評家は時に「公平無私なる科学者、実験を基礎とせる哲学者」でなければならぬと述べる。

S、S 「『名誉婦人』を讀む」（同上）

鳥海山士「ウエルテリズム」（『東北文学』第15号）

*佐藤稠松「小説に現はれたる現今我国の思想界」
(文学会第33回例会 明治29.5.16)

以下は、東北学院中退後に『東北文学』に寄せたものである。

鳥海 「落葉紛々」(『東北文学』第19号)

紅葉を写実派、露伴を理想派とする見方に対し、小説家は「己が蓄ふるアイデアルを基礎として材を天然のリアル界に求むべし」と論じたもの。

〇〇、鳥海共作「ロミオー、エンド、ジュリエット(承前)」(『東北文学』第21号)

佐藤迷羊「大家を学ぶの法」(『東北文学』第34号)

さまざまな分野に触手を伸ばす稠松を、散木散人は「『アイ、ノー、エヴェリイ、シング』の名を得たり」と伝えている。この、いささか揶揄めかした評が語っているように、稠松にはきわめて術学的なところがあつた。しかしながら、先進の学問をいちやく身につけて誰にも引けを取るまいとするこうした気負いをもたらしたもののこそ、東北学院文学会及び『東北文学』という舞台であつた。稠松にとつても、仙台時代は修行の時代であつたと言えよう。

東北学院を去つた稠松は、明治29年10月、東京専門学校文科専科に入学するも、翌年退学し、逍遙門下で文筆に従う。散木散人「今昔物語(東北学院に於ける文学発達史の歴史)(四)」は、次のようにその消息を伝えている。

佐藤叩頭は坪内逍遙の覚えめでたく、其門下に迷羊と名のり出で、てより『うき草』『おち葉』『しのゝめ』『谷間かくれ』『やれ垣』等数編の小説を公にし、今は『早稲田文学』の編輯に従事すと聞く。

迷羊が明治30年4月より33年6月までの三年の間に発表した小説は、「うき草」(『早稲田文学』)、「高嶺の月」(同前)、「おち葉」(『新著月刊』)、「しのゝめ」(『文芸倶楽部』)、「無名草」(『早稲田文学』)、「谷間かくれ」(『新小説』)、「やれ垣」(『文芸倶楽部』)、「温泉場」(同前)、「船供養」(『新小説』)などであり、翻訳ではエルスネル「夢のあと」(『早稲田文学』)、ホーツン「巨人山」(『文芸倶楽部』)がある。また、『早稲田文学』では演劇の合評会の常連として名を連ね、書評や評論にも筆を振るつた。

一方、内村鑑三の『東京独立雑誌』にも多くの稿を寄せている。八木光昭氏の調査では、明治31年8月から33年1月までに七十編ほどの評論(多くは文

学評論)を寄稿したという。なかでも特筆すべきは、SS名で発表した「『クオ・バデス』を読む」(『東京独立雑誌』第23号、明治32.2.25)である。ポーランドのノーベル文学賞作家シェンキェヴィチのこの長篇小説の英訳本をいち早く消化し、日本で初めて紹介したものであつた⁵⁾。

こうした活躍にもかかわらず、迷羊は明治33年に渡米する。その動機はわからない。渡米した迷羊は、サンフランシスコで「新世界」新聞に関わる。「新世界」は、1894(明治27)年5月25日に発刊された邦字新聞で、サンフランシスコの日系移民社会では「日米」と並ぶ二大有力紙の一つであつた。この「新世界」に、佐藤迷羊の名で「日本士官」という小説を発表している(1900.10.27から全27回)という⁶⁾。他に、迷羊の筆になるものとしては、「キリスト教と不敬事件」という記事(「新世界」1900.12.6)が確認されている。また、「加洲十二傑」という記事(「新世界」1900.12.24)には、「もし現今加洲において日本人十二傑の投票を募らば、わが輩は次の人々を推薦する」として、「文学家 佐藤迷羊君」と数え上げられており、カリフォルニア州日系社会での活躍を囑望されていたことが知れる。しかし、これらは渡米当初の明治33年のことであり、明治40年2月の帰国までの七年間に及ぶ在米時代のことは、ほとんどわかっていない。

ところで、押川春浪の短篇集『航海奇譚』(大学館、明治34.6)に、迷羊の作品「二人胡弓師」が収録されている。「はしがき」に「附録二人胡弓師は在米佐藤迷羊氏の作」とあり、迷羊がアメリカから原稿を送つたものとみられる。春浪の求めに応じたものか、迷羊が掲載を依頼したものか、定かではないが、同じ時期に東北学院に集つたことがこのようなかたちでも結ばれている。今にして思えば、明治26年4月の「文学会第二回記念大会」は注目すべきものであつた。この大会のプログラムによれば、後に第三代東北学院長となる出村悌三郎が英語演説「プロフェツツ」を、中村長之助(学院文学会の功労者、その閥歴については後で触れたいと思つている)が邦語演説「思想界の難問」を、岩野美衛(泡鳴)が新体国詩「悲詩人一の巻月夜」を、佐藤稠松(迷羊)が独逸語デクラメーション「シルレルのウェリアム、テル拔筆」を、押川方存(春浪)が剣舞を披露している。登壇の緊張に包まれたであろう彼らの若き日の一日と、その後の彼らの進んだ道を思うと、感慨深いものがある。

迷羊は明治41年4月、「萬朝報」の記者となる。

萬朝報時代の迷羊については、これまた東北学院の同窓生である木村久一が伝えている⁷⁾。木村は、学院の労働会で一緒だった小松謙介を萬朝報社に訪ねて、もう一人東北学院出身の記者がいると聞き、当時文部省担当記者だった佐藤稠松に会いに行った。稠松の小説を読んだと語る木村久一に対して、稠松は「今はもう文壇への野心はなくなつた。文壇という所は厳しい所で、ぼくらのような才能のない者の長居する所ではない」と語っていたという。また「どういう関係からか、数寄屋橋にある田村直臣氏の教会に、時々出席しておられた」とも書いている。「日本の花嫁」事件で教会の処分を受けていた田村直臣との関わりは、自分が、田村を追い込んだ当の「萬朝報」の記者となったことにも関係するのだろうか。神道式による葬式を遺言し、その通りに葬られたという稠松の信仰の曲折も含めて、その生涯ははかりがたい。鈴木千代志氏の言われる如く、迷羊というペンネームはまさに暗示的である。

- 註(1)鈴木千代志『『東京独立雑誌』の青年群像』（『内村鑑三全集7』『月報6』岩波書店、1981.3）、鈴木千代志「ある明治の青春（一）—迷羊佐藤稠松の『流浪生活』について—」（『探求』第2号1982.2）、鈴木千代志「佐藤迷羊ノート（1）佐藤迷羊の生年月日・没年月日をめぐって」（『山形県立山形工業高校研究紀要』第16号1996.3）、八木光昭「佐藤迷羊の周辺」（『洗足論叢』1996.12）
- (2)丑木幸男『志士の行方—斎藤壬生雄の生涯—』同成社、2001.9
- (3)仮入学について、佐藤稠松の頃はまだ明確な規定はなかったが、明治25年9月8日の「教員会記録」では、入学試験の点数によって「六十点以上及第五十五点以上仮入学 五十五点以下落第トスルニ決セリ」とある。仮入学を許可されたものは、その後の成績を勘案して勉学し得ると認められると、「入学ト見做ス」ことになる。
- (4)中途退学の時期は不明。30年9月以降であれば文科二年であるが、今は『東北文学』第26号（明治30.10）の「雑報」欄に「元学院文科一年生たりし佐藤稠松君は」とあるのに従っておく。
- (5)『クオ・バダス』の英訳本の入手経路、ならびにその影響については、八木光昭氏の論（前掲）に詳しい。
- (6)日比嘉高「日系アメリカ移民一世の新聞と文学」（『日本文学』2004.11）
- (7)木村久一「故人の思い出—佐藤迷羊さん（一）」（『東北学院時報』188号、昭和35.12.10）

4. 藤村赴任の頃—小松武治・浦口文治—

『東北文学』（第5巻第4号、明治38.11）の「雑報」欄に、次のような記事が載っている。

島崎春樹先生 信濃小諸にありし先生は、今春四月家を挙げて出京せられし由委員に信書ありたり、尚ほ其の書信によれば、先生は現今大作に従事し居られ、多分来春出版の筈なりと、現在の住所は、東京府下豊多摩郡西大久保百九十四番地なり⁽¹⁾



背広姿の島崎藤村
仙台で初めて背広をあつらえ、東一番丁の白崎写真館で撮影したものだ。

現今従事の「大作」とは、言うまでもなく

『破戒』（明治38.11.28脱稿、明治39.3自費出版）を指す。完成まであと一息の心の弾みの中で、出版の予定を知らせる文面となったものであろうか。住居変更を伝えるのが主たる目的であったとしても、東北学院を辞してほぼ八年が経つのに、文学会の「委員」宛にこのような通信を送ってよこしたということに、あらためて東北学院に寄せる藤村の愛着を思うのである。

『若菜集』を生むことになった藤村・島崎春樹の伝説的な仙台行は、佐藤迷羊とほぼ入れ違いとなる明治29年9月のことであった。藤村は、東北学院で布施淡や土井久壽彦、出村悌三郎といった若き教師たちとの出会いを持つ。東北学院を舞台にしたこれら同僚たちとの交流は、藤村のもう一つの『春』といった色彩を帯びている。そのことについては、藤村自身がいくつかのエッセイや小説「青年」に描いているところであるし、『島崎藤村と東北学院』⁽²⁾でも述べたので、ここでは繰り返さない。

東北学院文学会には一度登壇し、「学芸の愛慕」と題して「主としてルネッサンス時代のダヴィンチ等のことを話した」⁽³⁾という（第35回例会、明治29.11.14）。明治30年4月には、文学会会長に選ばれている。『東北文学』には、ラスキン『近代画家論』の一部を翻訳して寄せている（「欧州古代の山水画を論ず」、『東北文学』第19号、第23号）。小諸時代に本格化するラスキン研究が、この仙台時代に着手されたことともに、「告別の辞」（『東北文学』第24号）の名文も忘れがたい。

藤村はまた、短い在仙時代に、生徒ともよく交流をもった。木山喜代五郎（後に伝道に従事）の「島崎藤村先生を送る」（『東北文学』第24号）には、藤村の下宿を訪れて、東西文学の評論から美術論に

わたる談の尽きざりしこと、以来しばしば訪問して親しく話したことが書かれている。川合道雄によれば、当時、文科生であった山川丙三郎（後にダンテ学者）や渡辺安（後に儒教研究者）も、藤村の下宿をたびたび訪れた組であった⁽⁴⁾。藤村はこの山川、渡辺と一緒に松島に遊んだこともあったという⁽⁵⁾。

東北学院における藤村の「作文」の授業について書き残したのは、小松武治である。小松の「島崎藤村の思い出」（『東北学院時報』第168号、昭和26.12.5）には、「格別記憶に残るほどの深い印象を持っていないが」、「教育者に相応しい几帳面な処」があったと記されている。藤村就任当座の授業では、刊行されたばかりの坪内逍遙の『文学その折々』（春陽堂、明治29.9）から「人生四季」という箇所を、模範的文章として黒板に書いてはノートに書き取らせたという。

小松は、後年の著書『霊的改造』（北文館、大正8.12）の「回顧と前進」の中に、四十四歳の中年になった自己を、「人生四季と云ふ見点から云へば先づ真夏の頃と成つたのである」と書いている。藤村の授業が記憶の底に息づいていて、二十年以上も経って、「人生四季」という言葉が口をついて出たのであろう。

註(1)上京後の藤村の住所は、西大久保四百五番地である。誤記か。

(2)『島崎藤村と東北学院』東北学院特別企画「島崎藤村と東北学院」実施委員会、平成13.10

(3)「河北新報」昭和12.6.18掲載の、藤村の談話記事による。

(4)川合道雄『川合山月と明治の文学者達』基督心宗教団事務局出版部、昭和29.5

(5)川合道雄『山月子回顧ノート—近代の文人・思想家たち—』基督心宗教団事務局出版部、昭和40.7

(1)小松武治

小松^{こまつ たけじ}武治（旧姓・松下、明治9.10.3～昭和39.10.24）は、山形県^{かみのやま}上山出身。労働会に入会して働きながら勉学することを志し、明治25年東北学院にやってきた。その時のことを記した、花輪庄三郎宛の葉書が東北学院資料室に残っている。小松武治は、『東北学院七十年史』（昭和34.7）の編纂にあたった花輪の問い合わせに対して惜しめない協力をし、多くの返書を送っている。そのうちの一通（昭和27.8.11付）の末尾に記されたものである。

私は十七才の時上山を出て父に送られ笹谷峠を越えて大河原に出て父と別れて一路仙台に行き、泉水

という親類宅に一時ワラジを脱ぎ其夕方国分町一ノ一四労働会に訪れたのは廿五年十月三十日でした。丁度六十年前のことです。懐旧の情切々。

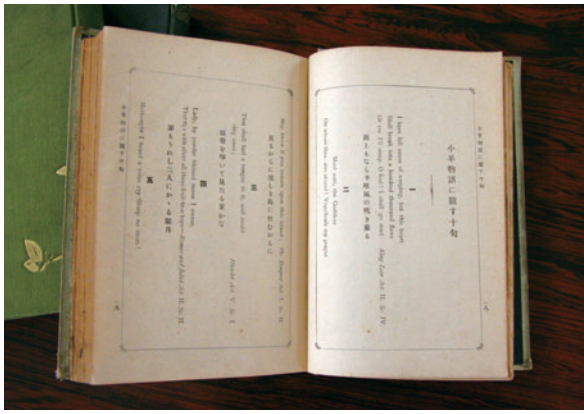
小松が東北学院普通科一年級に仮入学を許されたのは、その年の12月のことである。翌明治26年2月に本入学となる。同級生に川中勘之助、木山喜代五郎らがいる。この前後にキリスト教に入信したと思われる。「私は東北学院に入り掛けてから信仰の途に入つた、学院の師友の感化に負ふところが甚大である」（小松武治「生活楽観」、『霊的改造』前出）。

小松武治の東北学院文学会での活動としては、第五回大会（明治29.4.23）で「漢学者に与ふるの書」と題する邦文朗読をし、その原稿を『東北文学』第16号（明治29.5）に載せたのが見えるだけであるが、卒業後の明治43年には、「失明詩人ミルトンの評伝」（『東北文学』第75号）を寄せている。

小松は、藤村の作文の授業を受けた普通科の五年生の頃を回想して、自ら「煩悶の時代」と語っている（『回顧と前進』前出）。煩悶のよってきたところは、第一に養子問題であり、それに信仰の問題が加わった。養子問題は、結婚問題を兼ねていた。「二十一歳の血気盛り」の反抗心と自己の将来に対する憂慮からこれを拒絶するつもりであったが、結局、明治29年12月叔父（母の弟）の小松英次の養嗣となり、小松と改姓した⁽¹⁾。信仰上の苦悶については、「二十二歳当時の予が煩悶」（『開拓者』第12巻第2号、大正6.2）として発表された、明治30年当時の日記に見ることができる。ここにはキリスト者としての自己のあり方について、真摯な煩悶苦悩が綴られている。

明治30年6月、小松は東北学院を卒業する。「妻帯の卒業生」は、同年9月第二高等学校に進学。さらに明治33年9月には東京帝国大学文科大学に入学する。小松が三年生であった明治36年4月、文科大学に夏目漱石と上田敏が講師として就任することになった。つまり、小松武治はラフカディオ・ハーンと夏目漱石のどちらの講義も受けるという、幸運な巡り合わせとなったのである。とりわけ、小松の漱石に対する敬愛の念は深い。

小松は、帝大文科大学卒業の直前に、チャールズ・ラム『沙翁物語集』（日高有隣堂、明37.6）を翻訳出版する。この本は上田敏と夏目漱石の序を持つが、漱石は小松の訳稿をいちいち原書と照らして校閲し、「小羊物語に題す十句」という、凝った序——シェークスピアの書から一節を原文で引用し、それにふさわしい俳句を漱石自ら作って付したもの



漱石「小羊物語に題す十句」

——を寄せてくれた⁽²⁾。一学生に対する漱石の過分な骨折りに、小松はいたく心を打たれた。そのことを、小松はTKの名で「夏目漱石先生の事」(『開拓者』第12巻第1号、大正6.1.1)に書いている。ここにはまた、漱石から「君もかうして書物を出すなら僕も出さうかなど云はれ、其後問もなく『吾輩は猫である』が出版せられ、私も一部を頂戴した」こと、漱石が大学を辞めて朝日新聞社に入った動機について、直接聞いた話として「僅か計りの学生を相手に講義するよりも、広い社会を舞台として自己を表白する方が、やり甲斐もあり又世を益する事ともなろう」という漱石の言葉を伝えている。この文章は、漱石の死(大正5.12.9)を受けての、小松の切なる感謝と哀悼の表明であるが、漱石の一面を伝えていて興味深い。

漱石の没後も、小松は関わりを持つことになる。皆川正禮が帝大での漱石最初の講義を『英文学形式論』(大正13.9岩波書店)として刊行しようとした時、漱石の原稿が見出せなかったため、受講した四人の学生時代のノートをつきあわせて稿を起こした。そのノート提供者の一人が小松武治であった。

さて、大学を卒業した小松武治は、明治37年8月すなわち卒業の翌月から、日本基督教青年会同盟(YMCA)の幹事および主事として長く勤めることになる。英文学についての研究も継続しており、YMCAの機関誌『開拓者』(明治39.2創刊)に、信仰や英文学に関わる文章を発表している。『開拓者』第3巻第6号(明治41.6)からは主筆となり⁽³⁾、論説にも筆を奮う。雑誌『開拓者』と東北学院との関係は深い。ちなみに明治43年第5巻まで(雑誌自体は51巻まで続いた)に限って、東北学院関係の寄稿者を執筆順にあげてみると、小松武治の他に中村長之助、赤星仙太、土井久壽彦、浦口文治、前田二郎、シュネーダー、栗原基、阿部能文、島貫兵太夫、杉山元治郎、笹尾条太郎、木村久一等の名が見える。これらの人々の執筆には、小松武治の介在も関係し

ていようか。

小松は、日本基督教青年会同盟の仕事の傍ら、多くの書を残している。上に記したもの他、翻訳では、ラム『沙翁物語十種』(明治40)、フレデリッキ・ロバートソン『信仰の勝利』(明治41)、プリンス・マーロー『健



小松武治の著書

康と性欲』(明治42)、『ダニエル・ホイラー伝』(大正2)、『沙翁史劇物語』(大正3)、フォスデック『現代の危機と基督教』(大正8)、『ホーマー物語』(大正12)、『ヴァージル物語』(大正12)。著書では『信仰の要義』(明治42)、『現代の思想家』(大正3)などがある。

大正11年には東京高等工芸学校(現在の千葉大学工学部の前身)の教授となり、その後立教大学教授等を歴任し、昭和34年10月富士短期大学長に就任した。「奉仕」を自己の信条とした生涯であった。

註(1)『芙蓉峰』第9号(明治29.12)の「雑報」欄に、松下武治の改姓のことが伝えられている。学校への届け出は明治30年1月。

(2)漱石との関係、及び小松武治の来歴については、宮本盛太郎「夏目漱石と小松武治」(宮本盛太郎、関静雄『夏目漱石一思想の比較と未知の探究』ミネルヴァ書房、2000.2)、久保忠夫「小松武治先生と『沙翁物語集』」(『東北学院資料室』Vol.2、2002.12)に負うところが大きい。

(2)浦口文治

藤村の仙台時代に接点を持ち、漱石とも関わりがあった人物として、いまひとり触れておきたいのが、浦口文治(明治5.2.13~昭和19.3.8)である。私が浦口文治という名前を記憶したのは、太宰治の小説『新ハムレット』からであった。『新ハムレット』(文藝春秋社、昭和16.7)の「はしがき」に、次の一文がある。

作者も、此の作品を書くに当り、坪内博士訳の「ハムレット」と、それから、浦口文治氏著の「新評註ハムレット」だけを、一とおり読んでみた。浦口氏の「新評註ハムレット」には、原文も全部載っているのだから、辞書を片手に、大骨折りで読んでみた。いろいろの新知识を得たような気もするが、いまそれを、ここでいちいち報告する必要も無い。

このように触れられた浦口文治が、一時期東北学院に書籍係(掌書)として勤めていたことを、『東北文学』や『芙蓉峰』といった学内誌の記事から知った。『東北文学』第11号(明治28.11)の「雑報」欄には、「浦口文治氏は書籍掛として新たに來任せられ、出村悌三郎氏と交代せられたり」と記されている。採用のいきさつや就任の時期は明らかではないが、『芙蓉峰』10号(明治30.1)には「浦口文治氏 東北学院書籍係たりし同氏には、此度辞任せられ、後任者として、石倉民三氏、就任せられたり」とある。前後の記事の配列から、辞任したのは29年12月末と推測される。東北学院には一年ほど勤めていたことになる。浦口にとってのこの短い東北学院時代もまた、自己が何者たらんとすべきかに迷い、踏み出すべき道を模索していた時代であったようだ。

浦口文治(明治5.2.13~昭和19.3.8)は兵庫県三田さんだの生まれ¹⁾。三田小学校を終えた後、神戸に出る。川本殉蔵の家に寄宿してキリスト教の感化を受け、明治18年に神戸教会にて原田助より受洗、京都に出て同志社に入学する。明治23年同志社普通学科を卒業。卒業後は、神戸の英字新聞社・ヘラルド社で翻訳に従事したり、女子神学校で神学を教えたりした。明治27年には、神戸教会の副牧師の推薦でW・ウエストンの四回目の日本アルプス登山に通訳として同行している。その後、東京に出て、築地居留地にいた宣教師の通訳を勤めながら英語と神学を学び、明治28年には來日した救世軍のエドワード・ライトの通訳者をつとめる。仙台に來たのは、その後のことである。手塚竜麿『頂きに憩う一随想と論考』の「浦口文治の生涯と業績」に、次のような記述がある。

浦口はそのあと仙台へ行って東北学院の付属図書館に勤めながら、おそらく聴講生のようなかたちで神学・英学・ギリシャ語を学んだといわれるが、ギリシャ語の勉学は新約を原典から読む必要を感じたからでその後の聖書研究に一転機となった。わずかな期間ではあったが明治二十九年に教師として來仙した島崎藤村ともめぐりあっている。

浦口の前任者の出村悌三郎が書籍掛をしたのはまだ神学部生だった時であり、山川丙三郎も文科卒業後の一時期、東北学院の書籍掛として雇われたことがあった。書籍係というのは、勉学を続けながら働くには好都合であったようだ。当時、有数の洋書の蔵書を誇っていた東北学院図書館にあっては、英語

に強いことも採用の条件であったろうと思われる。浦口はこの学院時代に、二度ほど文学会での発表を行っている。第三十一回例会(明治29.2.8)では、「君が代」「万歳」と題する演説を行い、第五回大会(明治29.4.23)では、「親鸞上人及其時代」と題する英文朗読を行った²⁾。『東北文学』第16号(明治29.5)には、第五回大会におけるそれぞれの発表についての紹介と感想が記されている。

次は浦口文治氏の「親鸞上人及其時代」なる英文朗読なり此は嘗て太陽紙上に出でたる大内青巒居士の文を翻訳したるもの、由にて初に説の可否は訳者其責めに任せず文の巧拙も亦其責めに任せず何となれば此は某新聞記者の校閲を経たるものなればなり云々の前置をおかれたり吾人も亦茲に其可否を云はざるべし只吾人は英語に堪能なりとの評判ある氏自身の所作を聞く能はざりしを憾む

同じ号に、中村長之助「東北学院文学会第五大会傍聴録」もあり、そこにも「余は君の創作を見んと欲して大に失望せり」と書かれている。「嘗て某英字新聞社々員たりし」という肩書きゆえに期待されたが、創作でなかったことで失望感を与えたようだ。

藤村の赴任はその後のことであり、二人の在任期間が重なるのは、わずか四ヶ月ほどである。木山鏡雪(木山喜代五郎)「秋の旅」(『東北文学』第19号)には、松島への二泊三日の遠足運動会の様子が詳述されている。その中に「島崎先生」とともに、「浦口掌書」の名が2回出てくる。この旅で、あるいはまた、藤村が「この私を待ち受けて呉れていたやうなものであつた」と書いた東北学院の図書館で、浦口は藤村とどのような言葉を交わしたであろうか。

東北学院を辞めてからのことについて簡単に触れると、浦口は明治30年二十五歳の時、北海道函館中学校の前身校に赴任し、中学校教員免許を取得、明治32年熊本済々黌中学校に転じる。この熊本時代に、当時五高教授であった夏目漱石を知る。漱石が英国へ留学するまで(留学を控えての漱石の上京は明治33年7月)、「研究会に出席するなど新知識の摂取につとめた」という。その縁で、浦口が『英詩の栞』(英学新報社、明治39.9)を刊行した時には、漱石愛蔵の英詩人の肖像画を数枚複写させてもらった。『英詩の栞』「序」の「追記」に、漱石の厚意に対しての謝辞が記されている。ついでながら、熊本時代の漱石と奥太一郎との交流はよく知られるところであるが、奥太一郎も同志社出身(明治21年卒業)で、かつて東北学院に奉職(明治25.11~26.3)し

たことがあった³⁾。そうしたことが漱石の知遇を得るきっかけとなったのかもしれない。

浦口文治は、熊本で七年間教えてから新潟の長岡中学校に転じ教頭となった。その後、日本女子大学校や慶應義塾大学理財部の講師、台湾総督府中学校の英語主任等を歴任して、大正2年母校同志社の招聘を受ける。同志社では教授に任職のまま米国留学を命ぜられ、二年余りハーバード大学に留学し、マスター・オブ・アーツの学位を得て大正4年10月帰国。同志社大学の英文科主任教授として学科の編成や教授陣の強化を図るなど尽力したが、同志社騒動に対する意志表示として、大正7年1月辞表を提出し、同志社を去る⁴⁾。大正9年、神田乃武の斡旋により東京高商の教授に任官され、昭和4年まで勤めている。晩年は、『新評註ハムレット』（三省堂、昭和7.10）、『新訳ハムレット』（三省堂、昭和9.12）に心血を注いだほか、聖書研究にも業績を残した。

太宰が参考にしたという『新評註ハムレット』は、エリザベス朝当時のハムレットの姿を明らかにするという意図から書かれた、浦口の創見による「新評註」であり、彼がハーバード大学に留学して以来二十年間にわたるシェイクスピア研究の成果である。一方、『新訳ハムレット』は浦口が説いたグループ・メソッド（「文の頭からセンテンス・グループで訳していく」という一種の直読直解法）の実践であった。また、浦口文治は『ジャン・ラスキン』（同文館、大正14.8）を著したラスキン学者でもあった。浦口は授業のテキストの必要から、大正になってラスキンにとりかかったのであるが、藤村がラスキンの『近代画家論』の一節を『東北文学』に訳出したことは記憶にあったろうか。現在、東北学院大学図書館に所蔵されている浦口文治の著書のうち、『ジャン・ラスキン』（前出）、『グループ式訳し方』（同文館、昭和3.6）、『にげゆく想ひ』（警醒社、昭和7.10）、『新訳ハムレット』（前出）は浦口本人からの寄贈によるもので、「貴院御創立五十周年を祝して」の添え書きがある。

註(1)浦口の略歴については、手塚竜磨『頂きに憩う一随想と論考』（非売品、新教出版事業部、昭和59.12）の「浦口文治の生涯と業績」と、三田市のホームページ「九鬼奔流」を参照した。

(2)浦口は第三十回例会（明治28.12.7）にも出演のはずが、もう一人とともに「故ありて欠席」となったことが『東北文学』第12号「雑報」欄に書かれている。

(3)奥太郎については、久保忠夫「一枚の写真—奥太郎とその周辺—」（『東北学院資料室』Vol.3、2003.12）

に詳しい考察がある。



浦口文治寄贈の書。「貴院御創立五十周年を祝して」の添え書き。

〔資料二〕

学校組織の変遷（『東北学院七十年史』より）

- 明治19年5月 仙台神学校創設
明治21年 英語予備科（4年）
邦語神学部（2年）
英語神学部（3年）
※英語予備科は「英語神学部ニ入ルノ生徒を予備スル処ナリ」（改組後の本科にあたる）。明治23年までは、翌年組織を改めた東北学院神学部に進むための予備教育でしかなかった。
- 明治24年9月 東北学院と改称
予科（2年）
本科（4年）
神学科（3年）
※「予科」には「予備科」の呼称も用いられた。
- 明治25年9月 予科（3年）
本科（4年）
神学科（3年）
- 明治28年3月 普通科（5年）＝旧制度の予科（3年）と本科1、2年に相当
専修部（文科2年、理科2年）＝旧制度の本科3、4年に相当
神学部（邦語2年、英語3年）
※この年、年度をこれまでの9月始まりから4月始まりへと改める。理科は明治30年廃止。

渥美 孝子プロフィール ATSUMI, Takako

1952(昭和27)年、宮城県生まれ。
上智大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学。
四天王寺国際仏教大学講師、東北学院大学講師、助教授を経て現職。

押川方義 そのひと（二）

東北学院大学文学部准教授

河西 晃祐

「棺を蔽ふて後其人の価値定まる」とは古人の言であるが、真の偉人は棺を蔽ふて後尚其価値の定まらないものである。ナポレオン、クロムウェル等は、この類の人である。特に押川方義先生は其最適例であり、先生自ら其人を以って任じてゐた。宗教家にして政治家たり、事業家にして哲人たり、教育家にして予言者たり。而して之等の天分は其一生に於て独特の形式をとって現はれてゐた。

これは押川方義の死後に出版された伝記『聖雄押川方義』の冒頭の一節である。押川とは“何ものだった”のか。「宗教家」、「政治家」、「事業家」、「哲人」、「教育者」、「予言者」、そして「利権家」。その人となりをよく知る人々をして「棺を蔽ふて後尚其価値の定まらない」と言わしめた人物像、それこそが押川方義の本質であったと云わざるをえない。

しかしながら、そのように身に付いた多様な姿、それは押川自身が望んだ人生の成果だったのか。

1901年に東北学院院長の職を追われ、1904年に朝鮮利権問題に関与して以後、押川は一時、己の立ち位置を見失っていたようであった。それが故にか、それ以後の押川は、望まれ請われるがままに、種々の団体や活動に関わっていったのである。

その結果、押川の交友関係と、活動の幅自体は飛躍的に拡大していったことは確かであった。だがそのことは、押川の多才さを開化させたのか。あるいは結果的に「何事も残さなかった」人生を導いていったのか。その答えを急ぐ前に、本稿では（一）に続く時期に押川が関わっていった活動を追いながら、その思想の在り方に言及していきたい。

4. 思想家時代

朝鮮利権問題に関与して以後の押川は、しばし表舞台には出なかった。しかしながら、その時期の押川は、その後の人生の歩む道を変えていくことになる交友関係をのばしていたのであった。

押川と旧知の仲であった松村介石は1907年に「日本教会」を設立、翌年から機関誌『道』を発刊

し、さらに1912年には日本教会を「道会」へと改称したが、押川はその活動に関与し、機関誌『道』に積極的に論考を寄せるに至っていた。

問題は、その道会が「『道』何の為に出づ。第一、我宗教観を宣べんが為めなり。第二、心霊的現象の秘儀を闡かんが為めなり。第三、基督教に向ふて高等批評を加へんが為めなり。第四、東西両洋の文明若くは思想の融和を図らんが為めなり」（藤一也『押川方義』205頁）と宣言されていたように、キリスト教と儒教の融合を目指し、「心霊治療」などを行う団体であったことであった。

道会との関わりについて、押川の伝記は次のように述べている。

東北学院を去って後大正二三年頃迄の先生は、殆んど一切沈黙の年日が続けてゐたが、令夫人を失はれて後、諸所に時折其言説を発表するに至った。特に先生と昵懇なりし松村介石君の道の会に於て、時々演説により其宗教観を発表したことがあった。併しそれも松村君の所謂新宗教に共鳴したのでもなく、又之れと事を共にしたのでもない、只同君に乞はるるままに、時折講演を試みた位のものである（『聖雄 押川方義』207-208頁）

伝記を執筆した大塚栄三が、敢えてこのように押川と道会の関係の希薄さを強調したのは、この引用にあるように、道会が「所謂新宗教」と見なされていたからだけではなかった。大塚がその伝記中において、「世人中或者は、先生が松村君の宗教説の如き宗教観を抱くに至った等と云つてゐるが、それは大なる誤であった、同氏の立場を是認したのでもなく、之れに賛同したのでも何でもなく」と繰り返し述べなくてはならなかったように（207-208頁）、当時の押川に対しては、信仰面においても道を外れた、という批判が向けられていたのである。

事実、押川は『道』紙上において次のような主張を述べていた。

一人には二つの異なる生命がある、一つは絶対の生命、一つは相対的のそれである。絶対的生命とは前述の五感の楽しみ、肉体の世界を超越したものである。あらゆる相対世界を超越した独立独存の生命である。此の生命に生きる事は、やがて人の真我本性に生きる所以である。而して、此の生命に到るの道は宗教である。併し一旦此の生命を捉めば、もはや宗教も其要とする所にあらずと云ってもよい、内外相忘、神人合一、天地一枚と云ふべき絶対境である（『聖雄 押川方義』208-9頁）

人が「絶対的生命」の境地に到りえるとし、果ては「神人合一」をなしえるといふこの押川の主張は、すでにキリスト教の教義からは捉えることが出来ないものになっていたといつて過言ではない。すなわち伝記作者の弁明は、故なきものではなかったのである。

そしてまた同時に、押川は『道』紙上において、後の代議士への立候補を暗示させるような「時論」、「政論」も積極的に展開していたのであった。例えば1914年8月、日本はドイツに対して宣戦を布告し、第一次世界大戦に参入したが、押川は『道』80号に発表した「大正三年の回顧」において、次のように主張したのであった。

若し茲に非常なる大抱負の下に、国家の運命を賭して、極めて短日月の間に、帝国の一大飛躍を成就せんとする大野心家、よく言へば大識見家が、今日の政治的首脳であったとせよ。これは固より稀世の英雄ならずんば不可能の事であるが、仮に左様の英雄が政務を処理して居たとすれば、或は英国の今度の依頼に依らずして、有耶無耶の間に之を葬むり去り、適当なる時機を捉へて或は独逸と結び、独逸人と支那政府を操縦し、且独逸種米国人を味方に引入れ、欧州列強に対しては、後方より露国を牽制し、而して機熟すれば直ちに彼の背後を衝き、かくして欧州大戦の結末を告げしむるが如き非常の政策を実行したかも知れぬ（藤一也『押川方義』220頁）

すなわち、ここで押川が主張していたのは、日英同盟を締結していた英国からの要請を「有耶無耶の間に」「葬むり去り」、ドイツと同盟を結んで欧州戦争に参戦し、ロシアの背後を衝き、ということであったのである。

この案については、押川自身が「かくせば或は驚く可き獲物を得たかも知れぬ。或は恐ろしき破目に陥ったかも知れぬ」と述べてもいた通り、どこまで

の現実性を認識していたのかは措くとしても、その主張は、他の類例を欠ない程の内容であった。少なくとも、すでにこの時期の押川の眼は、仙台からも、日本からも、そして朝鮮、中国大陸をも超えて広く世界へと拡がっていたことは間違いのないことであつたといえよう。

このように、押川と道会および松村介石との関わりは、確かに大塚栄三が伝記で述べたように、「松村君の所謂新宗教に共鳴したのでもなく、又之と事を共にしたのでもない、只同君に乞はるるままに、時折講演を試みた位のものである」ものであつたとしても、押川は自己の意志によって、自論を『道』誌上に展開していたのである。これは『道』という種のある種の同人誌的雑誌であつたがゆえに、自由な論の展開を載せることが可能であつたと考えられるのであるが、果してこのような主張を展開していった事が、押川の人生にとって有益であつたのか。

そしてこの道会との関わりから、押川は交友関係をさらに拡げていく。押川はここで、最後の弟子と云うべき大川周明との親交を深めていったのである。その後の大川との関わりについては続稿において述べていくことにするにして、次に押川が日本近現代史の表舞台に登場していく時期についてみていきたい。

5. アジア主義者時代

押川の活動をアジア主義的と名付けるのであれば、その端は京城学堂の経営や、清国学校経営計画などにも求めえるのかもしれない。だが、明治期から昭和期までにわたって、種々の事件に関与し、政治を動かしていった「亜細亜主義」者という歴史的存在の一翼に押川が列するに到つたのは、大正期に入ってからのことであつたと考えられる。

その間の事情について大塚栄三は次のように述べている。

先生の名が大正二三年頃から少しく政界に聞こえるやうになった。当時所謂憲政権護^(原文ママ)運動なるものが起り、其折先生も或る時は東京の劇場等で政談演説等をされるやうになった。之れは支那通の政客五百木良三君等が、先生を引出したやうな形になってゐたのであるが、護憲運動に携つたからと云つて、先生は当時の政治人足等と共に、憲政擁護藩閥打破を叫んだ訳でもなく、其運動を是認し其渦中に巻き込まれたのでも何でも無い。先生の心境は依然として神の経綸に参加して、先生の上に置かれた日本を最善最強とする使命の完成の外に何ものもなか

ったのである。当時国民議会議なるものがあり、之れを機として先生は五百木君を中心とする城南荘に關係のあった人々則ち往年清朝時代肅親王と義兄弟の約を結んで、准皇族の待遇を受けてゐた、川島浪速君を始め、大竹寛一、小泉又次郎、柴四郎、松平康国の諸君と相識るに至った。（『聖雄 押川方義』109頁）

ここに登場する「国民義会」とは、1914年に五百木良三によって設立され、パリ講和会議における人種差別撤廃問題などを契機として結成された人種的差別撤廃期成同盟会に参加したり（『大阪毎日新聞』1919.4.25）、政友会政権「弾劾演説会」を明治座で開催するなど（『読売新聞』1919.7.30）、大隈重信と憲政会を支持しながら、反政友会運動を展開した団体であった。だが、ここに述べられているように、押川の関心はもっぱら、国内の党利党略の類ではなく、ひろく日本の在り方を模索するというものであった。

その意味では、押川は己の政治的野心のために亜細亜問題を唱えていた政治家や、現在からみても不可思議としか云いようのない「支那」への想いを抱き続けた亜細亜主義者等とは一線を画す存在であったことは確かであったろう。

そのことの意味については後述していくが、ここでまず押えておきたいことは、冒頭でも述べたように押川を「押川」たらしめていく、国民義会への関りがもたらしていった交友関係の幅である。

同郷の出身でもあった五百木は言うに及ばず、後に満蒙独立運動での関わりを深めていく川島浪速とのつながりは、さらに後には、川島の養女となった肅親王家の王妃、川島芳子と押川との関わりをもたらしめていくことになった。そしてこの引用にも登場する小泉又次郎とは、第87-89代総理大臣小泉純一郎の祖父に他ならならなかった。さらに小泉とは代議士時代にも関わりを持ち続けていくことになるのである。

そして、押川はこの後、ここで知り合った面々との関わりから、第二次満蒙独立計画におけるキーマンとして、近代日本外交史にその名を残すことになるのである。

満蒙独立運動とは、1911年の辛亥革命によって没落した清朝の復興を願う宗社党（後に肅親王自身がリーダーとなる）と、川島や五百木らを中心とした民間人、さらに日本陸軍の一部や、後には日本政府までが直接に関与した大掛かりな運動であったが、その狙いとは、混乱が続いていた中国本土から、日

本の権益を抱える満蒙地域を「独立」させようとするものであった。

第一次満蒙独立運動は1911年頃から始まり、川島らが中心となって、肅親王を擁立して満州を、巴林王らを擁立して蒙古を独立させようとしたが、それを察知した日本政府の手によって中止されるに至る。

押川がどの時点でこの運動に関わりを持ったのかは、未だ明らかにはなっていないが、上記の伝記や、その他の史料から鑑みるに、押川自身はこの第一次満蒙独立運動には参画せず、第一次満蒙独立運動失敗後、日本において再起を図ろうとしていた肅親王、川島、五百木らと知りあうことになったと考えられる。

そして先述の第一次世界大戦の勃発後に成立した第二次大隈内閣期に、今度は日本政府の積極的な関与をもって第二次満蒙独立運動が進められていくのである。

当時の中国では、袁世凱の権力が強化され、さらに袁は1915年頃から皇帝登極への意欲を見せ始めていた。そのような中で、川島らは1915年夏頃から再度の満蒙独立運動を開始したのであったが、押川は1915年4月8日から23日まで「満州視察」に赴いているように（『押川方義川合信水両先生往復書簡集』140頁）、おそらくはこの第二次満蒙独立運動の当初から計画に関わっていたのであった。

その後、袁世凱への権力の集中を危惧する第二次大隈内閣は、紆余曲折を経て1916年3月に袁世凱排除の方針を立て、民間有志の排袁運動をも「黙認」する方針を決定した。すなわち、政府は一度は川島らの活動にお墨付きを与えたのである。

しかしながら、1916年6月の袁世凱の急逝によって事態は急変したのであった。すなわち、政府は手のひらを返して、満蒙独立運動を含めた一切の袁世凱（およびその後継者）への反対運動の中止を決定したのである。

そこで問題となったのが、「誰が工作を中止させるのか」（『満蒙独立運動』182頁）ということであった。満蒙独立運動は前述の通り、川島らが中心となって進められたものであったが、実態としては、日本政府、陸軍部の豊富な資金をねらって有象無象の大陸浪人らが、それぞれの一派を結成し、独自の計画を進行しつつあったのである。

そこで白羽の矢が立ったのが、「同志中に於ても重きを為」し、同運動における首謀者の一人であった参謀本部の田中義一ともつながりを持ち、さらに大隈重信首相、そして川島や肅親王とも深い交流があった押川に他ならなかったのである（『満蒙独立

運動』193頁)。

そして渡満した押川は、1916年7月現地において川島らが集めた兵器の処置や、肅親王の身分保障問題といった難題を何とかとりまとめたのであった(『大隈重信関係文書』早稲田大学「古典籍総合データベース」)。そしてその結果、一部では独立運動軍と張作霖軍との衝突を見たものの、第二次満蒙独立運動は終結に向かったのである。

すなわち、そもそもその行動が現在から見て「正当」か否かは措くとしても、いわば政府が引き起こしたともいえる事態の後始末を命ぜられた押川は、その交友関係と交渉能力を以て、確かにその役割を果たしたのであった。

それでは、このように始まった「亜細亜問題」に対する押川のその後の認識とは如何なるものであったのか。

日支の親善を恐るる列強は、日本の支那に対する野心を高調して居る。されど若し日本にして支那に対する野心なるものありとすれば、そは白人の圧迫より支那を救はんとの野心に他ならぬ。假令支那が之を喜ばずとも、日本は自家の危急を救ふ為に之を断行せねばならぬ。日本政府は其の日和見主義を放棄し去って、確呼たる方針を樹立せねばならぬ。今は是れ日支両国民が、互に肝胆を披瀝して固く相結ぶべき時である。相結んで亜細亜興復の大業に拮据すべき時である。

これは先述の大川周明が結成した全亜細亜会発行による『国際間に於ける日本の孤立』(1917年)に寄せた序の一文である。満蒙権益の確保に努め、対華二十一箇条要求を突きつけていた日本の行動を、「白人の圧迫より支那を救はん」というロジックに置き換え、臆面もなく「日支両国民が、互に肝胆を披瀝して固く相結ぶべき」と主張するその在り方は、当時の亜細亜主義者に極めてよく見られる主張に過ぎず、率直に言えば、オリジナリティも何も感じられるものではない内容に他ならなかった。

それでは何故、そのような押川に、『印度に於ける国民的運動の現状及び其の由来』を著し(1916年出版)、当時の亜細亜問題に関する最高の知識人の一人であったはずの大川周明が傾倒していったのか。その理由を、当時の押川の“ありかた”に着目して考察してみたい。

前述の伝記中の引用に「先生の心境は依然として神の経綸に参加して」いたとあったように、たとえばキリスト教の本筋からは外れた形であったと

しても、押川の眼の一端はあくまでも「神」を捉え続けていたのであり、押川にとっての「亜細亜問題」とは、何かに到る「道すじ」に過ぎなかったかのようにも思えるのである。

しかしながら皮肉なことに、ここに「亜細亜主義者としての押川」のオリジナリティが顔を見せていたともいえるのではなかったか。

すなわち宗教者としての知識、経験、そして名声は、常人には語りたが「神と人」を押川が語り続けることを可能にせしめていた。そしてキリスト教に由来する「神と人」を語りながら、それと同時に亜細亜を語りえる人物は、押川以外の亜細亜主義者には存在しなかったのである。

無論、島崎藤村をはじめとした同時代人らが褒め称えたように、その演説の卓越さや、感涙にむせびながら神に祈る姿は大川を魅きつけた一因であったのかもしれない。だが、その深因は冒頭に挙げた「棺を蔽ふて後尚其価値の定まらない」、常人には捉え難い押川の“奥行き”にあったのではなかったのか。

請われるがままに拡がっていった交友関係、望まれるがままに身につけていった交渉能力、その押川の「魅力」はさらに多くの人物を巻き込みながら展開されていくことになる。別の言い方をすれば押川は、残りの生涯をさらにその“定まり難さ”に向かって、まだ進み続けていくのである(その(三)に続く)。

参考文献、ホームページリスト

- ・『押川方義川合信水両先生往復書簡集』(基督教団事務局出版部、1981)
- ・藤一也『押川方義——そのナショナリズムを背景として——』(燦葉出版社、1991)
- ・波多野勝『満蒙独立運動』(PHP研究所、2001)
- ・大塚栄三『聖雄 押川方義』(押川先生文書刊行会、1932)
- ・アジア歴史資料センター <http://www.jacar.go.jp/>
- ・「神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ 新聞記事文庫」
<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/sinbun/index.html>
- ・『大隈重信関係文書』早稲田大学「古典籍総合データベース」
http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/ga_okuma/index.html

河西 晃祐プロフィール KAWANISHI, Kosuke

1972(昭和47)年生まれ。
上智大学文学研究科博士後期課程修了。
立命館大学非常勤講師、東北学院大学講師を経て現職。

杉山元治郎と日本農民福音学校運動（二）

東北学院大学経済学部教授
岩本 由輝

4. 農民福音学校から日本農民福音学校へ

前号2ですでに書いたように、杉山元治郎は、日本農民組合中央委員長を止めて間もない1927（昭和2）年2月11日から1か月間、定員10名の農民福音学校を賀川豊彦と隣り合って住むようになった兵庫県武庫郡瓦木村（現西宮市）高木東で開いている。教場は賀川の家裏にあった8畳ほどの小屋をあて、教師と生徒との人格と人格の接触を重視して通学できる距離の者でも全員寄宿して教室ばかりでなく、食堂でも寝室でも四六時中座臥一切を教育の場とすることから、寄宿舎には杉山の住んでいる長屋を用いることになったため、杉山はその向いに小さな家を建て、そこに移っている。そして、「農民福音学校の略則」において、

農民福音学校は名は学校であるが、寺子屋式である。デンマークのグルンドウキツヒの精神に従ふてやるもので、人格と人格の接触する教育の道場である。故に、すべては自治的で、本人の修養にまつことも多いのである。教室もない、器具もない、普通の住宅で座りながら教へらるゝのである。いはゆる学校の名にとらへられる人は、この学校にはいる資格はない。修養の志にもえて農村改造に突進せんとする戦士の学ぶところである。

という宣言を行なっている。学費は不要、寄宿舎の食費として実費の半額7円50銭を生徒が負担することになっていた。

校長は杉山元治郎、講師は日本農村伝道団理事の賀川豊彦・村島帰之・吉田悦三があたり、科外講師として林歌子・木村毅・牧野虎次・山本一清・三宅正一が協力している。

科目はキリスト教・社会問題・農業であったが、杉山は土壌学・肥料学・気象学を講じている。大阪府立農学校出身の杉山は、前号で紹介した小高農民高等学校でこれらの講義によって評判を得ていたのであったからお手のものであった。同じ頃、杉山との直接の接触を確認することはできないが、盛岡高

等農林学校出身の宮沢賢治が、みずからの有する土壌学・肥料学・気象学の知識を、それらを本当に必要とする農民に広めるため、岩手県立花巻農学校教諭を辞め、羅須地人協会を発足させ、土壌・気象にあわせた肥料設計の相談を行なおうとしていることと重ねてみると、杉山と宮沢に甲種農学校に学んだ人間に共通する社会的使命感を窺うことができる。

このようにして始まった農民高等学校は、1928（昭和3）年の第2回、1929（昭和4）年の第3回と内容を充実させて行くが、ここで1929（昭和4）年2月11日から3月14日にかけて開かれた第3回農民福音学校時間割があるので、資料として掲げると、

- 2月11日（月）開校式、聖書（賀川）・農村社会学（杉山）・イエス伝（吉田）
- 2月12日（火）聖書（賀川）・農村社会学（杉山）・社会思想史（賀川）・農学通論（杉山）・消費組合（安藤）
- 2月13日（水）聖書（賀川）・農村問題（杉山）・社会思想史（賀川）・農学通論（杉山）・音楽（黒田）・社会事業（富田）
- 2月14日（木）聖書（賀川）・農村問題（杉山）・農村経営（杉山）・キリスト教史（吉田）・漫遊談（木村）
- 2月15日（金）聖書（賀川）・農村社会学（杉山）・社会思想史（賀川）・植物病理（杉山）・農産製造（佐野）・廃娼問題（林）
- 2月16日（土）聖書（賀川）・農村社会学（杉山）・農村経営（杉山）・進化論（賀川）・動物進化（沢井）・農村衛生（芝）
- 2月17日（日）－
- 2月18日（月）聖書（賀川）・農村社会学（杉山）・農村経営（杉山）・土壌学（杉山）・木工（高井）
- 2月19日（火）聖書（賀川）・農村社会学（杉山）・イエス伝（吉田）・キリスト教史（吉田）・木工（高井）
- 2月20日（水）聖書（賀川）・農村経営（杉山）

山)・農村改良(賀川)・土壌学(杉山)・音楽(黒田)

2月21日(木) 聖書(賀川)・農村経営(杉山)・農村改良(賀川)・キリスト教史(吉田)・娯楽(モラン)

2月22日(金) 聖書(賀川)・農村経営(杉山)・農村改良(賀川)・植物病理(杉山)・農産製造(佐野)・児童問題(西坂)

2月23日(土) 聖書(賀川)・農村経営(杉山)・農村改良(賀川)・肥科学(杉山)・樹木に就いて(田中)・米に就いて(運田)

2月24日(日) -

2月25日(月) 聖書(杉山)・農用気候学(杉山)・農村改良(賀川)・肥科学(杉山)・農村副業(升崎)・民衆と工芸(柳)

2月26日(火) 聖書(賀川)・農用気候学(杉山)・イエス伝(吉田)・進化論(賀川)・農村工芸(升崎)・天文(ヤマス)

2月27日(水) 聖書(賀川)・農用気象学(杉山)・進化論(賀川)・農学通論(杉山)・音楽(黒田)・農村と法律(交渉中)

2月28日(木) 聖書(賀川)・農村社会学(杉山)・社会思想史(賀川)・キリスト教史(吉田)・農村工芸(升崎)・農村と法律(交渉中)

3月1日(金) 聖書(賀川)・農村社会学(杉山)・社会思想史(賀川)・農学通論(杉山)・農産製造(佐野)・日曜学校

3月2日(土) 聖書(賀川)・農村社会学(杉山)・社会思想史(賀川)・キリスト教史(吉田)・地質学(中村)・雄弁会

3月3日(日) -

3月4日(月) 聖書(賀川)・農村問題(杉山)・昆虫学(湯浅)・農学通論(杉山)・農村工芸(升崎)

3月5日(火) 聖書(賀川)・農村問題(杉山)・イエス伝(吉田)・キリスト教史(杉山)・農村工芸(升崎)

3月6日(水) 聖書(賀川)・植物病理(杉山)・昆虫学(湯浅)・農学通論(杉山)・音楽(黒田)

3月7日(木) 聖書(賀川)・農村問題(杉山)・生活科学(交渉中)・キリスト教史(吉田)・農村と女工(交渉中)

3月8日(金) 聖書(賀川)・植物病理(杉山)・昆虫学(杉山)・農学通論(杉山)

3月9日(土) 聖書(賀川)・生活科学(交渉中)・キリスト教史(吉田)・星の観測(ヤマス)

3月10日(日) -

3月11日(月) 閉校式

というものである。2月25日の「民衆と工芸」を担

当した柳は、当時、民芸運動を全国的に進めていた柳宗悦である。

杉山は、1930(昭和5)年2月の第4回農民福音学校の開校式において、

本日、全国各地より御来集いただきまして、第四回農民福音学校を開校することのできましたことを、まことに喜ばしく存じます。農民福音学校は、学校といふ名称をつけてありますが、ごらんのとほりの寺子屋です。なんの設備もない、学校といへば学校、私塾といへば塾です。なぜ、かうした学校を開くかといへば、それは単に智識を教育するためではない。智識をあたへるだけならば、たくさんほかにより学校がある。だから不完全な学校を開く必要はない。今の学校でかけてあるもの、即ち、精神的なもの、目にみえないものについて修養をしないからであります。

ある人は、一切のこと経済でできるやうにいふのであるが、私はそうとばかり信じない。その反対に良い人間ができるときに、良い経済のできることに信じます。

例へば、デンマークの農村文明は、気候や土壌にめぐまれてあるからではない。むしろ悪い気候と土壌と戦ふと、そしてあれだけ多くの収入をあげてゐることは、なんであるかといふに、所謂デンマークの国民高等学校、即ち精神文明の賜物であることは否定できません。

わが日本の農村の実例にみるも、ほとんど同一の経済情勢にある村でありながら、一方は悪い村、一方は善い村になつてゐるのは何か、それは良い人間があるか、否かであります。かういふ意味あひからして、われわれは日本の農村をよくするには、どうしても確乎とした精神的な農村青年をつくるにありと信じてゐます。このところに、この不完全な農民福音学校を開設し、みな様にきていたゞいたわけも、またこゝにあるのであります。ぜひ諸君の充分なる御修養を願ひたい。

本校は、前述のやうに普通の学校とちがひ、規則であせよ、かうせよといふやうなことはしません。一切は、みな様の自治にまかしてあります。

即ち、ここはみな様の修養の道場であると考へ、自分で修養してもらはねばなりません。ただ先生とか生徒とか外面的の区別はしてゐるが、先生も生徒も一緒に修養するところです。普通の学校とちがひ、寝食をともにし、先生と生徒との人格がふれあふて、お互い錬磨しやうといふのです。ちやうど角力をとるやうな気持で、やつていたゞきたい。かくするならば、僅かに一ヶ月間の短かい修養でも何か

えるところがあるのです。

日本の農村の窮乏は金でない。財物でない。むしろ人間です。精神的な飢饉です。一万三千の村々に、年に僅か十人の修業生をおくりだすことは、あたかも九牛の一毛にもならないことで、何事もなしないであらうと思ふが、決してそうでない。

デンマークもわずかに四人の生徒から始まり、五十年後の今日あの立派な農村文明を建設したのであります。だから、われわれの仕事は大海に砂粒をなげるやうなものでない。必ずや諸君が捨石となって、村で働いてくれる時、近い将来に農村文明はきずかれるのであります。信じてお互いやりましよう。

と述べている。なお、農民福音学校は、1930（昭和5）年中に日本農民福音学校と称するようになるが、第4回を終ったところで同校は45名の修養者を送り出している。その内訳は滋賀7、京都6、岡山6、兵庫4、新潟3、愛媛3（うち女子1）、山梨2、静岡2、大阪2、和歌山2、高知2（うち女子1）、秋田1、福島1、茨城1、長野1、広島1、島根1と2府15県にわたっている。

5. 農民福音学校運動の全国展開

ところで、日本農民福音学校が一定の成果を示すなかで、全国各地に同様な組織をつくる動きがみられるようになる。なかには日本農民福音学校より早く発足したものもあるが、とにかく兵庫県の瓦木村までは赴くことができない人たちの要望に応えようということで、各地の教会関係者から日本農村伝導団（神の国運動農村伝道部）に相談が寄せられるようになる。そのようなとき、杉山は施設や設備よりも、とにかく開校することに意味があるといい、賀川と手分けしてみずからも積極的に講師として出講することを心掛けている。

ここで杉山と交流のあったいくつかの農民福音学校（農民高等学校）についてみておこう。

(1) 渋川国民高等学校

1924（大正13）年1月に群馬県群馬郡渋川町（現渋川市）の渋川組合教会牧師栗原陽太郎によって農閑期の3ヶ月間、毎夜、教会で開かれた国民高等学会に発するものであるが、栗原は農村伝道について、「農村伝道教化の根本は、デンマーク式国民高等学校風のキリスト教の信仰を根底とした人格教育をほどこし、農村をして『神の隣人及び世界を愛すること』を教へ、神の国の実現に熱狂せしむる宗教的精神を扶殖しなければ、決して農村伝道教化

の根本問題を解決することはできない。これをなすには根拠ある町の教会において、この国民高等学校風の農村青年に対する教育運動を起さねばならぬ」という信念を有しており、渋川国民高等学校に発展してのちも、みずから牧師を兼務する吾妻教会と名久多教会において渋川まで通うことのできない青年を対象に毎週金曜日・土曜日の午後に民衆学会を開くなど、積極的な運動を展開している。

(2) 膳所湖南公民講座

1926（大正15＝昭和元）年に滋賀県滋賀郡膳所町（現大津市）で膳所町同胞教会牧師矢部喜好によって同教会に創設されたものであるが、1929（昭和4）年からは栗太郡草津町（現草津市）や野州郡守山町（現守山市）の各所で巡回農民講座を開いている。1930（昭和5）年の公民講座の趣意書に、矢部は、

成人教育の必要を力説されている今日、湖南の有志諸君のため、公民講座を開設して、ここに五歳を数へました。今や新しい年をむかへて、ことに心の緊張を要するとき、いはゆるお正月の享楽気分から遠ざかつて、静かに先輩諸氏の言葉に耳をかたむけやうではありませんか。

と書いている。

(3) 湖南国民高等学校

1926（大正15＝昭和元）年に滋賀県滋賀郡堅田町（現大津市）に堅田町基督教会牧師西村関一によって創設された湖南国民高等学会が1929（昭和4）年3月26日から新年度において改組されたものであるが、会としての創設時の趣意書には、

本会は、いはゆる専門家や知識階級のために存せず、筆とる者にも、鋏にぎる者にも、鉄槌をふる者にも、すべて職業に従事する人々に必要なりと信ずる高等教育を受くる機会を与へんとするものなり。本会はデンマーク国における国民高等学校の範に則り、神と祖国と隣人とを愛する堅き信念の上たち、新時代に処する学問を理解し、共働してわが国の農村文化を高め、充実せる農村生活を実現せんとする、有為なる地方青年のために生れたり。

ということが記されている。杉山は、実はこの学会の第2年次の講座に招かれ、農村経営問題と消費組合を講じている。

(4)静岡興農学園

1928（昭和3）年4月、東京興農園主であった故渡瀬寅次郎の遺志にもとづいて静岡県田方村西浦村（現沼津市）久連に開設されたもので、学園長にはデンマークに留学して帰国した平林広人が就任し、18歳以上の農村青年男女を4月と9月の2期に入学させ、修業年限を1か年、授業料年20円であった。なお、月5円の生活費を徴収したが、学園で労働したときには、その賃金相当分を差し引いて納入させることにしている。1930（昭和5）年現在、在學生は10名とある。

(5)山梨高等農民夜学校

1928（昭和3）年12月、山梨県の富豪一族の若尾金造が賀川、杉山の勧めで中巨摩郡田之岡村（現八田村）に設けた農村セツルメント事業の一部として始められたものである。

(6)信州農民福音学校

1929（昭和5）年2月、メソジスト教会宣教師ダニエル・ノルマンが賀川、杉山のすすめで長野市県町の進徳館の1階2室を教室に、2階を寄宿舎にあて、23名を収容して2月2日から11月までキリスト教の立場から農村問題を考究するために始められたもので、長野県内の7つの郡の22歳から26歳までの青年が集まったが、夜の授業には教会員も聴講して満員の盛況であった。杉山も招かれて出講している。この成績にかんがみて日本メソジスト教会内に農村伝道の議が起っていることは特記すべきである。なお、1931（昭和6）年には、信州各地に同様な組織が発足したことから、長野農民福音学校と改称している。

(7)宇和農民福音学校

1929（昭和4）年に信州農民福音学校の成功に触発されて、愛媛県東宇和郡宇和町（現西予市）の宇和町日本メソジスト教会に四国内の2県5郡より18名の生徒が参加して始められたものであり、開校にあたって宇和町が100円を寄付している。

(8)豊科農民講習会

1930（昭和5）年1月、松本市在住のメソジスト教団の宣教師エドガー・カルヴィン・ヘニガーと豊科日本メソジスト教会牧師腰山周蔵が、やはり信州農民福音学校の成功に触発されて長野県南安曇郡

豊科町（現南安曇市）の豊科教会で農閑期を利用して始めた3日間の講習会が始まりで、附近2～3里の農村から約300名が参加するという盛況であったが、1931（昭和6）年に豊科農民福音学校と改称し、10人の寄宿生にしぼって講義形式で進めることとしている。

(9)中越農民福音学校

1930（昭和5）年1月20日から23日まで、信州農民福音学校の成功をみてきた長野県駐在のメソジスト教団宣教師アルフレッド・ラッセル・ストーンが、その監督地域が富山県に及んだのを機会に、富山県東礪波郡出町（現礪波市）に開設したものである。

(10)高知県和田農民福音学校

1930（昭和5）年4月12日、高知県幡多郡和田村（現宿毛市）の村長和田栄の主唱で、デンマーク国民高等学校の方式により設立されたもので、毎月、1、10、20日の3日間、夜間開講する。講師は村長の和田がつとめ、農村法律・農村経営・農村娯楽・日本歴史・国語・初等数学・英語が講じられるが、入退学は自由である。ちなみに、和田は社会民衆党高知県支部聯合会の顧問で、関西最初の無産村長として知られているが、和田は開設にあたって、

農業国日本の死活の運命は、一つに農村問題の解決の有無にかかつてあるといつても敢て過言ではない。農村振興の声は、既成爲政者によつて、かなり古くからとなへられてあるが、顕前の事實は皮肉にもだんだんと疲憊の深度を増大しつゝある。それ故、本当の意味の農村救済は、農民自身の自発的協同的、自主自治的教育の普及にまたなければならない。その意味において本校は開校されたもので、何にもむつかしい理論や学理を教へるところでなく、農民社会生活の生きた道場である。

と述べている。

(11)御殿場農民福音学校

1930（昭和5）年8月12日、折から静岡県駿東郡御殿場町（現御殿場市）に静養中の賀川豊彦のもとに集まった12～3名を相手に9月3日まで隔日で夜2時間ずつ行なった寺子屋式夜学校が発端となったものであるが、同郡高根村（現御殿場町）に7反歩の土地を借り入れて設立した高根道場を足がかりにして高根学園へと発展をみることになる。そのさ

い、賀川が座談的に話した立体農業がヒントとなり、高根農場でその実現をはかろうとしたものである。

(12)山梨農民福音学校

1931（昭和6）年1月、甲府駐在のメソヂスト教団の宣教師ウォルター・ジョージ・コーツによってはじめられたもので、

我が山梨の農民青年よ、吾人の住む農村は今や経済的に悩み、社会不安に怯えてゐる。しかし、これは一地方的の問題ではない。実に国家的重大性をもつものである。また、これは国民一般の大なる関心を要すべき問題ともいへばならない。この時機に当り就中農村青年の深き自覚と雄々しき奮起とに待つもの特に大である。時代はそれを要求している。もしも今日の農村問題の解決をもつて、単に暴力行為のみに訴えんとするか、又は必ず近き将来に、経済的肉体的将又精神的疲労と自滅とを招来するは火を見るより明かである。吾人はこの処において最も賢明なる解決の道を見出さねばならない。吾人は今日の政治家、または道徳力に、はたして絶対の信頼をかけ得るか。あるひは他に依るべきものなきや。ここにおいて、吾人は現在の社会制度、経済制度をかなさしめつゝある病根の奈辺に潜むかを見極め、同時に現下社会に欠除せるものの何たるかを省み、さらに進んでは、吾人の最大要求を表示し考究する必要はないであらうか。我等主催者は、その意味に於て、農民福音学校なる名称の下に、当県下の農村青年にキリスト教的精神の理解と同時に新しき農村経営の智識並に合理的農業技術をわかち、かくすることにより更生農村の出現を企画要望するものである。今年是最初の試みであるが、今後毎年継続することにより、内容の充実を計り、かつ農村の開発に応分の貢献をせんと希つてゐる。それは新しき農村を目ざして、開拓の事業にあたらんとする理想に燃ゆる青年は来り学べ。我等は諸君の来校を衷心より歓迎して待つ。

という呼びかけに応じて集まった22名を相手に開校したものである。

(13)東信農民福音学校

1931（昭和6）年1月、長野県北佐久郡小諸町（現小諸市）の小諸町日本メソヂスト教会に22名の生徒を集めて開かれたものであるが、北佐久郡から14人、南佐久郡6人、小県郡から2人であり、ほかに教会員6名と傍聴者6名が参加している。講師の

1人として招かれた杉山のみた印象は、

他の府県とちがひ、マルクスのものも読んでゐる。クロポトキンのもも読んでゐる。だから批判能力は高い。鋭い質問もする。ストーブをかこんでの懇親会には、社会問題も論ぜられる。しかし、この人々は単なる思想に生きるのではなく、何処までも大地の上に生きて行かうとする決心の、ほのみえて嬉しい。

というものであり、

この妙な寺子屋式教育は、思想的に目醒めた青年にも、何か一つ感銘をあたへたようである。

とも述べている。

(14)その他

杉山のメモには、さらに、愛知県西加茂郡猿投村（現豊田市）の国民高等学校、茨城県猿島郡弓馬田村（現岩井市）の農村青年修養会、大分県直入郡竹田町（現竹田市）の大分農民福音学校と連絡のあったことが窺えるが、それ以上のことは分らない。

6. 農民福音学校指導者養成協議会

いずれにせよ、これまでみてきたように農民福音学校運動が全国的な展開をみせるようになると、そのための指導者養成が主要な課題となってくる。そして、1931（昭和6）年4月9日と10日の2日間、東京市の明治神宮表参道のユニオン・チャーチを会場に第1回農民福音学校指導者養成協議会が開かれている。

第1日目（4月9日）

神の国運動農村伝道部主任の真鍋義一が開会の辞において、

今日社会不安のおりから私どもの最も重大なる問題は農村に福音をのべ伝えることであり、農村の伝道は一人が一人を導く寺子屋式の農村福音学校が最善の方法であると思ふ。今日キリスト教伝道の行きづまりをなした最も大きな原因は、クリスチャンの聖書的知識の欠けてゐることである。それにたいして福音学校に於ては教師と生徒が幾日かを生活をともして研究することは、最も適当な方法である。これは教会を中心としての福音学校であり、教育でなければならぬ。

と述べ、ついで杉山が日本農民福音学校校長として、農民福音学校の主旨について、

私は最初の技術員として働いてあるとき、村々をめぐりつつ、農村改善の問題は結局人物の問題である事を痛感したが、この事はホルマン博士の名著『国民高等学校と農民文明』なる書物を読み、且五ヶ年間の農民福音学校を自らやつてみて深く信ぜしめられた。農民福音学校の大眼目は平凡なる偉人をつくることである。「人生を祝祭に赴くが如く愉快にはたらき」基督教的人生観、社会観にたつて、行きつまりの農村を打開し、新農村文化の建設をこそ望むべきである。

と揚言する。

協議に入って、まずアルフレッド・ラッセル・ストーンと瀧沢四郎の2人を発起者とする「農民福音学校経営及び財政問題について」がとりあげられたが、ストーンが急病で出席できなくなったことから、その講演原稿を瀧沢が代読している。ストーンが主張するところは、

農民福音学校経営の根本問題は講師であるが、全ての講師に困らない、十分に資格ある人材をみんな備へた地方はない。又、其費用も莫大なものを要するので之についての三つの提案を持つてゐる。

- 一、学校の全国的聯盟の完成の事
- 二、資格ある地方的講師養成の事
- 三、学校はハイカラを避け自治的であるべき事

というものであった。そして、瀧沢は、

長野に於ける私の教会に於て五ヶ年に、福音学校によつて五十名の会員を持つことが出来た。また、村には一つの日曜学校がなかつたが、今日は四つの学校を持ち、四百人の子供が日曜学校で勉強している。また、今度四千五百円の会堂を建てたが、そのうちの半分の費用は地方の人々の寄附でこしらへる事が出来たのである。附近には四つの託児所をこしらへて五月から十月までに二百二十人の幼児を育てゝゐる。このやうな結果を得る事が出来たのは皆福音学校によつて教育的伝道に進んだためである。私は長野の村々にキリストの精神を伝えるため、この福音学校に最大の使命を感じてゐる。

という所感を述べている。

つぎに、賀川が「農村社会事業」について発題し、

福音によりて農村を救はんとする時の態度は、善きサマリア人の如くであらねばならぬ。単なる宣伝本位の基督教では救はれぬ、具体的な血みどろのテーマを与へねばならぬ。福音即生活、生活即福音である。農村打開には色々の道があるが、真のキリストの十字架愛の確立なくしては、其の一つと雖も実行は難く、成功は覚束ないのである。

と述べている。さらに渋川国民高等学校を主宰する栗原陽太郎の「組合運動」についての発題は、

産業組合の重要性につき高調され、日本の農村経済のけつ陥として、(イ)金利のたかいこと、(ロ)労働日数の少ないこと、(ハ)生産費の取上らぬこと、(ニ)消費経済の不合理、なる四点につき説明し、同氏の関係される九箇の組合の実情をしめされ、各地に於ても速かにこれが実施されんことをすすめられた。

と要約されている。このあと、升崎外彦が「農村教化と副業問題」について発題し、

伝道者は福音を伝えることが使命ではあるが、農村の人々が真に人間らしい生活が出来る様にと祈る時、弘法大師や友禪和尚等が民衆のため途を開き、或は染物を教へし如く、片手にバイブル、片手にハンマーの生活こそイエスの姿であることを信ずる。象牙の塔を出て実際に百姓をやつて見ぬことには、彼らの靈にふれることは出来ない。農村窮乏を救ふ一つのみちは、農村の余剰労力（我国の農閑期は約三十日から百五十日位）を利用することである。実際農民が不善をなすのも、病気になるのも農閑期が最も多いのである。之等の弊を救ひ、働くことにより、心身を健康にし、農村自らを振興する淵源となるのである。

と主張する。

夜に入って、まず膳所湖南公民講座を創設した矢部喜好が「農村伝道の教育的方題」について行なつた発題は、

琵琶湖畔十六年間の伝道経験をきそとして、社会的解剖を基礎とする教育的伝道を高調する。客観的、個別的、長期の教育的伝道の必要なること、神学生の教育改良、農村托児所による進出を図ること、農村托児所は保姆の養成が先決問題であるが、之についても現在の保姆教育を大いに農村向きに改善する必要がある、と話された。

と要約されている。ついで静岡興農学園長平林広人が、「農民福音学校の実施について」という発題を行ない、

農民福音学校の目的を一言に云ふならば、農村文化の中核並に源泉としての活ける教会を実現せんとするにある。今日の農民の必要とするものは単なる物質ではいけない。福音を与へねばならぬ。与へる人の問題、時期の問題、対象とする生徒は十九歳から廿五歳を選べ。この時代の青年の教育は全く捨てられてゐるので、此処に宗教教育が必要とされる時がある。又、成人教育をなすのも農村教会の使命である。教養として聖書の研修をなし、我等が熱心に祈る時、彼等も祈る。色々多様なことを短期間に教へられぬが、唯一つ農民道を教ゆることが出来る。聖書的精神による農民道の確立から新農村文化の源泉としての教会が実現される。

ということを強調し、そして、杉山が、

講師が大切な問題である。農業上の卓越した先生であるばかりでなく、霊のため、日本のため本気になつてやる人を選ぶべきである。場所はせまい寺子屋式で結構、一切が教場でなければならぬ。食事時も、睡眠時も教場となる。膝とひざの相触るゝ所に又、魂と魂もふれる。生徒の数は余り多くない方がよい。

とみずから経験をふまえた補足的発言をしたところで第1日目を終えている。

第2日目（4月10日）

賀川が「農民福音学校と聖書」と題する講話を行なったが、その要旨は、

現今迄の基督教の誘惑は神学的になりすぎて、生活実現の宗教をわすれることである。農村青年にはむつかしい言葉や教義的キリスト教は耳に入らない。大体神学校のことばがむつかしすぎる。教義でなく、愛を与へよ。聖書を教へる時、明瞭な言葉で具体的に実現して示すのがよい。教へるにも座つて、落ち着いてやらねばならぬ。自動車でトラクトを散布する位みでは何にもならぬ。農村青年は新約聖書を早く読みたいとあせつてゐるから、一字一句についての永い説教よりも全体としての聖書を教へねばならぬ。講義所風に説かず、生活動機となる様にキリストを信じた村がこんなに變つたと言ふ様にゆきたい。十字架の生活をする様にバイブルを説く

こと、是が農民学校の根本精神である。

というものであった。

そのあと、最後の協議に入り、第一の問題は「農民福音学校の出席者と教会の関係」について、第二の問題は「各種団体と福音学校との聯格」について論議を行なったあと、平林が、

第一回農民福音学校指導者協議会は、全国の農民福音学校のため、その全国的統制をとり、講師の派遣、援助、新聞編輯、指導会合等をなす中央機関を一日も早く設置されたく、その斡旋を日本キリスト教聯盟社会部に依頼する。

という提案を行ない、満場一致で協議会の決議とし、第2回を秋に関西地方で開くことを確認して閉会している。

1931（昭和6）年10月5日、6日の2日間、京都市上京区同志社大学神学部講堂において第二回農民福音学校指導者協議会が開かれ、神の国運動農村伝道部主任真鍋頼一の開催趣旨の説明と同志社大学文学部長大塚節治の歓迎挨拶につづいて、アメリカ・バプテスト教会宣教師ウィリアム・アキスリングと海老沢亮を主論者として、「国際基督教聯盟と農村問題」と「我邦基督教と農村伝導問題」について協議を行なっている。そして、講演に移り、講師として日本農民福音学校校長の杉山が「農民福音学校の趣旨及目的に就て」を、金城女子専門学校教授の市村与市が「丁抹農村教育状態に就て」を論じている。さらに夜の部において渋川国民高等学校校長の栗原を講師として「農民福音学校の経営及財務問題」が協議される。

2日目（10月6日）は、杉山が「農村青年の指導に就て」を、市村が「丁抹農村の教育状態に就て(二)」を講演したあと、午後同志社大学神学部教授高森宗次が「新教時代の社会状態に就て」と題する講演を行なっている。そして、午後杉山を主論者として、「組合組織運用に就て」の協議がなされたあと、閉会している。

岩本 由輝プロフィール IWAMOTO, Yoshiteru

1937(昭和12)年生まれ。

東北大学経済学部卒業。

山形大学人文学部講師、助教授、教授を経て東北学院大学経済学部教授となる。

弁護士時代の鈴木義男(4)

—美濃部亮吉の弁護—

東北学院大学経済学部教授

仁昌寺 正一

1. 鈴木義男の「弁護士時代」へのこだわり

筆者は、これまでに「弁護士時代の鈴木義男」と題する短文を3つ作成している。ひとつは「弁護士時代の鈴木義男—宇野弘蔵の弁護—」（『東北学院資料室』Vol.6、2006年12月）、もうひとつは「弁護士時代の鈴木義男—河上肇の弁護—」（『東北学院資料室』Vol.7、2007年12月、後に『河上肇記念会



壮年期の鈴木義男

会報』No.91、2008年7月に転載)、そしてもうひとつは「弁護士時代の鈴木義男—平凡社『大百科事典』への執筆—」（『杉山元治郎・鈴木義男の事績を通してみる東北学院の建学の精神』、東北学院史研究会、2009年3月）である。今回は、4つ目として、「美濃部亮吉の弁護」について取り上げる。

まず、なぜ筆者が鈴木義男の「弁護士時代」に強くこだわっているかについて述べておきたい。それは、鈴木義男の弁護士活動に貫かれている思想の特徴、とくに、

人権尊重の立場に立ち、不当の迫害に対してその被害者を守るという意識から弁護を引受けた（『平和人物大事典』、日本図書センター、2006年6月、309頁）

といったことばで語られる思想の特徴を明らかにしたいためである。

この作業は、鈴木義男の思想が終戦直後に成立した日本国憲法にも反映されているといわれているだけに、大きな意味を持っているといえよう。このことを指摘するのは高橋彦博である。同氏は、

帝人事件、人民戦線事件等で刑事弁護人として耳目を引く活躍を示した鈴木義男の法曹活動を瞥見しただけでも強い印象として残るのは、そこに一貫する鈴木

の強烈な人権感覚である。……鈴木における、そのような人権感覚が、憲法議会における社会党を代表する活動として、政府案の条文の修正だけでなく、条項の追加をも迫る論議となり、公務員の不法行為、とくに抑留、拘禁に対する賠償要求を規定する新憲法第一七条、第四〇条を生み出したのであった。（高橋彦博著『日本国憲法体制の形成』、青木書店、1997年、56頁）

と述べている。つまり、日本国憲法の国・公共団体の賠償責任を規定した第17条（「何人も、公務員の不法行為により、損害を受けたときは、法律の定めるところにより、国又は公共団体に、その賠償を求むることができる」）、及び刑事補償を規定した第40条（「何人も、抑留又は拘禁された後、無罪の裁判を受けたときは、法律の定めるところにより、国にその補償を求むることができる」）の成立は、鈴木義男が弁護士時代に培ってきた「強烈な人権感覚」があってこそ可能だったというのである。また、いわゆる生存権規定の第25条（「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」）の成立にも、鈴木義男のそのような姿勢をみてとることができるであろう。いずれにせよ、日本国憲法に反映された鈴木義男の思想も、鈴木義男の弁護士時代の活動を一つ一つ考察することによってより明確になると考えられる。

2. 美濃部亮吉の弁護を引き受けるまでの経緯

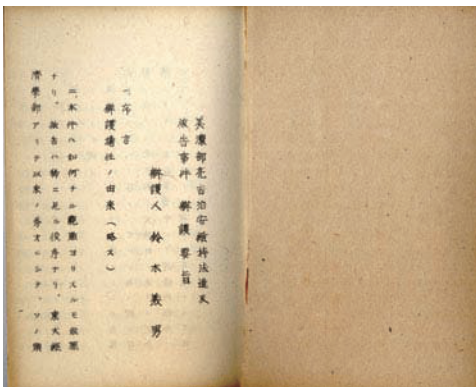
では、美濃部亮吉が鈴木義男の弁護を受けるに至った経緯について簡単にみてみよう。

1938（昭和13）年2月1日、治安維持法違反容疑で、大内兵衛（東京帝国大学教授）、有澤廣巳（東京帝国大学助教授）、脇村義太郎（同）、美濃部亮吉（法政大学教授）、阿部勇（同）、南謹二（同）、芦沢彪衛（巣鴨高等商学校教授）らが東京において検挙された。また同時に、宇野弘蔵（東北帝国大学助教授）らも仙台において検挙された。彼らが一括して「教授グループ」と呼ばれたことは周知のとおり



『東京朝日新聞』1938（昭和13）年2月2日

りである。鈴木は、他の弁護士とともに、彼らのうち大内、有澤、脇村、美濃部、宇野らの弁護を担当した。ここでは、これらの中から美濃部亮吉のケースを、『美濃部亮吉治安維持法違反事件弁護要旨 弁護人鈴木義男』という貴重な資料を基に



(上) 『美濃部亮吉治安維持法違反事件弁護要旨 弁護人鈴木義男』表紙

(下) 同書の書き出し部分（真田喜代治氏提供）

取り上げる。

鈴木義男が美濃部亮吉の弁護を引き受けるに至った経緯は鈴木義男と美濃部亮吉の父・美濃部達吉との関係から推察することができるであろう。

鈴木義男にとって美濃部達吉は、鈴木の東京帝国大

学の学生・助手時代の恩師の一人であった。二人の関係は鈴木が東京帝国大

学を離れた後も続いていた。例えば、鈴木は、1930年3月末、東北帝国大学教授の辞職に伴い新たな仕事を探すために上京した際、美濃部達吉の元を訪れている。そのことは、同年4月3日、鈴木が知人の佐々木惣一（京都帝国大学教授）に宛てた手紙の中で、

美濃部先生を始め各先生もかくて小生（鈴木義男……引用者）が二、三年隠忍いたしますならば都合によりては私立大学等に世話してもよろしく、小生の業績並教授会の空気の緩和と相俟って論文などの通過も見込あるであらうとの事でありまして忝けないことに存じて居ります。（鈴木義男が佐々木惣一へ宛てた手紙より、油井大三郎氏提供）

と綴っていることからわかる。ちなみに、文中の「各先生」とは吉野作造、牧野英一のことであり、いずれも鈴木の東京帝国大学の学生・助手時代の恩師であった。また、鈴木は、1940（昭和15）年に刊行された『美濃部博士還暦祝賀論文集』に「行政学方法論序説」を書いたり、同年の『帝大新聞』に美濃部達吉の著書（『日本行政法 下巻』）の書評を執筆（昭和15年）したりしている。

ところで、美濃部亮吉によれば、

父（美濃部達吉……引用者）も、弁護士の登録をすまし、私の弁護士として法廷で大いに政府の非を鳴らそうと張り切っていた。しかし、天皇機関説で大問題となった父が、息子のためとはいえ、公判廷において獅子吼するのは、却って逆効果になるのではないかと行って心配する人が多く、父もその忠告をいれて、弁護演説をすることは断念した（美濃部亮吉著『苦悶するデモクラシー』、1959年3月、169頁）。

という経緯があったという。いわゆる「天皇機関説事件」さえなければ、美濃部達吉自身が息子のために弁護を行おうとしていたというのである。

ちなみに、天皇機関説事件というのは、1935（昭和10）年9月、美濃部達吉の学説である天皇機関説——単純化していえば、天皇は国家の機関として国民の福利のために統治権を行使するが、そのためには国民の利益を直接的に代表する議会を尊重しなければならぬというもの——が問題視された結果、美濃部達吉が貴族院議員を辞職せざるをえなくなった事件である。美濃部亮吉によれば、そのようにまで大きな問題として取り上げたのは「天皇の名において独裁の権力をふりまわそうとするファシズム論者」であり、彼らは、天皇の統治は神聖にして侵さざるものであり、したがって議会を軽視しても構わないと主張していた（前掲『苦悶するデモクラシー』、61-96頁参照）。

このような経緯の後、美濃部達吉から依頼があったのか、あるいは鈴木自身が名乗り出たのかは定か

ではないが、やがて鈴木が美濃部亮吉の弁護を引き受けることになったのである。

3. 鈴木義男の弁護

では、実際にどのような弁護を行ったのであろうか。前掲の『美濃部亮吉治安維持法違反事件弁護要旨 弁護人鈴木義男』を基にしてたどってみることにしよう。

鈴木義男の弁護は、

本件は如何なる観点よりするも無罪なり。被告は稀に見る俊秀なり。東大経済学部ありて以来の秀才にして、その頭脳の明晰、その人格の高潔、父及祖父の名を辱めず。この人を葬るは国家の損失なり。弁護人等全力を挙げて被告を檢察権の弾劾に対して守り再び青天白日を仰がせしめんと欲す（『美濃部亮吉治安維持法違反事件弁護要旨 弁護人鈴木義男』、1-2頁）。

ということばで始まっている。ここには、万難を排して無罪を勝ちとってやるという決意の程がみてとれよう。

さて、美濃部亮吉の容疑は治安維持法違反であった。よく知られているように、この治安維持法（1925〔大正14〕年成立、1928〔昭和3〕年改正）は、私有財産制度を否認する結社への直接的な活動参加者はむろんのこと、資金カンパをはじめとするさまざまな支援者に対しても厳罰を課すものであった。美濃部亮吉の場合には、「労農派」という結社の活動やそれに対する金銭的支援を行ったことが、同法第一条第一項後段第二項（「情を知りて結社に加入したる者又は結社の目的遂行の為にする行為を為したる者は、二年以上の有期の懲役又は禁錮に処す」）に該当するとされていた。

ちなみに、労農派とは、檢察の立場からみれば、日本共産党の指導理論に対立して「山川イズム」を基調とする労農理論を展開し、これに基づいて無産政党、労働組合、農民組合等の無産階級運動を指導するとともに、共同戦線党方策によって政治、組合の両戦線を統一強化して階級的勢力を拡充することを当面の任務とし、究極においてこの階級的勢力を基礎として国体の変革、並びに私有財産制度の撤廃を随伴すべき「ブルジョアジー」打倒を目標とする「プロレタリアート」の独裁政権を樹立し、これを通して階級目標たる社会主義者会の実現を企画する結社であるとされていた（『美濃部亮吉治安維持法違反事件弁護要旨 弁護人鈴木義男』、3-4頁）。

美濃部亮吉に対する容疑の詳細（公訴事実）は次のようなものであった（『美濃部亮吉治安維持法違反事件弁護要旨 弁護人鈴木義男』、2-10頁）。

- ①美濃部被告は、東京帝国大学助手であった1927（昭和2）年から1929（昭和4）年の時期に、大森義太郎、向坂逸郎、有澤廣巳、阿部勇、高橋正雄らに感化されてマルクス主義に共鳴し、労農派グループの活動に参加するようになった。この労農派が1936（昭和11）年春頃まで存続していることを知りながら、読書会や共同研究などさまざまな活動を行い、芹沢彪衛、南謹二、大内兵衛らを次々にこの派に引き入れていった。
 - ②1930（昭和5）年12月頃より、阿部事務所において、教授グループの一員として世界の政治経済情勢を、マルクス主義ないしマルクス経済学の立場から分析批判し、共同論文を執筆した。
 - ③1931（昭和6）年7月頃から10月頃まで、有澤、脇村、阿部、南、芹沢らとマルクス主義ないしマルクス経済学の立場から共同研究し、その成果を著書・論文として発表し、大衆を左翼的に啓蒙した。
 - ④1931年5月頃から1936（昭和11）年3月頃まで、大森義太郎が担当していた『改造』の世界情報欄の執筆を、マルクス主義ないしマルクス経済学の立場から行い、労農派の活動に寄与した。
 - ⑤大森義太郎から労農派の機関誌『労農』への執筆依頼を受け、1931年7月ないし1932（昭和7）年1月号に無産階級運動、またはマルクス主義に関する記事を掲載した。
 - ⑥1931年6月頃から1932年1月頃まで5回にわたり、大森義太郎を通じて、原稿料を労農派の活動資金として提供した。
 - ⑦『改造』1935（昭和10）年1月号及び1936年1月号の付録年鑑がマルクス主義ないしマルクス経済学の立場から編集されたものであり、労農派の活動に寄与するものであることを認識しながら執筆した。
 - ⑧1935年1月より1938（昭和13）年12月まで8回にわたって、マルクス主義の立場から『日本経済四季年報』の景気分析箇所の執筆を行った。
- 以上のような美濃部亮吉に対する容疑に対して、鈴木はことごとく反駁を加えている。字数の都合上、それらをすべて紹介することはできないが、要するに、労農派が治安維持法の対象となるような共産党

の如き結社ではないこと、美濃部亮吉が特定の主義や思想に立脚せず実証分析を行っていたこと、労農派の理論的指導者とみなされていた大森義太郎とは幼なじみにすぎないことなどが主張されている。

この鈴木弁護士の弁護は、教授グループの公訴事実に関する検討の成果を採り入れたものであった。美濃部亮吉によれば、1938年2月に検挙されてから1年半後の1939（昭和14）年8月に保釈されたが。保釈後は「大内先生を中心として、公判における答弁の仕方を準備するために、毎日のように集まり、各人の警察、検事、予審における調書を検討した」。そして「われわれの主任弁護人であった鈴木義男、奥山八郎両氏にも色々と相談し、われわれの研究の結果を文書に書いて提出したりした」という（前掲『苦悶するデモクラシー』、167頁）。

そして、上の如き主張を行った後、鈴木は、

以上、如何なる観点より見るも被告を有罪に断ずべき根拠、一も之あることなし。速かに無罪の御判決を賜るべきものなり（『美濃部亮吉治安維持法違反事件弁護要旨 弁護人鈴木義男』、27頁）

と締めくくっている。

4. 「教授グループ」内での「美談」

ところで、実は、鈴木弁護士の弁護要旨をみてとても興味深い記述がみられた。教授グループの面々が、この事件に関する予審や公判の中で、彼らの同僚、友人、弟子の関係にある者に対し、「無知・無能だ」と言わんばかりのことばを浴びせているのである。とくに、マルクス主義や労農派のことに関する事について、それが顕著にみられる。

例えば、大内兵衛は、予審供述において、次のように述べたという。

美濃部は助手の時は私の教へることを最も忠実に行った模範学生でした。即ち一方に於ては正統派の貨幣論を非常によく勉強し、他方に於ては当時流行であったマルクス主義の書物、即ちヒルファディングの『金融資本論』を実に熱心に勉強したのであります。しかしこの両者からマルクス主義を引出すことは勿論何人にも不可能ですが、殊に美濃部の様な総合力の無い頭には全く不可能ですから、要するに何が何だかわからず助手をやめたと思います。而して左様な状態は今日も続いていると思います。（『美濃部亮吉治安維持法違反事件弁護要旨 弁護人鈴木義男』、12-13頁）

これでは、美濃部はマルクス主義に関してまったく無能だということになり、鈴木が言うように「東大の経済学部始まって以来の秀才で、頭脳明晰な人間である」と述べた部分とどこか矛盾するように読みとれないだろうか。

また、同じように美濃部の先輩である有澤廣巳も、公判の供述で、

美濃部君はマルクス経済学の勉強もした事があるやうに伝聞した事があるが、自分の見る所ではどうも体系的に研究したとは思へない。個々の部分で部分的にマルクス経済学の立場を正しいとしたことはあるかも知れないが、決して全面的ではない。歴史観、国家観については殆んどマルクス主義の理論を知らない。知って居るものは極く断片的な智識であって、それは少し議論すると忽ち矛盾したことを云ひ出すので解った。労農理論に付ては、大内、脇村、阿部等と共に美濃部は何も知らなかったと云って宜しいのである。（『美濃部亮吉治安維持法違反事件弁護要旨 弁護人鈴木義男』、14-15頁）

と述べている。ここでも美濃部は、マルクス主義にも労農理論にも無知な人間として扱われている。さらには美濃部だけにとどまらず、有澤にとって恩師にあたる大内兵衛、同僚で友人の脇村義太郎、友人の阿部勇に対してまでも労農理論について無知であるかのような発言がなされている。

なぜこのような発言がなされたのであろうか。美濃部亮吉がマルクス主義や労農理論について何も知らずに、当時ラディカルな雑誌であった『労農』や『改造』などにたびたび執筆していたなどは到底考えられない。とすれば結論はただひとつ、恩師、同僚、友人に重い罪が及ばないようとの配慮からである。「獄中の美談」といってよいであろう。

5. 判決とその後

1942（昭和17）年9月18日、第一審の判決が下った。有澤廣巳、阿部勇は有罪（懲役2年、執行猶予3年）になったが、美濃部亮吉を含めた他の人々は無罪となった。しかしその後に行われた第二審では、この有澤・阿部も無罪になった。

その後、鈴木と美濃部亮吉との間でどのようなやり取りがなされたのかについては史資料がなく詳細については不明であるが、のちに美濃部が、

戦後、われわれの事件の弁護団の中心であった鈴木義男さん（戦後、社会党から代議士に出馬、片山、

芦田内閣の法務総裁、専修大学学長、故人)が、社会党内閣で司法大臣(法務総裁)になられたときに教授グループの公判の裁判官や弁護士をわれわれが招待して会食しようとしたら喜んで出席してくれた。(安藤良雄編著『昭和経済史への証言(中)』、毎日新聞社、1966年1月。176ページ)

と記している。その後も顔を合わせていたようである。

なお、美濃部亮吉は、その後1967(昭和42)年、社会共産両党の支持で東京都知事選に立候補し当選、1979(昭和54)年まで3期12年間、東京都知事を務めた。

6. おわりに

鈴木義男の戦前・戦時期の弁護士時代の活動の範囲は極めて広い。それゆえ、鈴木氏の弁護士時代の活動の全体像を把握するには、まだ多くの事例を検討する必要があるだろう。

今後の作業としては、①宇野弘蔵、美濃部亮吉の弁護に続くものとして、有澤廣巳らの「学者グループ」の治安維持法違反事件被告の弁護、②帝人事件被告の弁護、③志賀暁子墮胎事件被告の弁護などの全容を明らかにする必要がある。この作業は、鈴木氏の「強烈な人権感覚」とも表現されている思想の内容をより一層明確にするうえで避けて通れないだろう。

<参考文献>

- ・『美濃部亮吉治安維持法違反事件弁護要旨 弁護士鈴木義男』、出版年月不明。
- ・美濃部亮吉著『苦悶するデモクラシー』、文芸春秋社、1959年3月。
- ・安藤良雄編『昭和経済史への証言(中)』、毎日新聞社、1966年1月。
- ・東京大学経済学部編『東京大学経済学部五十年史』、東京大学出版会、1976年4月。
- ・ローラ・ハイン著、大島かおり訳『理性ある人びと 力ある言葉——大内兵衛グループの思想と行動——』、岩波書店、2007年7月。
- ・高橋彦博著『日本国憲法体制の形成』、青木書店、1997年。

鈴木義男略年譜

1894(明治27)年 0歳	1月17日に、福島県白河町(現白河市)大字田町77番地で生まれる。父・義一、母・イエの6番目の子供で、三男であった(※長男は日露戦争で戦死、次男は1歳で死亡)。
1907(明治40)年 13歳	3月に白河町尋常小学校を卒業し、4月に東北学院普通科(中学)に入學。
1912(明治45)年 18歳	3月に東北学院普通科を卒業し、7月に第二高等学校(一部甲類)入學。
1915(大正4)年 21歳	7月に第二高等学校を卒業し、9月に東京帝国大学法科大学法律学科(英法兼修)入學。
1918(大正7)年 24歳	5月20日、鉄本常磐(宮城県玉造郡一栗村鉄本文吉三女)と結婚。
1919(大正8)年 25歳	3月24日、長女絢子生まれる。7月に東京帝国大学を卒業し、9月に東京帝国大学法学部助手に採用される(※助手は、1921[大正10]年7月29日まで)。
1920(大正9)年 26歳	9月1日、次女ゆり子生まれる。
1921(大正10)年 27歳	7月30日より文部省在外研究員として独・仏・伊・英に留学。8ヶ月私費延長して1924(大正13)年3月3日に帰朝。
1924(大正13)年 30歳	3月28日に東北帝国大学法文学部教授に任ぜられる。4月に行政法学講座担当、5月に特別講義法学概論兼担となる。
1930(昭和5)年 36歳	4月1日に辞職願を提出し、5月14日に認められる。この直後に東京地方裁判所に弁護士登録。弁護士事務所は九段一口坂。
1932(昭和7)年 38歳	4月1日から、弁護士と法政大学非常勤講師を兼務、当大学では行政法・英法を講義。
1934(昭和9)年 40歳	4月1日から、弁護士と法政大学教授を兼務、当大学では行政法・英法を講義。
1940(昭和15)年 46歳	3月に法政大学教授を辞す。
1945(昭和20)年 51歳	11月に日本社会党に入党。中央執行委員となる。
1946(昭和21)年 52歳	4月の総選挙で衆議院議員に福島二区から立候補し当選(1回目)。
1947(昭和22)年 53歳	4月の第23回総選挙で衆議院議員に当選(2回目)。6月に片山哲内閣の司法大臣に就任。また、7月には東北学院第6代理事長に就任。
1948(昭和23)年 54歳	3月10日に芦田均内閣の法務総裁(国務大臣)に就任。(※司法大臣は、1948(昭和23)年2月15日、「法務庁設置に伴う法令に関する法律」[昭和22年法律195号]により消滅)。10月15日に国務大臣を退官。
1949(昭和24)年 55歳	1月の第24回総選挙で衆議院議員に当選(3回目)。
1951(昭和26)年 57歳	3月に専修大学教授となる(※後に専修大学学長、専修大学理事長に就任)。
1952(昭和27)年 58歳	10月の第25回総選挙で衆議院議員に当選(4回目)。
1953(昭和28)年 59歳	4月の第26回総選挙で衆議院議員に当選(5回目)。
1954(昭和29)年 60歳	1月に同志社大学より法学博士の学位を授与される。
1955(昭和30)年 61歳	2月の第27回総選挙で衆議院議員に当選(6回目)。
1958(昭和33)年 64歳	4月の第28回総選挙で落選。
1959(昭和34)年 65歳	4月より青山学院大学教授となる(行政法学を講義)。
1960(昭和35)年 66歳	1月に民主社会党の結党に参加。10月の第29回総選挙で衆議院議員に当選(7回目)。
1962(昭和37)年 68歳	11月に青山学院大学構内にて講義を終えた後倒れ、慶応病院入院。
1963(昭和38)年 69歳	8月25日午前11時29分、聖路加病院にて死去。8月31日に青山学院大学礼拝堂において葬儀。9月14日、東北学院大学ラーハウザー記念礼拝堂で追悼式。
1964(昭和39)年	5月15日、鈴木義男の蔵書560点余りが、遺族より東北学院に寄贈される。12月24日、鈴木義男伝記刊行会が『鈴木義男』を刊行。

仁昌寺 正一プロフィール NISHOJI, Shoichi

1950(昭和25)年生まれ。
東北学院大学大学院経済学研究科博士後期課程満期退学。
東北学院大学経済学部助手、講師、助教授を経て現職。

「高山樗牛冥想の松」 記念碑建立と萱場資郎

東北学院大学名誉教授
鶴本 勝夫



高山樗牛

高山樗牛と萱場資郎【萱場は昭和18（1943）年1月1日、45才のとき「萱場四郎」から「萱場資郎」に改名。本誌では「萱場資郎」で記述。】が、どこでどう関わりあったのか、時系列的には謎が多いと思われるが、



東北薬科大学構内の小高い丘に聳える冥想の松



「高山樗牛冥想の松」記念碑

二人の間には土井晩翠がおり、高山樗牛の日本主義提唱や日蓮崇拜も、萱場資郎の思想や宗教観に少なからず影響を与えていたのではと考えられる。萱場資郎は大正5（1916）年3月、東北学院中学部を卒業し、明治大学、早稲田大学理工科（中退）をへて萱場発明研究所を創

立、今日のカヤバ工業㈱に発展させた人物である。萱場資郎は東北学院在学中より創意工夫に



萱場資郎（四郎）

研究に没頭していた。㈱萱場製作所仙台工場では、萱場式ジャイロスコープの製造を行っていた。萱場資郎は軍需産業に関係していたことから、当時の軍関係者からは特段の信頼があり、太平洋戦争時に「東北学院は不要不急の教育機関」として廃校を余儀なくされた折、軍関係者を説得してこれを回避させた恩人でもある。萱場資郎はD. B. シュネーダー院長の薫陶を心深く受け止めていた一人であった。

1. 宮城県による企業誘致運動

昭和14（1939）年、宮城県は時局産業に対する貢献度が、3府43県中42位であったため菊山嘉男知事や澁谷徳三郎仙台市長をはじめ、大石倫治代議士などは県議や市議をつれ、萱場製作所に対して地元誘致を熱心に働きかけた。“情けに弱い”萱場資郎ではあったが、それでも宮城県は産業不毛の地であり、東京より工場移転することは、採算性に疑問があり断り続けていた。しかし、宮城県は企業誘致のために秘策をねった。昭和14年2月7日、萱場資郎に対して「宮城県工業化委員」の辞令を手渡し、宮城県の産業育成並びに誘致に力を貸すよう依頼したのだった。東京本社工場は受注に答えきれず、手狭になってきたことも背景にはあったが、不利な条件を重々承知の上で、仙台工場設置のために下調べを始めさせた。青木常務を仙台に派遣したのである。

昭和14（1939）年12月11日、㈱萱場製作所役員会は宮城県、仙台市並びに陸軍兵器行政本部による全面的な支援が確約されたため、仙台工場設置とその技術員養成所の開校を決定した。

昭和15（1940）年2月9日、仙台市出身の山梨勝之進海軍大将の推薦を受けて、伊達興宗伯爵は㈱萱場製作所の顧問に就任している。

2. 萱場製作所仙台技術員養成所の開所式

昭和15（1940）年4月3日、宮城県と仙台市商工課の協力を得て、仙台市小田原清水沼の日本紙管会社の建物200坪と隣地500坪を買収して、養成所とその寄宿舎を整備、開所式を行った。宮城県と仙台市の有力者100名を招待、第1期生は130名。初代所長は酒井熊治、指導員は宮城県および仙台市の工業教員に委嘱した。

昭和15年8月8日、東北興業（後の東北開発会社）は、東北兵器工業(株)或いは萱場兵器工業(株)の創設出資金として、1000万円の申し入れを行うが、萱場製作所仙台工場の建設拡充費にあてることで合意、仙台工場進出はより確実となった。

3. 社歌を土井晩翠に依頼

萱場資郎は昭和15（1940）年1月、宮城県からの企業誘致に対する回答として、仙台に設置することを伝えた。この後、萱場製作所の社歌を土井晩翠に依頼することにした。土井晩翠は宮城県をはじめ全国に及ぶ校歌の作詞を手掛けている。特に「荒城の月」は滝廉太郎の曲にのり、不朽の名作となった。



土井晩翠

昭和15年2月11日、土井晩翠は萱場製作所の本社を訪問、創業の主旨や希望を萱場資郎から直接聞いている。その日、晩翠は本社4階のバルコニーから東京湾を眺め、構想をねって帰られたという。昭和15年3月、東京の学士会館で完成した社歌（作詞）が手渡された。

萱場製作所社歌

作詞 土井晩翠
作曲 杉浦隆治

1. 宇宙は育み大地は載する
自然の恩寵各々享けて
皇国日本の民たる我等
一団結べる工場萱場
2. 製品靈化を理想と仰ぎ
心に五条の社憲を銘じ
技術を琢きて報国努め
睦みて数千の同胞奮ふ
3. 芝浦湾頭凜々しく立てる
社上に輝く外三巴
何らの表示ぞ平和と愛と
独創活気と団結一致

4. 犠牲の精神総てを燃やす
萱場の名を負う工場ここに
日夜に念ずる究意の願
日本の栄と世界の平和

（この社歌は太平洋戦争終結時まで歌い続けられた。）

4. 土井晩翠より「冥想の松」の保存嘆願

前述の通り、土井晩翠が萱場製作所本社を訪ねたとき萱場資郎は「近く仙台市の台の原に、工場建設の予定です。その丘に1本の老松が亭々と聳えています。軍需工場の目印にされる恐れがありますので、重役会議ではその老松を伐採することで衆議一致しました。」と伝えると、土井晩翠は動転して言葉を失ったと云われる。すかさず晩翠は「この松は“高山樗牛冥想の松”とって仙台市民憧憬の松であり、伐採せずに保存してもらいたい。」と申し出たという。後日、萱場資郎は自ら現場を訪ね、改めてこれは仙台市民の文化遺産であることを確認した。萱場は重役らを説得、むしばんでいる松に手を加え、この老松のそばに自費で「記念碑」を建てることにし、台の原への工場進出を白紙に戻した。

昭和15年3月11日、社歌（作詞）完成を承けて、萱場資郎は土井晩翠と笹川臨風を新橋の「小松」に招待し、労をねぎらった。ここで晩翠は高山樗牛に対する畏敬の念をもって『いくたびか ここに真昼の夢みたる 高山樗牛冥想の松』の碑文を書いた。正に「高山樗牛冥想の松」歌碑誕生の瞬間である。

5. その後の萱場製作所仙台工場進出の経緯

昭和16（1941）年1月15日、仙台市小田原清水沼にある工場の隣地500坪に400坪の機械工場を建設したことを祝い、仙台工場開所式を行った。開所にあたり、所要機械、工具、検定器具及び職能別組織表などについて大阪陸軍造幣廠が支援、セH37ミリ砲の生産が開始された。

昭和16年8月、林信夫宮城県知事より仙台市長町八本松にある旧倉敷紡績(株)仙台工場の譲渡を勧められ、正式に申し込んだ。

【昭和16年12月9日、太平洋戦争に突入】

昭和17（1942）年2月14日、片桐海軍本部長の裁断により総額220万円で旧倉敷紡績(株)仙台工場の譲渡契約を行った。敷地面積約3万坪、建物1.2万坪、付属施設有姿のまま、一切の譲渡契約を終結。小田原工場の移転と新設備の拡充100万円の予算で移転開始。昭和17年12月21日、仙台市長町八本松

へ移転完了。昭和20（1945）年6月の仙台工場の陣容は、従業員数2363名。ほかに東北学院航空工業専門学校生（勤労働員学生）200名を受け入れている。当時、萱場製作所仙台工場は、全国で唯一萱場式ジャイロスコープの生産拠点となっていた。

6. 「高山樗牛冥想の松」記念碑に4人の名

記念碑は広瀬川上流から運ばれた自然石で、その表には、高山樗牛、土井晩翠、笹川臨風（碑面の書を担当）、裏には萱場四郎と4人の名が刻まれている。以下に樗牛と各人の関わりについて略述する。

高山樗牛：明治4（1871）年1月10日生れ。山形県鶴岡市高畑町出身。斎藤親信・芳子の次男。斎藤親信は高山家の次男。樗牛は生れると間もなく伯父高山久平の養子となる。本名は高山林次郎。斎藤、高山ともに荘内酒井家の家臣。明治20（1887）年12月、私立東京英語学校から、第二高等中学校（旧制二高）に仮入学。当初、仙台市六軒町3番地の第二高等中学校宿舎で生活。明治20年（17才）から同26年（23才）まで6年間、仙台で学生生活を送る。明治25（1892）年4月、永見裕宅に下宿。ここで「冥想の松」に関わる永見みち子と出会う。明治26（1893）年7月、旧制二高卒業後、同年4月東京帝国大学文科大学哲学科に入学。同年29（1896）年7月、大学卒業後、旧制二高教授として母校で教鞭をとる。在職1年半。仙台市清水小路の料亭「陸奥園」の離れ座敷に下宿していた。

明治30（1897）年5月、樗牛27才のとき日本主義を唱える。同年12月、杉里子（法学博士杉亨二の娘）と結婚。明治34（1901）年10月、田中智学に師事、日蓮研究に入る。日露戦争の2年前にあたる明治35（1902）年12月24日逝去。享年32才。静岡県清水市龍華寺（日蓮宗）に眠る。

土井晩翠：明治4（1871）年10月23日生れ。仙台市木町通出身。土井林七・あいの長男。本名は土井林吉。明治20（1887）年、17才のとき許されて斎藤秀三郎が開く仙台英語塾に通学。この年第二高等中学校が開学。明治21（1888）年、東華学校補充科2年から第二高等中学校（旧制二高）に入学。1年上級に高山樗牛在籍。明治27（1894）年7月、旧制二高卒業後、東京帝国大学文科大学英文学科に入学。

明治32（1899）年4月、処女詩集「天地有情」を高山樗牛の助力を得て博文館より出版。この年、東大の友人林並樹の妹八枝と結婚。明治33（1900）年1月、母校旧制二高の教授となる。明治34（1901）年3月「中学唱歌」の中に「荒城の月」の作詞が掲

載され滝廉太郎の作曲とともに広く全国に知れ渡った。

しかし、昭和23（1948）年5月10日、八枝婦人病没、娘信の長男亨を除き家族全員を失い天涯孤独となる。昭和24（1949）年5月、79才のとき本多光太郎、志賀潔博士とともに仙台市名誉市民（第1号）に推挙される。昭和25（1950）年11月3日、文化勲章を受賞。昭和27（1952）年10月19日逝去。享年82才。仙台市若林区新寺四丁目、大林寺（曹洞宗）に眠る。

笹川臨風：明治3（1870）年8月7日生れ。東京神田末広町出身。笹川義潔・ていの次男。本名は笹川種郎。父のあとを継いで土木学を身につけるため、工部大学校への入学を考えるが、工部大学校は予備門と合併したため入学募集を停止。従って土木志願を取り下げ、東京英語学校へ通学。明



笹川臨風

治26（1893）年7月、第三高等中学卒業後、東京帝国大学文科大学国史科に入学。東京本郷六丁目の大学寄宿舎では、高山樗牛、姉崎嘲風と同宿となる。明治29（1896）年7月卒業。この年、妻とよと結婚。後に明治大学教授に就任。昭和24（1949）年4月13日逝去。享年80才。東京都豊島区駒込五丁目、都営染井霊園に眠る。

【萱場四郎（資郎）については「東北学院資料室」Vol.7（2007）参照のこと。】

7. 高山樗牛と永見みち子について

明治20（1887）年、高山樗牛が仙台にきた当時は、第二高等中学校の宿舎で生活していた。樗牛は幼少の頃より負けず嫌いで、運動方面でも人一倍優れたものをもっていたと云われる。腕相撲や相撲そのものにも力の限り出し尽くし、他を圧倒していたという。また、旧制二高では進級するに伴い、肩で



永見みち子

風切る威風堂々の学生スタイルであったと云われる。野球にはことのほか興味を示し、宿舎ではキャッチボールを欠かさずやっていた。選ばれて選手となり、キャッチャーが樗牛のポジションであった。

この頃、東北学院の創立

者の一人押川方義の子息方存（春浪）やその弟清らも野球に興じていた。やや粗暴で手を焼かせた青年期の方存は、東北学院に強制編入させられたが、東北学院に野球クラブを結成させる芽を育てたようである。また清の場合は、東北学院と他校との試合で正選手となり、セカンドを守っていた。後に早稲田大学でも活躍した。押川清は早慶戦の提唱や職業野球（プロ野球）創草期には「後楽園イーグルス」を立ち上げるなど、野球界の功労者となっている。

【現在、後楽園野球博物館には押川清を顕彰するブロンズが掲額されている。】

さて、高山樗牛は旧制二高時代、下宿先を転々とかえている。結果として宮城学院にほど近い永見裕宅の離れで生活することになった。

永見裕（ながみゆたか）は、山形県職員であったが松平正直宮城県知事と同じ福井藩の出身であることの縁で、宮城県の学務課に勤務していた。同人には「みち子」という娘がおり、その才媛ぶりに樗牛は次第にひかれていった。永見宅の離れには、当時旧制二高生であった島貫彦次郎（後に宮城県刈田郡斎川村長を務める）や藤井健次郎も同宿していた。

永見みち子は宮城女学校に学び、相馬黒光の1年後輩であった。みち子は美しくもあり、文章書きにもたけ、樗牛にとってはその立ち振る舞いも魅力の1つになっていた。かくて樗牛は「激しい恋情に悩まされていった。自分の胸は火と燃えたが、所詮かなわぬ恋だった。」と述懐している。

同宿の島貫彦次郎によれば「みち子さんは樗牛に対してのみ食事を運び、分からないことがあれば樗牛に教えられ、かくも相思相愛の様であったことは疑う余地もない。」と明かしている。とにかく樗牛を引きつけて離さない才媛であったとは、どれ程魅力ある女性であったのか……。

しかし、永見ちか子は宮城女学校4年の在学中に父の勧めに逆らうことなく、長崎に住む日本画家、岡不崩のもとへ嫁いでいった。

【岡不崩は明治2（1869）年7月、福井県大野町で出生。名は古寿（よしひさ）。初号蒼石、別号楽口園、南山亭、梅溪。明治13（1880）年上京。帝国絵画協会会員。同士と共に真美会を創立。明治16（1883）年狩野友信の門下生になる。狩野芳崖に師事し、北宗派を究め、特に山水、花図を能くす



岡 不崩

る。東京美術学校に入学（第1回生）。翌年抜推されて高等師範学校講師となる。明治18（1885）年11月、文部省学務一局より図画取調掛の設置を求める伺いが提出される。明治19（1886）年3月、図画取調掛彫刻場完成。狩野芳崖の弟子の四天王（岡不崩、岡倉秋水、高屋肖哲、本多天城）も参加。全国連合展覧会審査員、大東絵画協会評議員理事などの役歴がある。岡不崩の代表的著書に「万葉集草木考」や「あさかほ手引草（上下2巻）」、「朝顔図説と培養法」、「しのぶ草」などがある。昭和15（1940）逝去。享年72才。現在福井県立美術館に「菊花図」がある。菊を多彩な色使いで描いている。当時の日本画としては珍しい洋画の写実性を備えている。】

永見みち子のいない仙台で、高山樗牛はやり場のない、むなしい日々を送ることになった。仙台の街なかを抜け出して、東照宮にほど近い台の原に出向いた。元天神の小高い丘から仙台を一望することができ、東に太平洋をのぞみ、南には仙台市街地、そして西に青葉山、北には泉ヶ岳やセツ森が見える。風光明眉なこの地に立ち、恋にやんだ樗牛は種々冥想にふけるが、果たしてその思いは癒されたのであろうか……。

岡みち子となった彼女のもとに、樗牛から何通かの便りが寄せられている。岡不崩の好意により、その一端が明かされているが、簡単には諦められない心情が、文面一杯につづられている。また、樗牛の恋情を裏付けるものとして、晩翠が「雨の降る日は天気が悪い」の中で明かしている。樗牛が帝国大学在学中に執筆した「瀧口入道」や「わが袖の記」、「清見寺の鐘声」、「思い出の記」などに登場するヒロインの年令が、実は永見みち子と同令であると指摘している。

樗牛は死の間際に、みち子宛の便りの中で「何物も真ならず、凡ての物皆許さる」としたためたが、みち子は「はかなくてこそ恋は永遠に美しく申候」と書翰にしるし、兩人の間には“大人の恋”が燃焼し続けていたものと想像する。

永見みち子は岡不崩と結婚後、6人の子供をもうけたが5人を失い、1人の子供を残して、大正3（1914）年10月、樗牛と同じ病名のもと赤十字病院で逝去している。

8. 「高山樗牛冥想の松」記念碑除幕式

太平洋の波荒く、風雲急を告げる昭和16（1941）年6月1日午前10時から、台の原元天神の小高い丘で200余名の来賓を迎え、厳粛の中にも晴れがまし



記念碑除幕式（建立の辞を読む萱場資郎）

く、萱場資郎祭主のもと「高山樗牛冥想の松」記念碑の除幕式が行われた。祭主の萱場資郎は、国民服に身をつつみ、仙台に繋がる文化人顕彰の事業に満面の笑みをたたえていた。萱場資郎にとって、ふるさと仙台に恩返しのできた満足のいく1日であった。

除幕式の式次第は以下の通り。

開 式

宮城遥拝

国歌奉唱

修 祓

先 斎主進ミ幕紐ヲ取り除幕員ニ授ク

次 除幕員紐ヲ曳キ幕ヲ除ク（此間奉楽）

次 斎主降神ノ儀（声抃）

次 奉幣行事

次 献 饌（奉楽）

次 斎主祝辞（一同声抃）

次 建立ノ辞

次 工事経過報告

次 祝電祝辞

次 斎主玉串奉奠、祭員列拝

次 建立者玉串奉奠 家族一同

次 委員長玉串奉奠 委員一同代表

次 来賓参列者玉串奉奠

次 工事請負者玉串奉奠

次 撒 饌（奉楽）

次 斎主昇神ノ儀

次 神籬ヲ撒ス

次 委員長挨拶

次 退 場

除幕式では萱場資郎の縁戚にあたる島貫睦子（5才）が愛らしい和服姿で幕をひき「ここに真昼の夢みたる……」の碑面が披露された。

【昭和16（1941）年6月2日付の河北新報には、

除幕式の記事が掲載されている。】

除幕式の主な参列者は、笹川臨風、土井晩翠、内ヶ崎作三郎のほか、祝辞を述べた澁谷徳三郎仙台市長、熊谷岱蔵東北帝国大学総長（代理：広浜嘉雄教授）、阿刀田令造仙台第二高等学校長（代理：萩庭教授）、一力次郎河北新報社長ら多数参列している。

萱場資郎は祭主として「建立ノ辞」を次のように述べている。

「樗牛先生第二高等学校在学ノ頃、又其ノ教授トシテ在仙ノ節、好シデ台ノ原ニ杖引キ此松ノ根方ニヨッテ静ニ思索セリ。明治文壇ノ覇者トシテ又日本主義ノ先驅トシテ我国文化ニ寄与セラレ、又カノ“吾人ハ須ラク現代ヲ超越セザルベカラズ”ト叫ビテ青年ヲ奮起セシメラレタルモ、恐ラク此松ノ下ナラム。其ノ後何時トナク此松ハ“高山樗牛冥想ノ松”ト称セラレ学都仙台市民憧憬ノ聖地トナレリ。先生逝イテ四十年、此处ニ記念碑ヲ建テ、文豪由緒ノ地域ヲ永久ニ保存スルハ意義浅カラザルヲ思フモノナリ。」そして、最後にこう付け加えている。「望ムラクハコノ松ノ下ヨリ凡有部門ニ於ケル第二ノ樗牛ガ輩出シ建碑ノ意義空シカラザランコトヲ切望シテヤマザル次第ナリ。」

当日午後2時から仙台市公会堂において、冥想の松保存会と仙台市との共同主催による「樗牛を偲ぶ文芸大講演会」が開催された。河北新報社が後援している。聴衆1300名。

文芸大講演会の次第は以下の通り。



澁谷徳三郎

一、開 会

二、宮城遥拝

三、黙 禱

四、国歌奉唱

五、挨 拶

澁谷徳三郎仙台市長

六、講 演

「天才の崇拜」第二高等学校名誉教授

土 井 晩 翠

「明治文壇の回顧」文学博士

笹 川 臨 風

「天才樗牛の種々相」元文部政務次官

内ヶ崎 作三郎

七、挨 拶

萱場四郎冥想の松保存会長

八、閉 会

以下に講演内容の一節を紹介する。

「天才の崇拜」：土 井 晚 翠

「樗牛博士の難しい論文、あれは一時天下を風靡したものです。(中略)天才とは何ぞや、天才とは自分の才、要するに我々凡人が如何に勉強しても、努力しても到底及ぶことの出来ない仕事をする人を天才という。なぜ天才を崇拜するかと云えば、それは所謂、理想に憧れる人間の自然の情であります。」

「明治文壇の回顧」：笹 川 臨 風

「いずれこの仙台で、荒城の月の碑が建つ時が遠くないと思います。冥想の松と相対して島崎藤村の詞碑もあるそうですが、誠に仙台を飾るものだと我々は思う。明治から大正、昭和にかけての文壇のために喜ぶ次第であります。」

「天才樗牛の種々相」：内ヶ崎 作三郎

「樗牛がもし病気になるなかつたならば、日蓮の研究をあれ丈真剣にやらなかつたのでは。最初は日蓮上人の文章に魅力を感じた。田中智学との出会い、指導が大きい。日蓮上人は大宗家であり、大愛国者であります。“仏教の真理は日本に現われる。日蓮に現われるというところに、日蓮の愛国心があるのだ”と、樗牛が論じています。」



内ヶ崎作三郎

講演会の終りに臨み、冥想の松保存会長の萱場四郎（資郎）が締めくくりに挨拶をしている。

「時まさに非常の時局に際し、今や日本は東亜のみならず、世界指導の立場に立たねばならないのではと考えられます。物心両面とも今日程優れた人材を望んでる時はないと思います。どうか今後、あの冥想の松の下に杖を引かれる方々は、偉人がいかに歴史を作り、天才がいかに文化の水準を高めるものであるかをよく認識されまして、あらゆる部門における、第二、第三の天才があつた松から輩出されんことを切に私は祈るのであります。」と結んでいる。

同日午後6時より、向山茶寮に講演者を招き、座談会が催された。それぞれの方々から永見みち子、里子（樗牛婦人）、はつ子（樗牛の旧制二高教授時代、寄宿先の娘）らの女性と樗牛の関わりが話題の中心となり、座は盛り上がったようである。

以上をもって「高山樗牛冥想の松」記念碑除幕式関連の行事が無事終了した。

9. むすび

高山樗牛は若干32才で逝去したが、仙台には旧制二高生時代と二高教授時代、併せて7年半滞在した。人生の約4割を仙台で過ごしたことになる。

萱場資郎は高山樗牛と直接会っていないが、土井晚翠を通して、樗牛の思想、信条に理解を深めていった時期があるのではと思われる。特に高山樗牛が死期を迎える数年前に、欧米列強に対する対峙法や日本主義を提唱していたこと、更には日蓮研究に傾斜していった一連の思考過程や、宗教観に対して強い関心を寄せていたことから推量される。また、萱場資郎が「高山樗牛冥想の松」記念碑を建立した昭和16（1941）年6月1日頃は、既に臨戦体制に入っている時期でもあり、萱場資郎が軍需産業の最前線に立っていたことを考えると、高山樗牛の右傾化思想に同意こそすれ、異論を差し挟む余地はなかつたものと考えられる。

高山樗牛は死期を迎えて日蓮宗に帰依し、静岡県清水市の散華寺に埋葬するよう希望した。萱場資郎も東京都太田区の日蓮宗池上本門寺に眠っていることを考え合せると、高山樗牛の思想、信条に影響を受けた部分は、想像以上に大きかつたのではと考えられるが、なお推敲の余地がある。

「高山樗牛冥想の松」記念碑の建立は、萱場資郎にとって、ふるさと仙台の文化高揚の一環であり、自らの生甲斐を更に深めるものとなったようである。

参考文献

- (1)高山樗牛冥想の松：成田正毅、冥想の松保存会（昭和17年）。
- (2)独創開発の歩み・萱場資郎：カヤバ工業株式会社（昭和63年）。

鶴本 勝夫プロフィール TSURUMOTO, Katsuo

1942(昭和17)年、仙台市生まれ。
東北学院大学工学部機械工学科卒業(第1回生)。東北学院大学工学部助手、講師、助教授、教授を経て、現在東北学院大学名誉教授。

宮城中会記録

新潟で伝道活動をしていた押川方義は、1880（明治13）年仙台に伝道の拠点を移し基督教講義所を開設しました。その後、宮城県下にも伝道活動を展開し、1885（明治18）年には押川を議長として仙台、古川、石巻、岩沼の四教会をもって中会が組織されました。中会とは長老、牧師たちによって構成された教会会議のことをいいます。

東北学院には貴重な中会記録が多数保存されています。



第一回宮城中会（前列中央が押川方義）

労働会会員名簿と日誌

労働会とは、学生たちが働きながら学び、自給自立を図るための寄宿制の組織です。押川方義を慕って遠隔の地から集まった多くの人材に勉学の機会を与えました。1892（明治25）年に発足し、初めは押川個人の運営に頼っていましたが、のちに理事局の管理のもとに移され、1921（大正10）年の廃止まで東北学院の発展に大きく貢献しました。

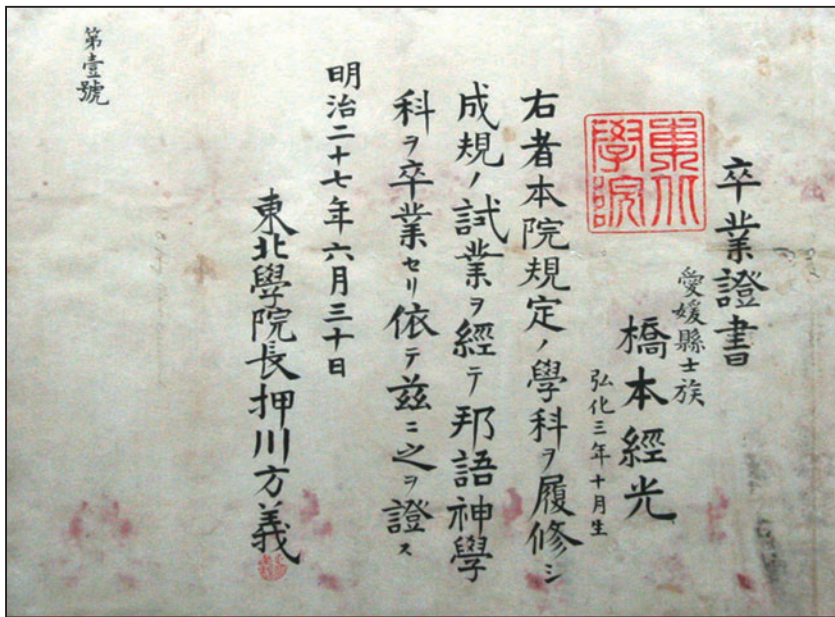
業種は農業、洗濯、書籍、配達、牧場など多岐にわたっていました。学生は一日数時間の労働を行い、労働会はその事業収益によって会員の学資や食費を弁じる、というものでした。その気風は高校、大学の二部に受け継がれました。

1896（明治29）年3月の労働会会員は82名。東北学院の総生徒数154名の半数以上を労働会員が占めていたこととなります。



働く生徒たち

東北学院卒業証書第一号



1894（明治27）年に東北学院を卒業した橋本経光の卒業証書です。東北学院の前身仙台神学校は1891（明治24）年に名称を東北学院と改め、東北学院神学部が最初の卒業生を送り出すのが1894（明治27）年のことです。卒業生は5名で、主に東北地方の伝道に従事しました。

橋本経光は校祖押川方義の実兄で、後に仙台教会の牧師となりました。

経営学部、経済学部共生社会経済学科新設

平成21年度より経済学部経営学科は経営学部に移格、経済学部には共生社会経済学科が新設され、それぞれ新設記念行事が行われた。

5月15日には経営学部新設記念シンポジウム&祝賀会、5月16日には共生社会経済学科開設をお祝いする会、6月13日には「いま、なぜ共生社会なのか」と題して記念講演会とシンポジウムが開催された。また、10月17日には共生社会経済学科新設記念秋のコンサートも行われた。



同窓生によるシンポジウム「私のライフストーリーとビジネスの思い」



経営学部新設を記念して、オリジナルエコバッグを提案し販売した学生たち



経営学部新設記念祝賀会



共生社会経済学科新設記念シンポジウム
「いま、なぜ共生社会なのか」



シンポジウムに先立って行われた講演会講師の金子勝氏



共生社会経済学科新設記念『秋のコンサート』（演奏：弦楽四重奏団アルパトロス）

オリエンテーション・リーダー会50周年記念祝賀会開催



開会のあいさつをする戸田征夫記念祝賀会実行委員長

昭和35年、全国の大学に先がけて新入生に対するオリエンテーション行事が本学に導入されてから50年の歳月が流れた。9月19日、約350人のリーダー経験者や関係者が集い、50周年記念祝賀会が盛大に開催された。



祝賀会実行委員会



思い出を語る元学生部職員



参加者が輪になり校歌を歌う

東北学院榴ヶ岡高等学校創立50周年記念式典・祝賀会開催



記念式典

昭和34年、東北学院高等学校榴ヶ岡校舎として榴ヶ岡公園の一角に誕生した榴ヶ岡高等学校は平成21年創立50周年を迎えた。11月13日、記念式典・祝賀会が行われ、会場の仙台サンプラザには多くの同窓生が訪れ、半世紀の歩みに想いを馳せた。



式典であいさつをする久能博榴ヶ岡高等学校長



校歌斉唱



記念祝賀会



開学当時の写真に見入る在校生

東北学院大学博物館開館

11月18日、博物館の開館式が行われた。博物館は本学の教育、研究活動の中で蓄積された成果、知的財産を公開展示し、本学の活動をより広く地域社会に発信するための施設として、また学芸員資格課程の実習の拠点としての役割を担う。

館内には、多賀城市市川橋遺跡から出土した「墨書人面土器」をはじめ松島雄島海底採取板碑など、約200点の貴重な品が展示されている。



東北学院大学博物館（東側面）



テープカット
(左より辻秀人博物館館長、星宮望大学長、平河内健治理事長)



「墨書人面土器」の説明に聞き入る



松島雄島海底採取板碑コーナー



押川家資料の研究コーナー（左下：ミセス・シュネーダーより寄贈された人形）

時 事

2009年1月～2010年3月

東北学院に関する主な時事		東北学院に関する主な時事	
2009年 1月	7日	中学校入学試験	生部長に辻秀人氏、就職部長に前田修也氏、入試部長に植松靖夫氏、情報システム部長に松澤茂氏が就任 大学学生安否確認システム運用開始／東北学院緊急地震速報システム稼働／大学授業時間帯変更
	8日	中学校入学試験合格発表	
	9日	TG推薦入学合格発表	
2月	15日	TG十五日会	6日 大学入学式 8日 中学校・高等学校入学式／前最高裁長官・法務研究科島田仁郎特任教授公開講義開催 9日 榴ヶ岡高校入学式 13日 幼稚園入園式 15日 TG十五日会 21日 幼稚園PTA総会 22日 北京オリンピックレスリング銅メダル浜口京子さん中学校・高等学校を訪問 25日 せんだい・杜の都親善大使に本学言語文化学科3年の千葉昂子さん／中学校・高等学校奨学会総会 28日 榴ヶ岡高等学校奨学会総会
	16日	外国人留学生歓送会	
	17日	大学入試センター試験（～18日）	
3月	29日	細谷良夫教授最終講義	12日 中学校・高等学校運動会 13日 大学春季宗教教育強調週間特別伝道礼拝（～14日） 14日 宮城県工業系大学・高等学校懇談会／大学体育会入会式・結団式 15日 創立123周年記念式／墓前礼拝／TG十五日会／平成21年度同窓会代議員会 経営学部新設記念シンポジウム&祝賀会 16日 大学後援会総会／共生社会経済学科開設をお祝いする会開催 19日 幼稚園遠足 20日 名誉教授称号記授与式 25日 日本研究夏季講座（～6月12日）
	31日	法科大学院後期日程入学試験（～2月1日）	
	1日	大学一般入学試験前期日程（～3日）	
4月	2日	榴ヶ岡高等学校入学試験	1日 6月1日付人事異動に伴う辞令交付式 6日 対青山学院大学総合定期戦（本学主管）（～8日）／県高校総体（～8日） 12日 TG十五日会／日本研究夏季講座修了式／秋田地区大学オープンキャンパス 13日 市中学校総体（～15日）／共生社会経済学科開設記念講演会（金子勝氏）・シンポジウム開催 18日 青森地区大学オープンキャンパス 19日 対北海学園大学総合定期戦（～21日）／八戸地区大学オープンキャンパス 20日 レクチャーコンサート「時代の音」（第1回）開催 25日 進学指導者と大学との懇談会開催／大学院博士前期課程及び修士課程特別選考入学試験（A日程） 27日 文学・経済・経営・法学部（土樋）、工学部オープンキャンパス（多賀城）
	4日	高等学校入学試験／大学就職部主催「企業研究セミナー」開催（～5日）	
	6日	榴ヶ岡高校入学試験合格発表	
5月	7日	高等学校入学試験合格発表	2日 FD研修会開催 3日 大学院博士前期課程及び修士課程特別選考入学試験（A日程）合格発表
	11日	大学一般入学試験前期日程・センター試験利用入学試験前期・外国人留学生特別入学試験合格発表	
	12日	TG推薦入学誓約式	
6月	13日	法科大学院後期日程入学試験合格発表／TG十五日会	
	18日	大学院春季入学試験（～19日）	
	27日	大学院春季入学試験合格発表	
7月	2日	高等学校卒業式／榴ヶ岡高等学校卒業式	
	5日	転学部・転学科試験、編入学試験B日程、夜間主コース社会人特別入学試験B日程、再入学試験	
	6日	大学一般入学試験後期日程	
8月	7日	平河内健治教授最終講義	
	13日	大学一般入学試験後期日程、センター利用入学試験後期、夜間主コース社会人特別入学試験B日程、編入学試験B日程、転学部・転学科試験、再入学試験合格発表／TG十五日会	
	17日	幼稚園卒園式	
9月	19日	大学「総合講座おもてなしの経営学」締結式	
	21日	一関市との教養学部地域プロジェクト講座開講（～6月下旬）	
	24日	大学卒業式・学位記授与式	
10月	25日	中学校卒業式	
	26日	大学博物館新築工事定礎式・献堂式／幼稚園保育室増築記念礼拝	
	31日	退職者辞令交付式	
11月	1日	経済学部共生社会経済学科、経営学部経営学科開設／大学院経営学研究科開設 役職者等辞令交付式／人事異動辞令交付式／新任職員辞令交付式 総務担当副学長に柴田良孝氏、学務担当副学長に齋藤誠氏が就任 経済学部長に原田善教氏、経営学部長に山本展雅氏が就任 庶務部長に佐藤範明氏、総務部長に日野哲氏、学	

東北学院に関する主な時事		東北学院に関する主な時事				
7月	4日	教養学部オープンキャンパス（泉）	11月	18日	大学博物館開館式	
	8日	指揮者野津如弘氏（平成9年高校卒）が中学校・高等学校を訪問		21日	東北学院文化講演会2009（札幌）	
	11日	中学校・高等学校オープンキャンパス	12月	4日	泉キャンパスクリスマス礼拝	
	15日	TG十五日会		11日	第60回公開東北学院クリスマス礼拝	
22日	大学学生特別表彰式	12日		レクチャーコンサート「時代の音」（第2回）		
22日	大学学生特別表彰式	15日		TG十五日会		
8月	1日	全学オープンキャンパス（泉）／（多賀城～2日）	2010年	17日	幼稚園クリスマス礼拝	
	17日	教員免許状更新講習会（～21日）		22日	中学校・高等学校、榴ヶ岡高等学校クリスマス礼拝	
	21日	幼稚園初のオープンキャンパス		1月	24日	職員クリスマス礼拝
	22日	榴ヶ岡高等学校オープンキャンパス			7日	中学校入学試験
	29日	法科大学院前期日程入学試験（～30日）	8日	中学校入学試験合格発表／TG推薦合格発表		
9月	4日	榴ヶ岡高等学校“榴祭”（～5日）	9日	西武ライオンズ「岸投手を応援する会」開催		
	5日	中学校・高等学校“学院祭”（～6日）	15日	TG十五日会／外国人留学生歓送会開催（大学）		
	10日	新司法試験合格発表・本学法科大学院生4名合格／大学合同企業セミナー開催 「アジア環太平洋初期キリスト教会国際研究集会」本学を会場として開催（～12日）	16日	大学入試センター試験（～17日）		
	11日	法務研究科前期日程入学試験合格発表／中国教育部訪日団が教育行政の日中間交流の一環として本学訪問	18日	飛び入学で千葉大学に合格（高等学校2年青田淳さん）		
	15日	TG十五日会	27日	守屋嘉美、平田隆一、香坂昌紀教授最終講義		
	19日	大学オリエンテーション・リーダー会五十周年記念祝賀会開催／幼稚園運動会	30日	法科大学院後期日程入学試験（～31日）		
	26日	大学院特別選考（B日程）入学試験および秋季入学試験	2月	1日	大学一般入学試験前期日程（～3日）／高等学校入学試験	
	27日	多賀城市（包括連携協定）で「市民フォーラム」開催／中学校1年生進路学習（TGハローワーク）開催		3日	榴ヶ岡高等学校入学試験	
	30日	9月期卒業証書・学位記授与式		4日	高等学校入学試験合格発表	
	10月	2日		世界的な理論物理学者菅原寛孝氏中学校・高等学校を訪問	6日	榴ヶ岡高校入学試験合格発表
6日		大学秋季宗教教育強調週間特別伝道礼拝（～7日）		8日	大学企業研究セミナー開催（～10日）	
10日		工学部祭（～11日）・工学部オープンキャンパス	11日	大学一般入学試験前期日程・センター試験利用入学試験前期・外国人留学生特別入学試験合格発表		
11日		泉キャンパス祭（～12日）・教養学部オープンキャンパス	12日	法科大学院後期日程入学試験合格発表／レクチャーコンサート「時代の音」（第3回）		
15日		TG十五日会	15日	TG推薦誓約式		
16日		六軒丁祭（～18日）	16日	TG十五日会		
17日		ホームカミングデー開催／共生社会経済学科新設記念「秋のコンサート」開催	17日	大学院春季入学試験（～18日）		
20日		バイオテクノロジー・リサーチ・コモン棟新築工事起工式	26日	大学院春季入学試験合格発表		
27日		中学校1年生進路学習「TGハローワーク」	3月	1日	高等学校卒業式／榴ヶ岡高等学校卒業式	
30日		文学部改組（2011年度に総合人文学科設置）記者会見		4日	転学部・転学科試験、編入学試験B日程、夜間主コース社会人特別入学試験B日程、再入学試験	
31日	幼稚園造形展（～11月1日）	5日		大学一般入学試験後期日程		
11月	12日	旧司法試験最終合格者発表本学1名合格		12日	大学一般入学試験後期日程、センター利用入学試験後期、夜間主コース社会人特別入学試験B日程、編入学試験B日程、転学部・転学科試験、再入学試験合格発表	
	13日	榴ヶ岡高等学校創立五十周年記念式典・祝賀会		16日	TG十五日会／幼稚園卒園式	
	17日	TG十五日会	24日	大学卒業式・学位記授与式		
				25日	中学校卒業式	
				26日	バイオテクノロジー・リサーチ・コモン棟新築工事定礎式・献堂式	
				31日	退職者辞令交付式	

受贈図書資料一覧

2009年1月～2010年3月

日付	寄贈者	受贈資料
2009.3	慶應義塾	写真集 慶應義塾150年
2009.3	追手門学院	追手門学院百二十年志
2009.6	京都大学大学文書館	『第三高等学校関係資料』解説・目録
2009.6	京都精華大学	京都精華大学四〇年史
2009.6	全国大学史資料協議会 東日本部会	全国大学史資料協議会東日本部会二十年の歩み
2009.7	仙台市	仙台市史 通史編7 近代2
2009.7	水沼淑子	ジェイ・H・モーガン：アメリカと日本を生きた建築家
2009.8	広島大学文書館	被爆地広島の復興過程における新聞人と報道に関する調査研究
2009.8	立教学院	立教関係記事集成〈抄訳付〉第1巻
2010.1	龍谷大学	龍谷大学三七〇年の歩み
2010.1	学校法人武蔵野美術大学	武蔵野美術大学のあゆみ 1929－2009
2010.1	専修大学	専修大学の歴史
2010.1	学校法人関東学院	関東学院125年史
2010.1	学校法人関東学院	関東学院の源流を探る
2010.1	学校法人大阪国際学園	大阪国際学園創立80周年記念誌
2010.2	東北大学	東北大学百年史 9 資料 2
2010.3	東北大学	東北大学百年史 11 資料 4
2010.3	東北大学	東北大学百年史 3 通史 3
2010.3	学校法人桃山学院	桃山学院創立125周年記念誌
2010.3	鈴木昭子	鈴木和郎遺稿・追悼集
2010.3	土生慶子	伊達氏の源流の地
2010.3	東洋英和女学院	カナダ婦人宣教師物語

※主な受贈資料のみを掲載

資料室来室状況

2009年1月～2010年3月

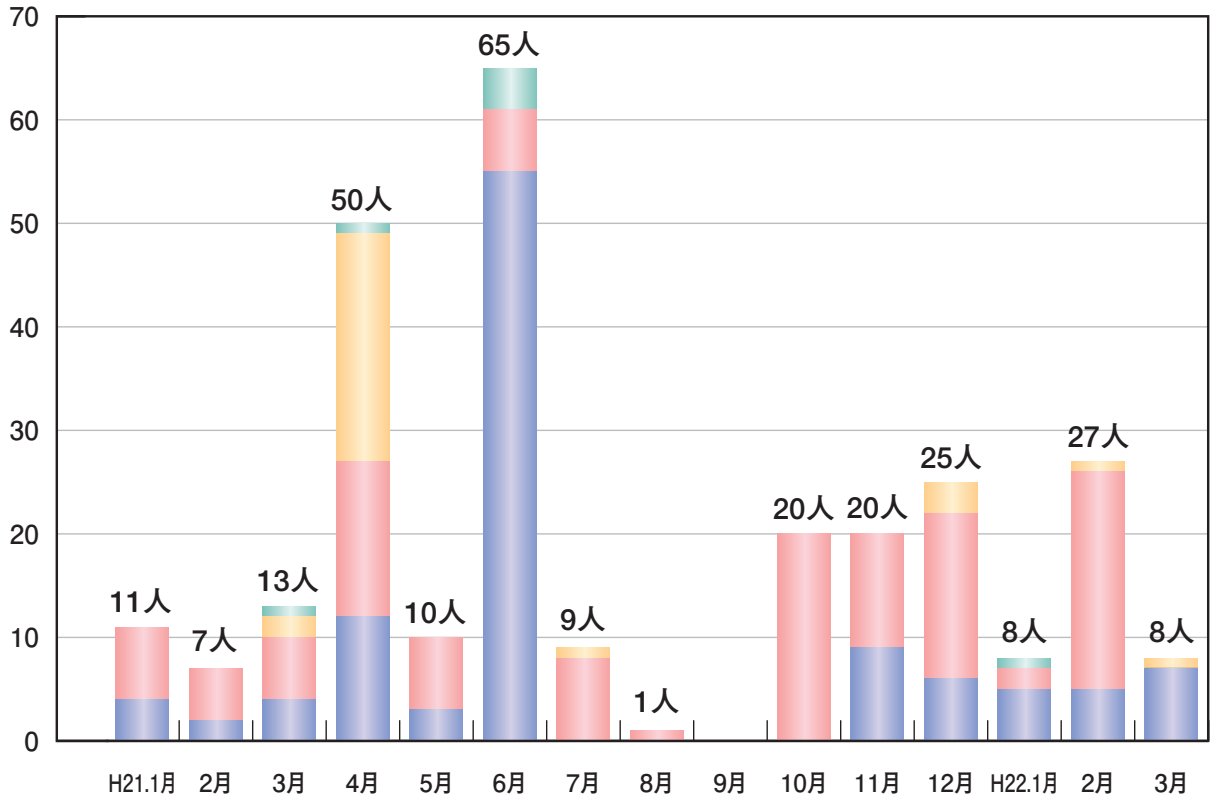
2009年

- 1月13日 白石市教育委員会生涯学習課 (2名)
- 4月14日 河西晃祐ゼミ学生 (17名)
- 4月18日 東北学院大学卒業生 (4名)
- 6月25日 私立大学キャンパスシステム研究会 (28名)
- 6月27日 オープンキャンパス (28名)
- 7月13日 東北学院大学卒業生 (3名)
- 10月17日 ホームcomingデー (20名)
- 12月11日 公開クリスマス (8名)
- 12月12日 東北学院大学卒業生 (2名)

2010年

- 2月19日 宮古・釜石支部 (17名)
- 3月25日 シュネーダー先生ご親戚の方 (2名)

月別利用者数



(8・9月は耐震工事のために閉室)

東北学院の沿革

年代	歴代役職者	事項
1886(明治19)年		W.E.ホーイ仙台着任(1月)。押川方義、W.E.ホーイ兩名により、キリスト教伝道者養成の目的をもって仙台市木町通に「 仙台神学校 」開設(5月)。教師2名、生徒6名で始まった。E.R.プルポー、M.B.オールドが来日(7月)、宮城女学校を創立(9月)。
1887(明治20)年		東二番丁の本願寺別院跡を取得し、仙台教会と仙台神学校を移転(5月)。
1888(明治21)年		D.B.シュネーダー夫妻仙台着任(1月)。オールド記念館落成(11月)。
1891(明治24)年	 押川方義	南町通りに仙台神学校校舎が完成(9月)。校名を「 東北学院 」と改称し、神学生のみに限らず、広く生徒を募集し、普通科を設置。予科2年・本科4年・神学部3年とする。
1892(明治25)年		労働会創設(3月)。東北学院理事局を組織、初代院長に押川方義、副院長・理事局長にホーイ就任(8月)。東北学院開院式(11月)。
1895(明治28)年	 W.E.ホーイ	予科・本科を改組し、普通科5年、その上に専修部(文科・理科)2年を設置。
1896(明治29)年		島崎春樹(藤村)、作文・英語教師として着任。
1898(明治31)年		理科専修部を廃止。
1900(明治33)年		第2代理事局長にD.B.シュネーダー就任(10月)。
1901(明治34)年	 D.B.シュネーダー	第2代院長にD.B.シュネーダー就任。普通科長に笹尾衆太郎就任(4月)。普通科に制帽を制定。徽章TG章制定。
1903(明治36)年		東北学院同窓会結成。
1904(明治37)年	 笹尾衆太郎	全校を普通科(5年)と専門学校令による専門科(3年)とに分け、専門科に文学部と神学部とを置く。専門科長に出村悌三郎就任(4月)。
1905(明治38)年		専門科を専門部、文学部を文科、神学部を神学科と改称。 東二番丁に普通科校舎完成 。専門部に角帽を制定。徽章は全校TG章を用いる。普通科長に田中四郎就任(9月)。
1906(明治39)年	 田中四郎	普通科寄宿舎完成。
1908(明治41)年		「 社団法人東北学院 」設置。創立記念日を5月15日に定める。同窓会会報第1号発行。
1910(明治43)年		校旗制定。
1911(明治44)年		創立25周年記念式典挙行 。
1915(大正4)年		普通科を中学部と改称(5月・生徒数357名)。中学部長は田中四郎。
1916(大正5)年		『 東北学院時報 』創刊(1月)。南六軒丁(現大学土樋キャンパス)に専門部校地取得。
1918(大正7)年		専門部を改組、神学科・文科・師範科・商科とする。



年代	歴代役職者	事項	
1919(大正8)年	 五十嵐正	仙台大火のため中学部校舎・寄宿舎全焼(3月)。仮校舎建築(9月)。	
1920(大正9)年		中学部長に五十嵐正就任(1月)。	
1921(大正10)年		創立35周年記念式典挙行。	
1922(大正11)年		中学部校舎再建(6月)〈東二番丁・通称赤レンガ校舎〉。中学部寄宿舎再建。	
1923(大正12)年		東北学院教会設立(5月)。	
1925(大正14)年		神学科を専門部より分離し、神学部(第1科・第2科)とする。専門部は文科、師範科、商科となる。	
1926(大正15)年		南六軒丁に専門部校舎完成(現土樋本館)、9月より使用。創立40周年記念式ならびに専門部校舎落成式を挙行(10月)。	
1928(昭和3)年		専門部3科とも予科を廃し、4年制とする。ハウスキーパー記念社交館完成(3月)。	
1929(昭和4)年		専門部を高等学部と改称。神学部第2科を廃止、第1科を神学部本科と改称し、3年の予科を置く。「財団法人東北学院」と改組(8月)。	
1930(昭和5)年		高等学部師範科に専攻科1年を置く。	
1932(昭和7)年		高等学部は3学期制を2学期制に改める。ラーハウザー記念東北学院礼拝堂完成(3月)。労働会寄宿舎を廃止。中学部寄宿舎を廃止し、神学部寄宿舎をその跡に移す。	
1933(昭和8)年		高等学部制帽を角帽より丸帽に改める。	
1934(昭和9)年		神学部、南六軒丁ブラッドショウ館に移る。	
1936(昭和11)年	 出村悌三郎	高等学部文科を文科第一部、師範科を文科第二部と改称。創立50周年記念式典を挙行。院長シュネーダー、「我は福音を恥とせず」と題する説教を行う。第3代院長に出村悌三郎就任(5月)。旧労働会建物および敷地を売却。第3代理事長にE.H.ゾーグ就任(6月)。	
1937(昭和12)年	 E.H.ゾーグ	神学部廃止、日本神学校と合同(3月)。高等学部は3年制となる。高等学部長にゾーグ就任(4月)。	
1938(昭和13)年		中学部長に田口泰輔就任(4月)。	
1939(昭和14)年	 田口泰輔	中学部長に出村剛就任(4月)。	
1940(昭和15)年		南町通り旧神学部校舎および敷地を売却。東北学院維持会を組織。花淵浜高山に修養道場建築用地を取得。第4代理事長に出村悌三郎就任(10月)。	
1941(昭和16)年	 小泉要太郎	高等学部長に出村剛、中学部長に小泉要太郎就任(4月)。	
1942(昭和17)年		高等学部商科第二部および中学部第二部を設置(ともに夜間)。	
1943(昭和18)年		高等学部商科を高等商業部、中学部を東北学院中学校と改称。中学校長に出村悌三郎院長が兼務(4月)。	

年代	歴代役職者	事項
1944(昭和19)年	 杉山元治郎	航空工業専門学校設置。航空工業専門学校長に宮城音五郎就任(4月)。第5代理事長に杉山元治郎就任(6月)。
1945(昭和20)年		中学校長に出村剛就任(4月)。航空工業専門学校を工業専門学校と改称(12月)。中学校校舎空襲により焼失。
1946(昭和21)年	 出村剛	高等商業部および同第二部を廃止(3月)。東北学院専門学校(英文科・経済科)および同第二部を設置。第4代院長に出村剛就任。中学校長に月浦利雄就任(4月)。専門学校長に出村剛就任(4月)。
1947(昭和22)年		工業専門学校廃止。新制中学校設置。専門学校校舎木造2階建4教室増築完成。第6代理事長に鈴木義男就任(7月)。
1948(昭和23)年	 月浦利雄	新制高等学校、同第二部を設置。月浦利雄同校等学校長ならびに中学校長兼任(4月)。専門学校長に小田忠夫就任(4月)。
1949(昭和24)年		東北学院専門学校から新制大学に昇格。東北学院大学文経学部(4年制、英文学科・経済学科)を設置。小田忠夫初代学長に就任。東九番丁寄宿舍完成。
1950(昭和25)年	 A.E.アンケニー	専門学校二部を東北学院短期大学部(2年制、英文科・経済科)と改称。第5代院長にA.E.アンケニー就任(3月)。
1951(昭和26)年	 鈴木義男	「学校法人東北学院」と改組。専門学校を廃止。短大別科を設置。第6代院長に小田忠夫就任。中高理科教室鉄筋コンクリート3階建完成。
1952(昭和27)年		短期大学部に法科を設置。
1953(昭和28)年	 A.E.アンケニー	中学高等学校分離、中学校長に五十嵐正躬就任(4月)。総合運動場を多賀城に開設。シュネーダー記念東北学院図書館完成(10月)。
1954(昭和29)年		多賀城第2寄宿舍完成。
1955(昭和30)年	 小田忠夫	創立70年記念式典挙行。中学校校舎鉄筋コンクリート3階建9教室完成。『東北学院創立七十年写真誌』を刊行(5月)。在米同窓生、創立70年記念として鐘を寄贈(12月)。蔵王にTGヒュッテ「栄光」完成。
1956(昭和31)年	 五十嵐正躬	中学・高等学校体育館完成(3月)。W.E.ホーイ碑、出村悌三郎墓を北山墓地に建立(4月)。大学音楽館完成(10月)。
1958(昭和33)年		中学校赤レンガ校舎は都市計画により9教室を失う(4月)。中学・高等学校鉄筋コンクリート造4階建8教室完成(4月)。大学体育館「アセンブリー・ホール」完成(9月)。
1959(昭和34)年		中学高等学校一本化、中学校長に月浦利雄高等学校校長兼務(1月)。短期大学部を東北学院大学文経学部二部(英文学科・経済学科)に改組。高等学校榴ヶ岡校舎を開設。『東北学院七十年史』を刊行(7月)。大学研究棟鉄筋コンクリート造4階建完成(9月)。自然科学研究室青根分室を開設(10月)。
1960(昭和35)年		短期大学部を廃止(3月)。
1961(昭和36)年		文経学部英文学科に専攻科を設置。
1962(昭和37)年		多賀城町(現多賀城市)に東北学院大学工学部(機械工学科、電気工学科、応用物理学科)を設置。同校地に東北学院幼稚園を開設。初代幼稚園長に小田忠夫院長が就任(4月)。



年代	歴代役職者	事項
1963(昭和38)年	 山根篤	押川記念館完成(2月)。工学部寄宿舎開設。大学オーディオ・ヴィジュアルセンター完成。野間記念剣道場完成(7月)。第7代理事長に杉山元治郎就任(9月)。
1964(昭和39)年		東北学院大学文経学部一部・二部を文学部一部・同二部および経済学部一部・同二部に改組。大学院文学研究科英語英文学専攻修士課程を設置。大学64年館完成(10月)。第8代理事長に山根篤就任(11月)。
1965(昭和40)年		東北学院大学法学部(法律学科)および大学院経済学研究科財政金融学専攻修士課程を設置。宮城郡泉町市名坂字天神沢(現仙台市泉区天神沢)に10万坪の校地を取得(5月)。同窓会にTG15日会発足(5月15日)。工学部4号館完成(10月)。中学校新校舎、中高礼拝堂完成(11月)。大学土樋寄宿舎完成。
1966(昭和41)年		大学院文学研究科英語英文学専攻博士課程、工学研究科応用物理学専攻修士課程を設置。創立80周年記念式典挙行。大学66年館完成(6月)。大学泉寄宿舎完成。青根セミナーハウス完成。
1967(昭和42)年		工学部に土木工学科を増設。大学院経済学研究科財政金融学専攻修士課程を経済学研究科経済学専攻修士課程に改組。大学67年館完成(5月)。中学・高等学校向山寄宿舎開設。中学・高等学校運動部室完成(3月)。
1968(昭和43)年		大学院経済学研究科経済学専攻博士課程、工学研究科応用物理学専攻博士課程を設置。工学部5号館・6号館完成(3月)。大学新研究棟68年館完成(8月)。中学・高等学校弓道場完成(3月)。『東北学院大学学報』第1号創刊。
1969(昭和44)年		第9代理事長に月浦利雄就任(3月)。工学部旭ヶ丘寄宿舎開設。
1970(昭和45)年		工学部校地に東北学院プール完成。
1971(昭和46)年	 二関敬	大学院工学研究科機械工学専攻修士課程、電気工学専攻修士課程を設置。倉石ヒュッテ完成。中学高等学校長に二関敬就任(9月)。榴ヶ岡高等学校長に五十嵐正躬就任(9月)。大学文団連棟焼失(9月)。
1972(昭和47)年		榴ヶ岡高等学校として独立(4月)。高山セミナーハウス完成(7月)。泉市市名坂(現仙台市泉区市名坂)に榴ヶ岡高等学校校舎が完成移転(8月)。榴ヶ岡高等学校体育館完成(12月)。
1973(昭和48)年		東北学院同窓会館完成(4月)。米国アーサイナス大学に第1回夏期留学生を派遣。中学・高等学校寄宿舎完成。幼稚園長に渡辺平八郎就任(7月)。
1974(昭和49)年		大学院工学研究科機械工学専攻博士課程および電気工学専攻博士課程設置。第10代理事長に小田忠夫就任(3月)。
1975(昭和50)年		大学院法学研究科法律学専攻修士課程設置。大学67年館増築完成(6月)。
1976(昭和51)年		創立90周年記念式典挙行。
1977(昭和52)年	 田口誠一	中学・高等学校長に田口誠一就任(4月)。榴ヶ岡高等学校長に小田忠夫院長兼任(4月)。
1978(昭和53)年		大学90周年記念館完成(2月)。榴ヶ岡高等学校長に清水浩三就任(4月)。中学・高等学校赤レンガ校舎、宮城県沖地震のため一部倒壊(5月)。TGヒュッテ焼失(8月)。ラーハウザー記念東北学院礼拝堂(土樋キャンパス礼拝堂)に新パイプオルガンを設置(11月)。
1979(昭和54)年		大学院法学研究科法律学専攻博士後期課程を設置。工学部計算センター完成(3月)。中学・高等学校赤レンガ校舎見送り式(3月)。大学78年館および部室棟完成(9月)。TGヒュッテ再建(10月)。東北学院展開催(十字屋仙台店・10月)。
1980(昭和55)年	 清水浩三	中学・高等学校シュネーダー記念館完成(3月)。工学部機械工場および機械実験棟完成

年 代	歴代役職者	事 項
		(3月)。榴ヶ岡高等学校礼拝堂及び北校舎完成(8月)。泉校地総合運動場および管理センター完成(9月)。中学・高等学校文化部室完成(9月)。
1981(昭和56)年		大学81年館完成(3月)。『東北学院報』発刊(東北学院大学学報を改称)(4月)。情報処理センター設置。総合運動場プール完成(5月)。榴ヶ岡高等学校第1回海外研修(8月)。工学部体育館完成(10月)。
1982(昭和57)年	 情野鉄雄	米国アーサイナス大学と国際教育交流協定を締結。 第7代院長・第2代大学長に情野鉄雄就任(4月) 。第11代理事長に児玉省三就任(4月)。図書館工学部分館完成(11月)。
1983(昭和58)年		高校第二部廃止(3月)。榴ヶ岡高等学校校舎増築完成(3月)。工学部礼拝堂完成(10月)。
1984(昭和59)年	 児玉省三	新シュネーダー記念図書館完成(11月)。中学・高等学校第1回海外研修(7月)。
1985(昭和60)年		大学整備計画案(教養部泉校地移転など)公表(1月)。旧シュネーダー記念東北学院図書館を大学院校舎に改装(11月)。幼稚園新園舎完成(12月)。
1986(昭和61)年		創立100周年記念式典挙行 。米国フランクリン・アンド・マーシャル大学と国際教育交流協定を締結。榴ヶ岡高等学校北校舎増築完成(3月)。
1987(昭和62)年	 宗方司	中学・高等学校長に宗方司就任(4月)。榴ヶ岡高等学校長に半澤義巳就任(4月)。中学・高等学校体育館武道館完成(12月)。
1988(昭和63)年		大学泉キャンパス完成、大学教養部を移転 。榴ヶ岡高等学校礼拝堂増築完成(3月)。幼稚園長に橋本清就任(4月)。
1989(平成元年)	 半澤義巳	泉キャンパスに教養学部(教養学科人間科学専攻・言語科学専攻・情報科学専攻)を設置 。幼稚園長に新妻卓逸就任(4月)。『東北学院百年史』発刊(5月)。
1990(平成2)年	 武藤俊男	大学院工学研究科土木工学専攻修士課程を設置。
1991(平成3)年		多賀城キャンパス1号館完成(3月)。榴ヶ岡高等学校部室棟完成(3月)。中学・高等学校長に武藤俊男就任(4月)。中学・高等学校社会科教室完成(7月)。
1992(平成4)年		大学院工学研究科土木工学専攻博士後期課程を設置。榴ヶ岡高等学校柔道・剣道場および校舎増築完成(4月)。第12代理事長に情野鉄雄就任(6月)。
1993(平成5)年		工学部2号館完成。中学・高等学校移転決定(3月)。
1994(平成6)年		大学院人間情報学研究科人間情報学専攻修士課程を設置。
1995(平成7)年	 倉松功	榴ヶ岡高等学校を男女共学制に移行。 第8代院長に田口誠一就任。第3代大学長に倉松功就任(4月) 。
1996(平成8)年		大学院人間情報学研究科人間情報学専攻博士後期課程を設置。榴ヶ岡高等学校家庭科実習棟完成(2月)。榴ヶ岡高等学校長に脇田睦生就任(4月)。榴ヶ岡高等学校第1回ホームカミングデー実施。
1997(平成9)年	 脇田睦生	大学院文学研究科ヨーロッパ文化史専攻修士課程、アジア文化史専攻修士課程を設置。ドイツのヴィースバーデン大学と学生交換に関する協定締結。工学部運動場等新設。
1998(平成10)年		幼稚園長を田口誠一院長が兼務(4月)。韓国の平澤大学校(5月)、中国の南開大学(11月)と国際教育研究交流に関する協定締結。高山セミナーハウス閉鎖。
1999(平成11)年		大学院文学研究科ヨーロッパ文化史専攻博士後期課程、アジア文化史専攻博士後期課程を



年代	歴代役職者	事項
2000(平成12)年		<p>設置。大学設置50周年記念式典を挙行。青根セミナーハウス閉鎖。第13代理事長に田口誠一就任(4月)。</p> <p>文学部英文学科、経済学部経済学科と商学科に昼夜開講制を導入。文学部二部英文学科と経済学部二部経済学科は募集停止。幼稚園長に長谷川信夫就任(4月)。土樋キャンパス8号館(押川記念ホール)・体育館完成(9月)。ホームカミングデー(同窓祭)開始。大学設置50周年記念事業(講演会・シンポジウム・シンボルマーク決定)を実施。仙台市宮城野区小鶴地区に中学・高等学校移転校地取得(3万1千坪)。</p>
2001(平成13)年	 <p>出原 莊三</p>	<p>文学部基智教学科をキリスト教学科に、経済学部商学科を経営学科に、教養学部教養学科言語科学専攻を言語文化専攻に改称(4月)。東北学院資料室開設(5月)。東北学院シーサイドハウス完成。</p>
2002(平成14)年	 <p>杉本 勇</p>	<p>工学部機械工学科を機械創成工学科に、電気工学科を電気情報工学科に、応用物理学科を物理情報工学科に、土木工学科を環境土木工学科にそれぞれ改称。大学院経済学研究科に経営学専攻修士課程を設置。中学・高等学校長に出原 莊三就任。榴ヶ岡高等学校長に杉本勇就任(4月)。</p>
2003(平成15)年	 <p>赤澤 昭三</p>	<p>第14代理事長に赤澤昭三、第9代学院長および同窓会長に倉松功就任(4月)。幼稚園長に長島慎二就任(4月)。東北学院同窓会100周年記念式典挙行(11月)。韓国の大仏(ダブル)大学校と学術交流および教育協力に関する国際協定締結。</p>
2004(平成16)年	 <p>星宮 望</p>	<p>法科大学院・総合研究棟完成(2月)。第4代大学長に星宮望就任(4月)。中学・高等学校長に松本芳哉就任(4月)。大学院法務研究科法実務専攻専門職学位課程(法科大学院)を設置(4月)。榴ヶ岡高等学校校舎増築(4月)。オーストラリアのニューサウスウェールズ大学と学術交流および教育協力に関する国際協定締結。カナダのビクトリア大学と学術交流および教育協力に関する国際協定締結。フランスのサヴォア大学と学術交流および教育協力に関する国際協定締結。</p>
2005(平成17)年	 <p>松本 芳哉</p>	<p>中学・高等学校新校舎完成(仙台市宮城野区子鶴)(1月)。東北学院同窓会館閉館(3月)。文学部史学科を歴史学科に、教養学部教養学科人間科学専攻、言語文化専攻、情報科学科専攻を教養学部人間科学科、言語文化学科、情報科学科に改組し、教養学部地域構想学科を新設。(4月)。</p>
2006(平成18)年	 <p>久能 隆博</p>	<p>工学基礎教育センター完成(3月)。工学部機械創成工学科を機械知能工学科に、物理情報工学科を電子工学科に、環境土木工学科を環境建設工学科に改称(4月)。榴ヶ岡高等学校長に久能隆博就任(4月)。創立120周年式典挙行(5月)。ドイツのトリア大学と学術交流および教育協力ならびに学生交換に関する交流の協定締結。</p>
2007(平成19)年	 <p>永井 英司</p>	<p>中学・高等学校新寄宿舎完成。ハイテク・リサーチセンター完成(3月)。第10代学院長に星宮望就任(4月)。中学校・高等学校長に永井英司就任(4月)。秋田オープンキャンパス開催(7月)。多賀城市との連携協定締結式(11月)。</p>
2008(平成20)年	 <p>平河内 健治</p>	<p>第15代理事長に平河内健治就任(6月)。榴ヶ岡高等学校体育館・管理棟完成(9月)。教養学部創設20周年記念式典挙行・同窓会設立。東北学院大学博物館起工式(12月)。</p>
2009(平成21)年	 <p>平河内 健治</p>	<p>経済学部経営学科を経営学部昇格、経済学部共生社会経済学科を新設(4月)。大学院経営学研究科(修士課程)を設置(4月)。榴ヶ岡高校創立50周年記念式典挙行(11月)。東北学院大学博物館オープン(11月)。</p>



東北学院資料室規程

(設置および名称)

第1条 本院に、東北学院資料室(以下「資料室」という。)を置く。

(目的)

第2条 資料室は、本院に関する歴史を将来に伝承するとともに、「建学の精神」に関連する資料を収集・保存・展示し、本院の発展に資することを目的とする。

(事業)

第3条 資料室は、第2条の目的を達成するために、以下の事業を行う。

- 一 資料の収集、整理、および保存に関すること。
- 二 資料に関係する刊行物の編集および出版に関すること。
- 三 資料の展示および公開に関すること。
- 四 資料の閲覧および貸出に関すること。
- 五 資料に関係する情報の提供に関すること。
- 六 その他、必要と認められる事業に関すること。

(運営委員会の設置)

第4条 資料室の事業を運営するため、東北学院資料室運営委員会(以下「運営委員会」という。)を設ける。

(運営委員会の構成)

第5条 運営委員会は、次の者をもって構成する。

- 一 学院長
 - 二 総務担当副学長、宗教部長、総務部長、総務部次長、総務課長
 - 三 中学・高等学校副校長1名、榴ヶ岡高等学校副校長、中学・高等学校事務長、榴ヶ岡高等学校事務長、幼稚園教頭
 - 四 法人事務局長、庶務部長、庶務課長、広報課長
- 2 運営委員会は学院長が招集しその議長となる。
 - 3 運営委員会のもとに、必要に応じて実務委員会を設けることができる。実務委員は、運営委員会の議を経て委員長が任命する。
 - 4 運営委員会の事務は、広報課が行う。

(資料室の管理・事務)

第6条 資料室の管理・事務は、広報課がこれを行う。

(規則の改廃)

第7条 本規程の改廃は、運営委員会の議を経て理事会が行う。

附則

本規程は、2001(平成13)年4月1日から施行する。

附則

本規程は、2003(平成15)年4月1日から一部改正施行する。



資料室利用案内

東北学院資料室は、広く一般の方々にも開放しております。

開室時間

授業期間中

月～金 10:45～16:00
但し、昼休み時間(13:00～14:00)を除きます。

土 10:45～12:00
(日・祝祭日は閉室いたします。)

長期休暇(夏休み・冬休み・春休み)中

月～金 10:00～15:30
但し、昼休み時間(13:00～14:00)を除きます。
(土・日・祝祭日は閉室いたします。)



学校法人 東北学院

発行日 2010(平成22)年4月1日

編集 東北学院資料室運営委員会

発行 学校法人 東北学院

〒980-8511

仙台市青葉区土樋一丁目3番1号

TEL.022-264-6423 FAX.022-264-6478

<http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/>

印刷 東北堂印刷株式会社

